呪いの王

トンカチ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかと呪術廻戦のクロスオーバー。

もしもオラリオに六眼を持った最強の呪術師がいたらって話。

目次

血と血 1
毒 19
他言語 29
結界 40
影 52
骨 66
疾走 78
労働 92
花 105
攻略 119
特訓 131
警告 145
呪物 156
受肉 168
冒険 181
奮闘 193
談話 203
遭難 220
帰還 236
変異 247
臨界 260
冥灯 273

血と血

呪い。
人々の負の感情から発生するエネルギー『呪力』。
呪力は意思を持った『呪霊』と呼ばれる存在を発生させ、数多の人を殺した。
呪霊は呪力でしか祓えない。一般人には見ることはおろか触れることもできない。
そうやって呪霊の被害が猛威を振るう中、三千年前のある日に転機が訪れる。
世界に溢れる呪いの消滅。
人々は呪力から脱却し、さらには台頭する新たな力のコントロールが叶うこととなった。
しかし、これは自然に起こったわけではない。
この呪いの根絶はある男の計画が実行され、男がそれを成功させた結果でもあった。

俺はヒューマンの男。生まれた時の名前は忘れたが、今はラック・マーストンで通ってる。

俺は今、闘国（テルスキュラ）の闘技場。そのド真ん中に立っていた。
円形の闘技場の周りはぐるりと観客席に囲まれ、観客たちの歓声が降り注ぐ。
「お前がカーリー様の言っていた糧か！よく来たな！」
目の前には蛇みたいなアマゾネスの女。
好戦的な笑みを浮かべて、今にも駆けだして俺を殺しそうだ。
いったいどうしてこうなったのか、それは数時間前の事。

俺は特に当てもなく旅をしていた。
クソ熱い中歩き続け、磯の香りを感じて避暑地を求め香りの方角へと進んだ。
海の近くまで来ると、大きな岩。岩の上に人がいたので近づいてみると、そこにいた赤い髪の少女。
少女は岩に座って、足をパタパタさせて退屈そうにしていた。
明らかに怪しいけど、その少女に話しかけてみようかな。
「何してんだ？」
俺が声をかけると、少女は振り返った。
「別に何も？強いて言えば暇つぶしじゃな」
気さくに声をかけてきた少女は、少し大人びた雰囲気を纏っているように思える。

「こんなところに一人でいるなんて危ないぞ」
「大丈夫じゃよ。妾を襲うような命知らずはおらん」
少女はからからと笑う。俺もそこまで心配はしていない。
こんなところで子供が一人なのは怪しいが、この時は油断しまくっていた。
「ふーん。そうだ、観光名所とかないか？この辺りは初めてでさ」
「おお、それなら良い場所があるぞ！案内してやろうかの？」
「いいのか？」
「うむ、妾もそろそろ飽きてきていたところじゃ」
こうして俺は少女に連れられ歩き出す。
少女は楽しそうに俺と会話を続ける。
「その目隠し、前は見えるのか？」
「目がよくてね。ハッキリ見えるさ」
「ほう……便利なものじゃのう」
少女は大きな目を細めている。
そして、カーリーはポツリと呟く。
「……ラック。頼みたいことがあるんじゃが」
「なんだ？」

「見せたいところがあるんじゃ。ついてきてくれぬか？」
「いいけど、どこに行くんだ？」
「秘密の場所じゃ」
　そう言って、カーリーに連れられてきた場所は……

「マジか、騙されるとは……」
　そこは闘国の闘技場。
　あの少女は一番高い位置にある席で観戦している。
　少し目隠しをズラして少女を見てみる。呪力を含む他にもいろいろなものが混ざったエネルギー、神威ってやつか？てことは、さっきはわからなかったが、アイツは神。
　神には独特の気配があるはずなんだが、まったくわからなかった。
　あのとき目隠し外せば見破れたか？
「なにをブツブツと言っている。今更怖気づいたのか」
「んー。まぁそうね」
　俺は拳を前に出して戦闘の姿勢をとる。
「こういうのは、嫌いじゃないんだ。ほどほどに加減してやるからさっさとかかってこ

いよ、蛇女」
「ぬかせ！ガキが」
瞬間、俺と美女の間で激しい衝撃が走る。
轟音とともに俺の腕がベキベキと音を立ててへし折れた。
「おい。口のわりにその程度か？」
蛇女は俺をあざ笑いながら返り血を舐めとる。
「まさか、小手調べさ」
油断した。でも、折れた腕は直ぐに治せる。反転術式での折れた腕の治療はそこまで難しくない。
純粋な脳筋って感じだな。
さっきので血がいい感じに出ている。捻出するより動作は速く――――
「百斂」
俺は両手を合わせ、血液の加圧を始める。
近距離の、それも脳筋系の相手に近距離戦は得策じゃないだろ。
ならば、遠距離からちくちく攻めてやる。
「穿血」
百斂で圧縮した血液の一点集中からの解放。

打ち出された血の初速は音速を軽く超える。
「マジかー」
俺は思わず声を上げる。
流石と言うべきか。言動や佇まいは強者のソレ。
それでも、咄嗟に反応して身体を反らしてこれを避けた。
さらに、速度を殺すことなく最速で俺の目の前まで距離を詰める。
一瞬前までいた場所が大きく抉れるほどの脚力。
アレをまともに食らったら普通は即死する。
「初見殺しとかへこむんだけど」
「ふん。その技は初速だけ、避ければなんてことはない」
そりゃそうだ。
蛇女との攻防が始まる。
組んで、逸らして、受けて対応するが攻勢に転じる隙がない。
呪力でちゃんとガードしてもこいつの攻撃は少しダメージが通る。
それに、蛇女の体術はなかなか。
身体能力が俺より上だから、その差を使って攻めに転じさせない……
なら――――

「赤鱗躍動」
血中成分の操作で身体能力を大幅に増幅させる。
目元の三本の紋様が赤く煌めくのは綺麗なもの。
まあ、目隠しのせいでこいつには見えないだろうけど。
蛇女の攻撃を回避し攻撃範囲を見極めていく。
さて、この動きについてこれるか？
「面白い！身体強化のスキルか！」
蛇女の顔が喜色に染まる。
貫手、速っ！受けると死ぬな。
腕を脇下に通して挟みこむ。動きは制限した。このまま顔面に拳を叩きこむ。
「クッソマジかよ」
こいつ、赤鱗躍動と呪力で強化した拳を額で受けやがった。
「死ね！」
そこからまだ拳を叩きこもうとするのかよ。
組み付きはさっきので外された。
赤鱗躍動を使って身体能力は五分か……。
それでも、容赦するつもりはない。

「っ!?チッ」
蛇女舌打ちしながら俺の拳から距離を取る。
気付いたな。拳から血刃を射出し額を撃ち抜こうとしたことに。
赤血操術は血を操作する術式。
反転術式が使える俺には失血が無ければ、内部から射出した際に出来る傷も癒せる。
まあ、痛いは痛いが……。
それでもこの使い方は不意打ちだけで無く、真っ向勝負でも効果覿面になる。
「勘がいいな!」
腕を振るい、勢いをつけて血刃を伸ばす。
鞭のようにしなり、赤鱗躍動でブーストされた血刃の先端の速さは音速に迫る。
「クソッ!」
横薙ぎに一閃される血の刃。刃は常に内部で回転し、掠るだけでも肉が削がれる。
そしてこの女はそれに勘付いたみたいだな。頬に掠めつつも後ろに下がり射程外にまで下がった。
そして、遠距離での戦闘手段がないのは六眼で確認済み。
ここまで離れれば今度はコレの出番になる。
「百斂」

この構えに蛇女の思考に穿血が出たのだろう。
向かう穿血を反射で躱し、俺の懐に潜り込むつもりだろう。
穿血は蛇女の横を通り過ぎ、見事に俺の懐に潜り込んだ。
「超新星」
「なに?!」
撃ち放たれた穿血に、百斂で圧縮した血の球を潜ませた。
血の球は蛇女の後ろで爆ぜ、背中に散らされた血の弾丸の雨が降る。
「ガッ!?」
激痛に足が止まる瞬間。
超新星の勢いに加え、赤鱗躍動で肉体を強化。
その推進力の全てを腹に打ち込む。
「ガッ」
「おっ、まともなの入った」
蛇女は大きく仰け反るが、膝をつくこともなく反撃してきた。
俺は寸での所で回避し手首を掴む。
肘鉄で顔面に――――
「それを止めるのか！」

片方の手で肘を受け止め、蛇女は蹴りを放つ。
ガードは無理か。
俺は掴んでいた手を離し、一歩下がると血刃を広げ足に目掛けて振り下ろす。
「ツッ」
足の肉を削ぐことは出来た。
それでも骨を断つには至らない。
流石の耐久性を見せるが、足への攻撃に堪らずか大きく距離を取る。
「……フフ、ハハハハハ」
「？」
「お前、名前は？」
話は嫌いじゃないタイプか？
急に笑い出して、ザ・戦闘中毒者って感じ。死ぬまでやらされそう……
「ラック・マーストン」
「私はアルガナ・カリフ。お前、恩恵もなしに私とここまで張り合えるとはな」
「ん？そんな話したか？」
「いいや。だがお前にステイタスがないのは確かだ。しかし、私の攻撃を初見で避けるどころか、カウンターまで入れてくる。恩恵なしで私とこれだけ渡り合うとは」

楽しそうだな。
褐色の肌の女。周りも全員女か。闘技場ってことはこいつらはアマゾネス、ここはテルスキュラか……。
南に行き過ぎたな。海に来ただけだってのに……。
「カーリー様が連れて来た時、まさかここまでやるとは思わなかった。お前を喰らえということか……フフフ」
きもいなぁ～。
長々と話す意味ないだろ。
「もういいか？」
「ああ、いい！お前を殺して喰らってやる！そしていずれ、私は最強の戦士へと至る！」
来る！
拳の連打に蹴りを織り交ぜたラッシュ。
「くっそ」
俺はなんとか捌きつつ反撃の機会を窺う。
「どうした？さっきまでの勢いはどこにいった？」
「うるせぇな」
レベルとスキルに裏打ちされたパワーとスピード、それにタフネスか…。

変わった能力があるやつとは戦ってきたが、こういう単純に強いやつは本当に戦り難い。
俺は地面に足を打ちつけ硬度を確かめる。
イケるな。
「何の真似だァ!?」
「血刃」
血は地面を掻き分け、アルガナの足元から這い上がる。
「緩い!」
アルガナは血刃を片手で受け止めようと片手を開く。
血刃を地面から生やせたため、威力は伸びる血刃より低い。
でも、本命はそこじゃない。
「赤縛」
着弾と同時に血の刃は広がり、縄となってアルガナをその場に縛りつける。
さらに血を凝固させ、赤縛と接続する血を切り離す。残留する呪力で硬度は保たれたまま。
俺は即座に血液を圧縮し、血の弾薬を作る。
「ほんと疲れる」

百斂・穿血
血液を一点集中させて放つ。
速度は最初と同じフル圧縮での発動。
アルガナは回避行動は取れんだろう。
「グゥゥッ、ァ、アァァァッッッ!!」
まあ、予感はしていたよ。
呪力の供給を失い、赤縛の拘束力は加速度的に弱まっていく。だから引きちぎるなんて芸当が出来てしまう。
それでも、最低限の傷で済ますには穿血を手で受けるしか選択肢はない。
そして、腕を無防備に上げたな。
「苅祓」
百斂で余分に血を放出し、別の技で繰り出す。
血を飛ばしての追撃。腕を上げたのは失敗だったな。
俺の技術なら、苅祓に手はいらない。
脇の肉を削げば腕は使えない。お前はさっき、どこを損傷しようと避けるべきだった。
「グッ!」

腕が下りたら、次は――――

「もう一回だ」

百斂・穿血

二度目の穿血が腹を貫く。

「ガハァッ……！」

アルガナの口から大量の鮮血が溢れ出る。

臓器までイッたかな。

「終わりだな」

「……ハアハア、殺すのか」

「……なぜ、そうなる？」

「これは、儀式だ。勝者が敗者を殺し儀式は完遂される」

アルガナはふらふらと立ち上がる。でかくないとはいえ、腹に穴が開いてるのに立てるのか。

「闘争が閉ざされることなど、認められん」

「無理するなよ。マジで死ぬぞ」

「黙れっ！お前は私に情けをかける気か!!」

めんどくさ。術式変えてさっさと――――

「何をしておる」
外見はさっきの少女。だが、神威を振りまいてるってことは、アルガナが言ってたカーリーか。
「何故殺さん。儀式の勝者であるお主がアルガナを殺せ。それで、儀式は完遂される」
ばれてら。眠らせようとしたのが気に入らないのか？
儀式ってのはテルスキュラの習わしだっけか。儀式と称し眷属同士を戦わせる闘争。それでこのレベルの戦士を生んでるってところか。
アルガナもこの儀式には執着を見せた。死ぬ気まんまんだったし。
「それって蟲毒だろ？生き残った方が強くなるんだっけ？」
「そうだ。だから、殺せ。戦士ならば殺すんじゃ」
「いや、これは蟲毒として成立していない。あと戦士じゃない」
「なんじゃと？」
「そもそも俺が勝ったらどうするつもりだったんだよ」
「その場合は……」
「その場合は？」
「うむ……」
考えてなさそうだな。

女、アマゾネスだらけの国でその頭目が敗北。
倒したのはヒューマンの男。伝統的には問題ありだろ。
「まあ、なんだ。とにかくこれを終わらせよう」
「ん？お主何を――――」
「【眠れ】」
口元に「蛇の目」、舌には「牙」。呪印を用いた言霊の増幅と強制。
こいつは格上だが俺の傷（ダメージ）は反転術式で全快。六眼があれば呪力が尽きることはない。
今の死にかけのこいつになら呪言は効く。
「ここはアマゾネスの殺し合いの場。男の俺に闘争の資格はないだろ」
「……間違ってはおらんな。だがどうする。それで収まる熱ではなかろう」
観客席は殺せと叫ぶアマゾネス。カーリーの言う通りアルガナを殺さなければこの熱は収まらないだろう。
だが手がないわけじゃない。こいつらはアマゾネス。それなら。
「こうするさ」
術式の変更。ただただ声を大きくするだけの術式。
俺は大きく息を吸い大声を上げる。
「闘争を愛するアマゾネス！真の戦士と成ろうとするアマゾネスたち！この地を治める

長は俺が下した！この場に居る全ての者よ！俺は戦いを拒まない！己が最強の戦士だと自負するならば今この場で立ち上がれ！この俺を殺して魅せろ！」

俺の言葉に、俺の声に、闘技場の空気が変わる。

これは熱気。

先ほどまでとは違う熱狂。

「そうだ！それで良い！お前たちの魂、俺を魅せてみろ！」

術式はパワフルな方がいいか？

ならば！

「【領域展開】」

【坐殺博徒】

対象はカーリー。展開された領域は闘技場全体を包む。

そして必中効果によって術式と領域のルールがカーリーに開示される。

「なぜ妾を入れておるんじゃ？」

「安心しろ、知っての通り害はない」

俺は保留玉を弾き、頭上ではシャッターが現れ予告演出が始まる。

「さすがに神に手を出す気はない。だが、このゲームには付き合ってもらう」

赤色のシャッターか。

「俺ってさ、これでまともに大当たり出したことないんだよね」
「……何のことじゃ？」
「だからさ、いつもこうやって出すんだ」
俺は領域の解除後に備え目隠しを外す。
目元にある三本の紋様、その一つが消える。
「はい、大当たり」
領域が崩れる。
日常の小さな奇跡を記憶から抹消して貯める術式。その任意発動による強制大当たり。
ギャンブルの才能がない俺では、この術式はこれでしか成立させられない。
よしよし、カーリーとアルガナは闘技場の端まで行ったな。
アマゾネスは眼前に。
これで心置きなく。
「闘ろうか、戦士ども」
不死身の俺を殺してみろよ！

毒

カーリー・ファミリア。
『闘争』と『殺戮』を司る戦神が主神のファミリア。
アマゾネの聖地、闘国テルスキュラをホームとし、その男女比は驚異の０：１０。
しかし、つい二日前のことだ。ある男がカーリー・ファミリアの団員全てを相手取り勝利を収める。
アマゾネスの強い雄に惹かれるという性質から、全会一致で新たな団長が誕生したのであった。
「ってところか。なぁ、主神様？」
俺は書き込んでいた手帳を仕舞うと、自らに恩恵を刻んだ神へと目を向ける。
現在もテルスキュラの伝統は守られている。殺し合いは日常茶飯事となり、血を流さない日などない。
変わった点は、全ての闘争の相手を俺の式神が担っているところか。
「より質の高い闘い。これなら文句ないだろ？」
「確かに質は高いのう。じゃが強すぎんか？」

「そう？百人もいればいけるでしょ」
俺は豪華な椅子に座るカーリーの前で果実を片手に寝そべっている。
俺とカーリーが見ているのは百人の団員が式神に束になって殺そうと、必死の闘争を見せている。
「あれは何じゃ？呪い、というよりは神に近い気がするんじゃが……」
「あ、わかる？極東に行けばまぁまぁ有名なんだけどさ」
レベルなんて関係ない最強の式神。一撃目を耐えようと、二撃目はその数段上の威力。
腕に備わる退魔の剣を振るえばアマゾネスは闘技場の端へと吹き飛ばされ、頭から、腹から、腕、脚。
加減させてるとはいえ、どこかを壊されそのまま気絶する。
血を撒きながらも壁に激突したものたちの表情には吹っ切れたような、気持ちの悪い笑みが浮かぶ。
「十二神将、こいつを倒せば俺とヤレる。あいつらは全員、一度は俺にボコられたんだ。アマゾネスって種族な以上、本能には逆らえないでしょ。モチベーションを保つのも団長の仕事ってことだ」
「お主……適当じゃろ？」

「バレた?アハハハハ、だってあいつらしつこいじゃん。いちいち相手してられっか」
カーリーのジト目が俺に刺さる。
「まあ、あれを相手にすれば強くなれるのは本当。今のあいつらじゃお話にならないけど。お、今の痛そ～」
「まぁ良い。真の戦士は見れそうもない。期待しておったアルガナもメスの顔をしておる。どうしてこうなってしもうたのかのう……」
「ハハ、ウケる～」
「ハァー……」
カーリーは自分が座る椅子の後ろで貞淑に佇むアルガナと、ダラダラと寝そべる俺を見て深いため息をこぼす。失礼な神様だこと。
にしても、弱いすぎるな。方陣が一回たりとも廻らないってのは張り合いがなさすぎる。
ガチで殺りあったところで、アルガナでもお話にならんしな。
「カーリー様!!」
俺が育成計画の方針を考えていると、大きな音で扉を開ける音が聞こえる。
アルガナによく似た、砂漠の国とかで踊ってそうな女が現れる。
口元にベールを纏ってるは…趣味か?

「何があった？帰ってみれば闘技場ではあのバケモノが――――」
「アルガナ、おかわり」
「ええ、どうぞ♡」
「んん!?」
まぁ、ちょっと外に出て帰ってみれば、周囲の環境がこれだけ変われば驚くよな。
俺も朝起きたら神の時代なるものが来て　そこいらに神がいると知った時はマジでビビった。お前の気持ちもわかるぞ。
おっと、そんなことよりまずはこいつの紹介だな。
「カーリー、紹介」
「神使いがあらいのう。こやつはアルガナの妹のバーチェ・カリフ。副団長じゃ」
「へー、妹いたんだ」
「ええ、団長ほどではありませんが、このカーリー・ファミリアでは最強の一角です」
素直でお淑やか。最初とはホント別人だな。
ほら見ろ、バーチェとやらはあまりの変化に絶句してる。
ま、なにはともあれまずは。
「これから、ここの団長を務めるラック・マーストンだ。バーチェにはこれからも引き続き副団長をしてもらいたい!?――――」

言葉が終わると同時に、バーチェの掌底が俺の目の前に現れる。
威力はアルガナほどではないが、今の状態なら頭が潰れるかな。
「あっぶな！寝転んでる相手にこんな全力攻撃するか？ふつうさあ！」
「なっ!?」
俺は一瞬でバーチェの後ろに回り込んで組み付く。
一瞬の動きに驚く。というよりは回り込み方に驚いてるのか。
「それがお前の魔法か？」
「影を媒体にする式神の召喚術でね。拡張術式、って言ってもわかないか…チカラの副次効果で影自体を利用できる」
陰に潜み回り込むことだって可能。
予想外の動きなんだろうな。対応できてない。
いつもなら式神使ってで相手をしてやるんだが……。
「……そうか、こうまで固められたら私でも抜け出せない。だが、あのモンスターをここに召喚しないのは失敗だったな」
「というと？」
「こうなるからな。喰い殺せ（ディ・アスラ）」
「団長っ！」

【ヴェルグス】
「問題ない。アルガナ、黙ってみてろ」
「姉を使うこともしないとはな。一人で闘うその度胸は認める」
バーチェの魔法は紫の液体を生み出し、手のひらを中心にあふれ出す。
零れ落ちる毒液は俺の手を、足を伝って染み込む。
「触れるだけで肉は腐り落ちるほどの猛毒。私の毒でお前を殺して、姉に代わって私が頭目となる」
「毒？」
あーそういう。
俺は固めていた腕をほどく。
「これで――――っ!?」
腕をほどけば体はこちらを向くだろう。
自分の力に対する自信。
実力が高いとは評価しつつも、俺を甘く見ているのがよくわかる。
振り向きざまに腹を狙って突き刺すように蹴る。
「グッ！」
「あれ、腕折れちゃった？」

まあ、咄嗟にガード出来たのは流石かな。
「なぜだ……」
「なにが？」
「何故毒が効いていない!?」
「効かないからな」
「ハァ!?」
「体質なんだ。毒の類が一切効かない」
「なんだ、それは……」
「そんなのアリかって？アリさ。勝ち方にこだわるのか？それで真の戦士に成れるのか？」
「……うるさいッ!!」
「アルガナもそう思うだろ？」
「……えぇ」
俺の言ってることはまともだろうな。テルスキュラ限定だが。
勝つために策を弄すのは誰だってやる。あいつは強いとか、あいつは弱いとか、レベルや身体能力だけで勝敗が決まらないのが戦いの面白いところ。
どんな理不尽な相手でも勝つための最善を尽くすのが、真の戦士ってやつだろ。

「続ける？毒以外に突出したところがないのなら、ただの殴り合いになるだろ。そうなったら俺が百パー勝つ」
バーチェの目が泳ぐ。迷ってるな。今までの自分の存在証明（アイデンティティ）崩れそうなのか。
この場で死ぬのがテルスキュラでの流儀だが……。
「バーチェ？」
「っ！」
びくりと肩を揺らし顔を俺に向ける。
顔に浮かんでいるのは。
「恐怖か……」
死への恐怖。俺が随分前に失くし、テルスキュラのアマゾネスが知らないであろうもの。
命は尊い。これを教えるのも今後の課題だな。
「お前を殺す気はない。テルスキュラでの殺し合いは終わった」
「……な!?」
いきなり変われば驚くわな。
とはいえ、やることは多いだろ。
「テルスキュラは実質滅んだが、カーリー・ファミリアは健在。お前は俺の右腕として、

動け」
「副団長か……」
「そうだ、カーリー・ファミリアは副団長としてアルガナとバーチェを据え、新体制で活動する。文句はあるか？カーリー」
「気は乗らんが、お主の言う通り、テルスキュラの文化である儀式は実質滅んだ。最強の戦士を見ることは――――」
「それは出来るだろ」
「どういうことじゃ？」
　マジで気付いてないのか？それともアマゾネスによる闘争と殺戮の末に生まれる最強の戦士を見ることが目的か？
「最強の戦士ならお前の目の前にいるだろ」
「じゃが、お主は闘争と殺戮の闘争と殺戮の末に生まれる最強の戦士では」
「俺の術式（チカラ）は闘争と殺戮の末に手に入れた術式（チカラ）だ。俺の使う術式（チカラ）のほとんどが、俺が殺した奴らが持っていた術式（チカラ）。なら、闘争と殺戮の末に生まれる最強の戦士ってのは俺の事だろ」
　カーリーは分かりやすく驚いた顔を浮かべる。カーリーだけじゃない。アルガナやバーチェも驚愕の表情を浮かべる。

「目指す果てにいるのはお主のような強者。お主を喰らわせれば……」
「それでいい。やれるものならやってみろ。俺も強い奴と戦りあうのは大歓迎」
「いいじゃろう。妾もお主を団長として、言葉だけじゃなく、心から認めよう。このファミリア（ファミリア・ミイス）の長は今日よりラック・マーストンとする」
その場にいなかった団員を含め、主神に思惑はあれど、心からの賛同を。本当の全会一致の賛成を受け、ここに呪いの王の眷族の物語が始まった。

他言語

カーリー・ファミリアの現団長ラック・マーストン。
あいつが来てからテルスキュラは変わった。
日々闘技場で行われていた儀式は式神（モンスター）を中心とした闘争になった。
それでもあいつが出すいろいろな式神の力は、そのほとんどを私たちは倒せないほどに力を持つ。
拘束する能力を持つ幽霊、とにかく硬い龍、地面に潜って転倒させる魚。
多様な方法で私たちを強くするための闘争の場を用意した。
時折、勝てることもあるが、今も時折出てくる円環を背負った式神。あいつが言うには魔虚羅と呼ばれる式神を倒せたものは一人とていない。
「だんちょう～」
「ん？なに」
「今日は勝ったから……」
いつもこんな感じ。アルガナも含めて、皆別人みたいになった。
アルガナも、他の団員も発情した雌の顔を浮かべている。カーリー様が言うには恋す

る乙女になったって。
あまりの変化に恐怖を覚えるほどだけど、ピリピリとした空気は無くなった。
でも、アルガナや団員達の力はあれからどんどんと強くなっている。
アルガナはあいつが来て一年で、より化け物じみた力を手にし、偉業さえ重ねればレベル7になれるとカーリー様が太鼓判を押すほど。
「頑張った頑張った」
「フフフ…ってそうじゃなくて！」
ラックは適当にアルガナの頭を撫でる。それでも撫でられた頭にアルガナは惚けたような表情を浮かべ嬉しそうにしている。
「わかってるわかってる。ほら行くぞ」
「やった！」
ラックはここの団長になってから、あいつの生活は食う寝るヤルが中心の生活をしている。
他には盤上遊戯を中心とした遊技場の建設や、時折闘技場で団員と戦うこともしている。それでも戦うのは稀だし、アルガナや私以外では戦いにならない。
あれだけ闘争を楽しんでいたカーリー様は、この状況をどう思っているのだろう。
いや、それはどうでもいい。

私は今のテルスキュラは嫌いではない。
アルガナは丸くなって、もう前ほど怖くない。ステイタスは飛躍的に伸びているみたいだけど。
「そうじゃ、パーチェ」
「なに？」
「ラックと話し合ったんじゃが、妾たちはオラリアに拠点を移す」
「そう」
迷宮都市オラリオ。ダンジョンが存在していて、高レベルの冒険者が多数存在する街。
今までテルスキュラから出たことはなかったが、ラックの性格、ファミリアの運営方針を考えれば、いずれオラリオに行くことになるとは思っていた。
しかし疑問は残る。
「テルスキュラはどうするの？」
「それは問題ない。少しの間、十年かそこらで帰るつもりじゃ。それに、ここを留守の間はラックが結界を張るそうじゃ」
「そう」
「全員を連れて行く訳でもないしのう。半分は残す。まぁあの体での長旅は無理じゃろ

う」

まぁ、毎日だし。アルガナが孕んでないのは奇跡なのかも。

「そこでじゃ。オラリオに行くのはいいんじゃが、問題がある」

「問題？」

「そうじゃ。団員たちが共通語（コイネー）を習得せんことにはオラリオでの活動は困難じゃろう」

嫌な予感。

もしかしてだけどカーリー様。

「じゃから、お主にはこれからオラリオに行く予定の団員全てに共通語を教えてやってくれ」

「やだ」

「ダメじゃ。これは主神命令じゃよ」

「いやだ。カーリー様がやればいい。私とオルガナには教えてくれた」

「妾は嫌じゃよ、面倒くさい」

最初から丸投げするつもりだったみたい。どうしよう。

「そう嫌そうな顔をするでない。お主が適任と判断したのはラックじゃし、妾もそう思う。あと一年もすれば妾たちはオラリオじゃ。それまでに頼んだぞ～」

手をひらひらとして、カーリーは闘技場を後にした。

あれは丸投げする気。主神命令だからやらなきゃいけない。
ふと頭に懐かしい顔が浮かぶ。
馬鹿みたいに笑っている。英雄譚が好きな弟子の顔。

「よっし！そろそろ行くか。オラリオに!!」
ラックは勢いよく宣言した。と言っても、周りにいるのは主神（カーリー）、そして副団長（姉）（アルガナ）と副団長（妹）（チェバー）のみ。
バーチェの努力の甲斐あって、残る団員含め全ての団員が共通語（コイネー）を覚えた。それでも一年かかったが。
「急じゃのう。何の用意もしておらんではないか」
「大丈夫大丈夫。むしろちょうどいい」
「どういうことじゃ？」
「最初に俺とカーリー、アルガナだけで出発する。全員で行くと大群が攻めてきたと思われても不思議じゃないだろ？だから初めに少数で動く」
「なるほどのう……それで妾たち三人だけ」
「そうそう。というわけで、行くぞ！」

「ふぇ？」
ラックはサッとカーリーとの距離を詰め、カーリーを小脇に抱える。
「ちょっ!?」
「バーチェ、あとはよろしく。ギルドには言っとくから、一週間後にまた会おう！アルガナ、行くぞ！」
「は～い！」
「えっ、ちょっと……」
バーチェの声を無視して、ラックたちは闘技場を、そしてテルスキュラを後にした。
テルスキュラはオラリオの東南に位置する半島の国。
距離もあるということで、近くの街の商人に声をかけて馬車の護衛としてオラリオに向かうことになった。
その道中のこと。
「あの！」
馬車に向かって声をかけるのは少年の声。
護衛としてアルガナは御者をする商人の隣に、ラックとカーリーは馬車でダラダラとしていた。
声を掛けられ、御者は馬車を止めて少年に声をかけた。

「ボウズ、どうした？」
「オラリオに行きたいんですけど。乗せてもらえませんか？」
オラリオに行きたいという少年。
ラックは商人が話すのを、天幕の隙間から外を窺う。
声をかけてきたのは白い髪に幼さを残した顔つき、赤い目を持つヒューマンの少年。
「悪いな。今は荷物以外に乗客もいてよ。ボウズの乗る場所は」
「大丈夫でしょ」
天幕を開け、ラックは商人に対してそう言った。
ラックはその少年をどこかで見たことがあるような、この状況にデジャヴを感じ、商人の言葉を遮っていた。
「子供一人ぐらいなら問題なし。運賃はこいつをやる。武器屋で売ればそれなりの値が付くだろ」
そう言ってラックは謎の風格を持つ小刀を手渡す。
商人は武器を扱うわけではないが、それなりの経験を積んだ商人ゆえに、それが業物だと瞬時に見破る。
「そういうことならいいが……」
「そういうことだ。乗って行くといい」

「あ、ありがとうございます！」
　そう言って少年は馬車に乗り込む。
「あの時と逆か……」
「え？なんか言いました？」
「何でもない。少年、名前はなんていうんだ？俺はラック・マーストンだ」
　ラックの呟きは少年に聞こえなかったようで、ラックの自己紹介に対してペコリと頭を下げる。
「僕はベル・クラネルです。あの、乗せていただいてありがとうございます」
「気にするなって。困った時はお互い様だろ」
「どの口が言うんじゃか……」
「あ”ぁんっ!?」
　普段あれだけアマゾネスたちを半殺しと言ってもいいほど痛めつけているのに、何故か善人ぶるラックにカーリーは呆れ声を漏らす。
　ベルは二人の関係を見て笑みを浮かべる。
「アハハ…仲がいいんですね」
「もち！」
「冗談じゃろ？」

「俺たちズッ友じゃん」
「気色悪いのう……」
旅は道連れ世は情け。
楽しそうな声のする馬車は、順調にオラリオへと近づいて行く。
途中現れるモンスターをアルガナが瞬殺するのを見て、商人は口を開けて言葉を失い、ベルはその圧倒的なまでの強さに羨望の眼差しを向ける。
「なぁ、ベルはどうしてオラリオに行くんだ？」
馬車に乗っているだけのラックたちは、暇を持て余して雑談をしている。
荷物のように無理矢理運ばれたカーリーはどこか不機嫌そうに外の風景を眺めているため、必然的に会話するのはベルとラックの二人だけ。
「冒険者になるためです」
「マジでか、俺と一緒じゃん」
「ラックさんもですか？」
「ああ、そうさ！ベルはあれか？やっぱ英雄に憧れて……？」
「はい！おじいちゃんに聞かせてもらったアルゴノウトの英雄譚が大好きなんです」
「アルゴノウトの英雄譚？」
「知らないんですか？アルゴノウトですよ！」

「アッハハハハハ！アルゴノウトの英雄譚？ベル！あれは喜劇だろう。命懸けの喜劇だ！」

ラックは堪らなく可笑しくて笑う。そして、思い出すのは旧友の愚者（英雄）の虚勢（笑い声）。

三千年前。呪い収束から数百年後に出会った友人との冒険。

ラックにとっては数多ある冒険のひとつ。

懐かしい名前と、彼の喜劇を愛する少年がその友人とそっくりと来れば、笑いも込み上げてくるというもの。

「ベル、それだけじゃないな？お前のことだ、他にも目的はあるだろ？」

ベルは心を見透かされたようなその問いに驚いた。

だが、初対面のはずのラックとは初めて会った気がしない。それほどに気の合う存在との出会いは、ベルにとっては初めての経験だった。

だから、言ってしまったのだろう。冒険者になった、その理由を。

「僕は、出会いを求めてここに来ました」

「というと？」

「女の子との素敵な出会いを求めて、僕は冒険者なりたい！」

少し恥ずかしそうに。だが意外にも真っ直ぐな目でラックにそう告げた。

「お主、なかなかにクズじゃの」

「うっ……」
カーリーの鋭い指摘にベルはダメージを受けたが、ここにはラックがいる。
テルスキュラの女の半分を無責任にも孕ませた、正真正銘のクズが……。
「カーリー、そう言うな。俺も似たようなもんだ。オラリオには歓楽街があるんだろ？俺のメインはそれだ」
「ハァ……」
呆れ顔のカーリーに、さらに追い打ちをかけため息まで吐かせるラック。
ベルは歓楽街と聞いて胸を躍らせつつも、同じような目的の目の前の男にさらに親近感を抱く。
「目的はやっぱり……」
「おいおい、ベルよ。そんなの決まってる。男なら目指すはハーレムだろ」
パァッとベルの顔は明るくなる。
こんなくだらない話をしていても、道は進み着実にオラリオへと近づく馬車。
前方に見えるは大きな城壁に、天高く聳え立つ大きな塔。
そこはオラリオ。冒険者の街、最強の都市。
これから始まる冒険に胸を躍らせ、これから出会う美女に思いを馳せ、一行はオラリオの地面を踏んだのだった。

結界

オラリオに入ってすぐにベルとは別れた。ベルは自分でも入れるファミリアを探すと言っていたし、またどこかで会えるだろ。

俺たちは既に設立されたファミリア。パーチェたち後発の団員のこと、ファミリアとしてホームを構えること。それらを伝えるべくギルドへと向かった。

「はぁ～!?ウラノスに会えないぃ～!?」

マジかよ!

カーリーを連れていればウラノスに会えると思っていた。

しかし、ウラノスは『祈祷』によってダンジョンに蓋をするオラリオの基盤。

不届きもの対策に、神であろうとおいそれと会うことはできないとのことだ。

「ウラノス様は祈祷を捧げられています。言伝があるのであれば、お伝えすることも可能ですが……」

「なんじゃ、ウラノスに会いたいのか?」

「うん。カーリー、なんとかならない?」

「無理じゃな。妾でもどうにもならん。それに今の妾たちは零細じゃしの」

「そうだった～！」
こんなことなら全員で来れば良かったか？いや、無理だな。
戦争になる。あいつらバカだし。戦う意志のあるやつを前にすればどうなるかは火を見るより明らかか……。
伝言は有りか……。
「ああ、伝言を頼む。ラックが……！」
「……どうしました？」
ウラノスの出会いは千年前。
俺なんて名乗ったっけ？
千年前の名前……ちょうどひと月前に食べた夕飯も思い出せないってのに、千年前の名前……オワタ。
「やっぱりなんでもない」
「そうですか？」
「とにかくファミリアを作るから、ホームが決まったらまた来る」
とりあえず、今はギルドに用はないかな。
ホームは部屋が閉じていればなんでもいいか。適当に物件を探して、夜までには動けるように。

そして夜に忍び込んでウラノスに会うかな……。
そこからはトントン拍子に事は進んだ。
まず、ホームは南東にある第三区画の端。ダイダロス通りのあるその区画。もとはそれなりの大きさの酒場だったが、昔の抗争に巻き込まれて崩れたままの家屋に、その時に店主が死んだという曰く付き。
だからだろう、とにかく安かった。
「さてと、ホームは手に入ったな」
「このオンボロに住まうのか？」
「まさか、改修するさ」
そう言って手をかざす。出すのは芋虫のような呪霊。
いろんなことが出来る呪霊操術は便利だ。等級によって調伏は面倒だし、今は呪霊を増やすこともできないけど。
呪霊の口から出てきたのは大量の人型人形。服飾店とかで見る、まんまマネキンのこの人形。
そして術式を二度切り替える。一度目は構築術式によって建材を大量に生産する。呪力消費は半端じゃないが、六眼が呪力切れを起こさせる事はない。
そして二度目、傀儡操術でマネキンを操り、建材や作業道具を持たせて作業に取り掛

かる。

十数体の傀儡全てと視覚、聴覚といった五感の全てを共有しつつ、連続使用プラス複数使用によって焼き切れる脳に、自己補完として反転術式を掛け続ける。

「マンパワーで作業するけど、作業中は暇だろ？カーリーは遊びに行っててい。アルガナはその護衛ね」

「はい。団長、頑張って！」

「まぁ、居てもしょうがないしの」

「日が落ちる頃には帰ってこいよ」

行ったか。さてと、日が落ちる前までには終わらせようか。

家の補修に二時間。結界作成にその倍ってところかな。

ラックは作業をすると言っておった。

奴は多芸じゃし、宣言通りに日暮れには終わるじゃろう。

妾とアルガナはオラリオの街へと繰り出す。

「まずは武具店に行こうかのう」

「武器……なぜだ」

「暇じゃからじゃよ」
「……」
「冗談じゃ。ラックのやつが、お主にも武器の扱いを覚えさせるのも悪くないと考えているようでのう。ま、その下見といったところじゃ」
「今すぐ行くぞ」
「……単純じゃのう」
アルガナは完全に骨抜きにされておる。
ラックを引き合いに出せば動く点は、以前よりも扱いやすいがのう。といっても、前から従順とは言えずともそれなりに指示は聞いていたが。
オラリオの街並みを見物しながら、妾たちは武器屋を目指す。
目指す場所はもちろん、都市中央部に位置するバベルという名の巨塔じゃな。ここには武器における世界クラスの高級ブランド、【ヘファイストス・ファミリア】のテナントが入っているそうじゃ。ヘファイストスは鍛冶の神と聞いておるが、同郷でもないし妾は知らん。
妾たちはウロウロと見て回る。ジャガ丸くんなるものは美味であったが、小豆クリーム味やら、きな粉もち味やら、どこに向けたかわからんものも置いておった。
目的地はオラリオ中のどこからでも見えるほどの巨塔。道に迷うこともなくバベル

に到着する。
「ほぉ～。なかなかの武器が揃っておるのう」
さすがは世界一と名高い鍛冶師系ファミリアといったところかのう。
剣、槍、斧、短剣、刀。他にも多くの武器が置かれた店。その武器はどれも一級品。値段ももちろん一級品。
「アルガナ、何か良いモノはあったか？」
「……特には」
アルガナは武器を眺めて吟味しておるようじゃの。
昔、短剣を使っておったっけのう。呪詛が目覚めてから素手に変えたんじゃったかな。
「短剣一本ぐらい持っておくのはどうじゃ？腰に納めておけるじゃろ」
「そうだな……」
こういうところは戦士じゃのう。生きるため、闘争の術に妥協無し。
女に目覚めようと、戦士であることには変わりはないということじゃな。
結局、当分は普通の短剣を使うと言って三万ヴァリスの短剣を買っておった。
所持金で足りる額じゃったな。
もういい時間じゃ。さっさと帰るとするかのう。

「お、いいところに帰って来たな」
ラックは後ろに人が立つ気配を感じ、振り向くと見知った二人が立っていた。
ラックと目が合ったアルガナが猛スピードで抱き着く。
「うごぉっ！」
「団長～、寂しかったぁ～」
「ああ、はいはい」
この突撃はラックと言えども普通に痛い。
レベル６の突撃は呪力なしで受けたら普通に死んでしまう威力。
ふと、ラックは腕の中のアルガナの腰に付けられた短剣が目についた。
「短剣を買ったのか？」
「はい、やっぱり私には徒手があってると思って……」
「まあ、そんな気はしてたかな」
あまり興味は無さそうに、ラックはアルガナを押しのけて立ち上がる。
「ホームのお披露目だな。改修は完了している。入ろうか」
「さすがです！」

「そうじゃのう。飯も勝ってきたぞ」
ラックが扉を開けて中に入る。
そこは酒場。一階建てのただの酒場。
カウンターや酒を置くための棚、席数は二十席ほどでそれなりの広さ。
裏口であろう小さなドアは物置の用で、寝る場所もない狭いホーム
「狭いのう」
「そ、そんなことありませんよ」
「そうだって。これを見たら狭いなんて言えないよ」
そう言って奥に続く扉を開ける。
目に映るその光景。風景や景色というべき光景に二人は驚愕に目を剥いた。
青々とした空。その下に並ぶ数々の寺社仏閣。
これは家というよりは街と呼べる規模だ。
「ようこそ。いや、おかえりかな。ここはカーリー・ファミリアのホーム『闘争街』。闘技場、倉庫、武器庫、寮、ビーチが今のところは置いてある」
「な、なぜ家の中に町があるんじゃ!?」
「……」
異様な光景。道への興奮に飛び上がり喜ぶカーリー。その様は見た目通り、少女のよ

う。

　そして、あまりの驚きに言葉を失うアルガナ。内と外で空間の体積が変わっている。それはまさしく……。

「神の領域……」

　アルガナはポツリと呟く。

「馬鹿言え。これは俺の努力の結果。嘱託式の帳の応用だ。これ一つに十六本も使った大作なんだ。それと、素晴らしいのは認めるが、神の領域ほどではない。所詮は神々で言うところのＤＩＹみたいなもんだ」

「でぃーあいわい？」

「ＤＩＹで街作るやつは神でもおらんぞ」

　空は赤く染まり、もうすぐ日は沈む。

　この街に、夜がやって来る。

　ホームにて、カーリーとアルガナは寝静まり、ラックは夜の闇に紛れてコソコソと街を駆け出す。

　向かうのはギルドの地下。祈祷を行なっているウラノスの居る場所には誰に気付かれることなく進む。途中、幾人かの職員を見かけたが、影に潜れば見つかる事はない。

（ここだっけ？あんまり覚えてないんだよなぁ～）

「来たか」
暗がりの奥に見える玉座。
そこに鎮座する老神。
神時代はじまりの神の一柱。
彼こそはウラノス。オラリオの柱。
「お、おう。久しぶり」
「久しいな。壮健そうで何よりだ」
「まぁな。不老不死だし。千年前だっけ？約束通り結界の点検に来たぞ」
結界。
迷宮になされた蓋は、結界術によってラックが施した。
結界発動者を一定空間に拘束する、人間の出入りを自由とする、隠すという機能を完全に失わせる。この三つの縛りのもと、モンスターの移動を制限する結界。
これが、迷宮になされた蓋の正体。
「千年経ったし、結構持たせるように作ったとはいえ少し綻んでるな」
「直せるか？」
「もちろん。ま、今日は徹夜かな」
ウラノスにとって、ラックとはビジネスライクな関係ではあるが、当時の仲は良好。

千年前と変わらぬ空気を纏う男に、懐かしさからか老神は微笑を浮かべる。
「そうだ、ウラノス」
「どうした」
「俺、ファミリアに入ったんだ」
「真か？」
「真だ。カーリー・ファミリアで団長になったんだ」
「ほう」
「それで、団員が全員来てなくてさ。一週間後にアマゾネスの大群が来るけど、戦う意思はないから通してやってくれ」
「そうか。ガネーシャに伝えておく」
「悪いな」
　作業の片手間、二人は世間話に花を咲かせた。
　作業が終わる頃には日が出始めており、ラックは結界の綻びは全て解決させ、結界は千年前と変わらぬ状態に戻った。
「じゃあ、俺行くわ」
「ああ、また仕事を依頼する事があるやもしれん。その時は」
「今まで通り、金次第だな」

「フッ、そうか」
「じゃあな、ウラノス。あと骨」
そう言い残うと、空間をぐいっと引っ張る。
触れることのできないはずの空間は、ラックの体を覆い隠し、気配も消える。
ラックは知らないことだが、部屋にはウラノスの他に骨呼ばわりに少し落ち込んだ賢者と呼ばれた愚者がいた。

影

ラックたちがオラリオに来てからおよそ二週間が経った。
ウラノスへの口利きがあってか、門番をしているガネーシャ・ファミリアの団員たちと揉めることなくバーチェたちはオラリオに到着した。
総勢は百人の予定だったが、テルスキュラの防衛もあるためオラリオに来る団員は三十人と少しで落ち着いた。
「団長」
「バーチェか、どうした？」
「何をしているのですか？」
「見てわかんだろ？金を増やしてる」
バーチェの到着と共に、本格的にダンジョン攻略が始まった。
ギルドはカーリー・ファミリアがオラリオに来てあまり時間が経っていないということ、団員の殆どがレベル３以上であること、レベル６が二名在籍すること、そして団長がレベル１ということを考慮して等級をＣと認定した。
団長自身がダンジョン攻略に意欲的でないことも、等級がＣである所以だろう。

「だークッソ！この機械壊れてない!?」
（ずっと負けてる……）
　オラリオの南の区画。娯楽都市サントリオ・ベガが投資したことで建設された大賭博場。カジノ『エルドラド・リゾート』。
　ラックは一日中、どこかで遊び歩いているよう。ダンジョンに潜らない団長に仕事をしろと、バーチェが言いたくなるのは当然というもの。
「団長はそういう、楽して儲けるのは向いていないと思う」
「ほっとけ」
「そろそろダンジョンに潜ったら？団長ほどの力があれば、単騎でもいいところまでいけると思う」
　もう何度かダンジョンに潜っており、ラックの実力も知っているバーチェには、なぜラックがダンジョンに入ろうとしないか理解できなかった。
「あー、それね」
「何かあるの？」
「別に……めんどくさいだけ――――あぶなっ!?」
「チッ」
　突然、横から飛んできた手を咄嗟に身を逸らして避ける。

「怖っ。それ喰らうと俺死ぬんだけど」
「嘘ばっかり」
紙一重でもなければ、焦った様子もなく。レベル６の攻撃をやすやすと避ける技量。喰らったところで回復、防御の手段はバーチェが知る以上に持ち合わせる手数の多さ。
軽口を挟む余裕な態度に、バーチェは腹立たしく思う。
「今日はもういいだろ。ご飯にでも行こう」
「ハァ……」
懲りた様子もなく、夕食に誘う男にため息が漏れる。
とはいえ、バーチェの目の前にいるのは曲がりなりにも自らが所属するファミリアの団長。
必要はないだろうが、護衛のためと自分に言い聞かせてラックの後をついていく。
少し歩くと、ラックとバーチェは酒場の前に到着した。
「ここだここ」
そこは豊饒の女主人と書かれた看板を掲げる酒場。
店内は明るく喧騒に包まれていることから、随分と盛況していることが窺える。
「ん？」
扉に手を掛けたところで、ラックは何故か一歩下がる。

「どうしたの？」
急に止まったラックを訝しむバーチェ。
すると、バンッ！と勢いよく扉が開かれる。
出てきたのは白髪に赤目の少年。少年はどこか悔しそうな顔で飛び出していった。
「あれは……ベルか？」
「知り合い？」
「友達だけど……まあいっか。ほら、入るぞ」
バーチェは友人があんな顔で出て行ったというのに、ここまで適当な自らの上司に当たる男に若干引きつつも、「まぁ本人がいいならいいかな」と気にしないことにする。
チリンチリン
扉を開くと入店を合図するベルが鳴る。
中には多くの客が、酒に食事、談話を楽しんでいる。店員は皆、美女揃い。
多くの人が立ち寄る理由がよくわかる。
「ニャニャ！あの時の目隠しニャ！」
「あー確か客引きの……」
「もしかして忘れたのかニャ!?」
「まさか！ほら、あの、たしか」

「忘れてるのニャ。こーんな美少女のミャーをを忘れるなんて、ひどいのニャ！」
「ごめんごめん。俺はラックだ。こっちは連れのバーチェ」
「どうも」
「ミャーはアーニャっていうニャ」
アーニャは振り返り、店主に向かって大声で。
「二名様、ご案内ニャ～」

あーそうそうそう。アーニャだ。
店内を見回しながら席に案内される。
ここの店員はそれなりに強そうな奴らが多いな。
客の方にもいろんな奴がいる。お、あそこの客すごいな。酔い覚ましか？狼人が吊し上げられてる。ウケる。
「あ」
よっこらせと。
俺は席に座ってメニューに目を通す。
何にしようかな……やっぱ肉か!?肉なのか!!

「あれ？バーチェどうした？そんなとこに突っ立ってさ。あ！アーニャちゃん、エール二つと、今日のオススメお願い！」
「はいニャ～」
　パーチェの視線は隣の席の集団に向いている。
　全体っていうより見ているのは。双子のアマゾネスか……。往来で双子が元気に騒げるとは……いい時代になったものだ。お、酒うま。
「うそ……」
「バーチェ……？」
　明らかに酔いが覚めたであろう、豊満なアマゾネスと貧相なアマゾネス。
「知り合い？」
「昔テルスキュラを出て行った。ティオネとティオナ」
「……あんた、何しに来たのよ。カーリーもいるんじゃないでしょうね」
　巨乳の方がティオネか？キレ気味なのは怒り上戸なのか？
　ティオナの方は戸惑いの方がでかいってところかな。
「まぁまぁ、落ち着いて。ティオネ、そちらの方々は？」
　金髪の小人族が割って入る。宥め慣れてそうだな。
「バーチェ。カーリー・ファミリア、副団長」

「カーリー……。テルスキュラのかい？」
「そう。でも最近越してきた」
「「はぁ!?」」
　あの金髪くんは頭良さそうだな。
　カーリーって聞いて、パッとテルスキュラが思いつくやつはあんまりいないと思う。
「それで、お主の名はなんと言う」
　ドワーフのじいさんが俺に向かって名前を聞く。
「カーリー・ファミリアのラック・マーストン。団長をやってまーす」
　ウェイなノリで、俺はドワーフに近づきジョッキを掲げる。
「わしはガレス・ランドロックじゃ」
　さすがドワーフ、瞬時にジョッキを掲げるとは。俺たちはジョッキをコツンと当てると、お互い酒をあおる。
「団長？アルガナが団長じゃないの？」
「あー、それね。二年前まではあいつが団長だったよ。けど色々あってさ。今は俺が団長やってる」
「……え!?あなた、あのアルガナを倒したって言うの!?」
「え、そう言ったけど……」

「言ってない」
バーチェよ。そこは言ったことにするものだ。
それから黙って見つめ合う二人と一人。気まず過ぎるだろ。なんだこの空気。
「なーなー！」
うおっ！勢いよく肩を組んでくるベロベロの、こいつは女神か……。
酒を勢いよく飲み干すと、ジョッキを置いて上機嫌に笑いながら俺の目元を指差す。
「自分のそれって見えとるんか？」
「おい、ロキ！」
「ははは、いいって。別に盲目な訳じゃない、普通に見えてる」
このハイエルフは真面目ちゃんだな。
それにロキって言ったな。オラリオに二週間とはいえ滞在したんだ。それに、彼らの名声はテルスキュラにも聞こえてくる程。
ロキ・ファミリア。特徴も聞いてた通りだな。
酒も入り、会話は弾む。
ロキ・ファミリアは遠征から帰ったばかりらしく、ダンジョンでの面白話を聞かせてくれた。
「へー、その芋虫は体内に酸液、倒すと爆発。よく生きてたな」

「まあ、そうだね。……それにしてもすごいね、それ。彼らはテイムとは違うのかい？」
「違うな。召喚魔法、に近いかな？」
十種影法術『脱兎』
影を媒介に十種の式神を召喚することができる術式。テルスキュラでのアマゾネス強化週間に使われる魔虚羅もこの術式の式神に当たる。
現在出されているのは八羽の白兎。
「こんな魔法もあるのね……」
「ほう、手触りも兎そのままなのか。興味深いな」
「なんやこれ!?マジもんのウサギとちゃうんか？」
「かっわい～」
「かわいい……」
「アイズさんとウサギ……！」
「……」
反応は三者三様だな。
興味深そうに触ったり観察したりしているのはティオネ、リヴェリア、ロキ、だったかな。
ティオナに噂の【剣姫】アイズは、脱兎をそのままウサギとして愛でている。

ウサギを愛でるアイズに熱い眼差し向けるレフィーヤ。こいつもちゃっかりウサギを確保している。

バーチェは無反応と。いや、酔って口数が減ってるだけか。

「これは影で出来ているのだろう？肌触りは普通のウサギのようだね」

「一応生物だからな」

俺とフィンの前にいる、ムシャムシャと野菜を頬張る脱兎を観察するフィン。

俺の十種影法術は術式精度が向上していき、今ではなんの命令もしていない場合は、基となった動物と同じ反応を見せるようになった。

「この魔法はこれだけなのかい？他にも色々な種類がありそうだね」

さすがは【勇者（ブレイバー）】の二つ名を冠するだけのことはある。

これを戦闘の手札と見たのか。感がいいのか、それとも経験からか……。

「正解！もちろん他にもある。まあ、でかいからここでは出せないけど…」

「それは残念。でも、機会があればぜひ見てみたいね」

「機会があればね～」

探りって感じではないな。酒の席の社交辞令って感じかな？

フィンは悪い奴ではなさそう。

仲良くもなれたし、玉犬ぐらい今ここで見せてあげたいけど仕事中なんだよね。

警戒心も猜疑心もなく、術式についてはちょっとした興味で聞いてきた感じであろう。その評価も魔虚羅とか見せると変わってくるだろうけど……。
俺は立ち上がり、代金を机に置くとウサギをただの影に戻す。
影はパシャリと、水が落ちるように地面へと落ちた。
「そろそろお暇させてもらおうかな。バーチェがすごく眠そうだ」
「……」
うつらうつらとしているバーチェ。
ここで寝ても運ぶのは嫌だし、さっさと帰るとしよう。寄るところもあるしな。
「せっかくの縁だし、なにかあれば少し安めで依頼を受けるよ。仕事はファミリアのホームかギルドまで」
「ああ、わかったよ。また」
「また」
そう言って、俺とバーチェはホームへと足を進める。
この都市最大である二大派閥と顔見知りになれたのはでかいか。ダンジョン攻略にでも呼んでくれれば、いい儲けになるだろう。
そしてーーー
「――――っ!?」

「……団長？」
「先帰ってて、急用ができた」
「え？あっ！団長!?」
バーチェの言葉を無視して、俺は帰る道から方向を変えダンジョンに向かって歩き出した。

ここはダンジョン。
数多のモンスターが蓋をされたこのダンジョンに閉じ込められ、侵入してきた冒険者を返り討ちにしていく戦場。
そして、外では夜も開けようかと時間。
意識も朦朧と、少年は彷徨うようにダンジョンの外に向かって歩く。
己の弱さに、強くなりたいと葛藤を続ける彼は、ベルはダンジョンで無茶をした。
「はぁっ、はぁっ、…ッッ！」
息を切らして出口に向かう。その道中でも、モンスターは現れる。
防具もろくに着けずに、冒険者になって約二週間。
これは自殺とさして変わらない行為。ベルの担当者が知れば、きっと怒るだろう。

「ウォーシャドウ……」
それが八体。
生き抜けるか五分五分の状況。それでもベルはナイフを振るう。
「ハアァッ!!」
がむしゃらにナイフを振るう。
一体、二体、三体と、撃破していく。七体の撃破に成功した。だが、もう……。
（もう……ダメだ）
体力の限界を迎え、最後のウォーシャドウの爪を受け流そうとして、体勢を崩す。
目の前、寸でのところまで、すでに爪が向かってきている。
（死――――っ！）
上澄みの思考で、己の死を予感する。
「バウッ!!」
ベルの影。影から現れた。
いや、作り出された狼の爪は、ウォーシャドウの攻撃を弾き、さらに攻撃を食らわせる。鋭い一撃がウォーシャドウの頭を三枚に下ろし、体を灰に変える。
（黒いコボルト…僕は…ここで死ぬんだろうか……）
コボルトにしては大きな体躯。しかし、ゴブリンに次いで弱いと呼ばれるコボルト

に、ウォーシャドウを軽々と屠る力はない。
モンスターが目の前にいるこの状況。
だが、体力の限界から、ベルの意識は薄れていく。
「お、いたいた。生きてるか？」
どこかで聞いたことのある声。
しかし、その声の主が誰か、そもそも味方なのか。
その判断をする間もなく、ベルは完全に意識を失った。

骨

あの時、こっそり呪符を貼っておいてよかったよ。

式神の顕現に使う枠を一つ使うこと、ダンジョンの中でのみの発動を条件に、術者を問わない式神の顕現。

だが、玉犬「渾」はすぐに解けた。その理由、そしてベルが気絶した理由は精神疲弊（マインドダウン）か……。

呪術改変の効果で精神力での発動も可能とはいえ、だいぶ無理矢理の発動。自分が使う感覚で呪符を作ったのも間違いだったかな……。

「なんか悪いね。目立った傷もないし、細かい傷は反転術式で治すから許してね」

聞いてないだろうけど。

見た感じ、無事に恩恵をもらったのか……。そして面白いスキルも持ってると。

玉犬「白」

玉犬「黒」

「白はダンジョンの出口へ案内を、その後ベルのホームに案内。黒はモンスターを殺せ」

そして俺はサポーターをやる。

襲ってくるモンスターは雑魚ばっかり。
何の苦もなく、俺はベルを抱えてダンジョンの外に出ることが出来た。
既に夜は明けて朝になってしまったようだ。
「白は引き続き案内を」
その命令と共に、玉犬「黒」は影に溶けて術式は解除される。
そして白の案内のもと、俺は廃教会にたどり着いた。
「ベルくんっ！」
ワオッ！
じゃなかった。彼女は女神だな。
「ベルの主神か？」
「う、うん。君は？」
「ベルの友人だ。彼が酔い潰れたからここまで運んできたんだ。白、戻れ」
「……とにかく、中に入っておくれよ」
「そうだな」
案内されたのは廃教会にある隠し部屋。
買った当時の我らがホームよりは綺麗な廃教会。
隠し部屋に置かれたベッドにベルを寝かると、女神は安心したように慈愛の表情をベ

ルに向ける。
「ありがとう、助かったよ。えっと……」
「ラック・マーストン。カーリー・ファミリアの団長だ」
「ラックくん…僕はヘスティア。ベルくんをここまで連れてきてくれてありがとう。助かったよ。それで……」
何か迷ってる?
あ!そうだ、神は嘘がわかるんだっけ。
カーリーは俺が嘘ついても無視しがちだから忘れてた。
「あー、細かい話は本人に聞いてくれ。俺は知らん」
「……そうだね。ベルくんが起きたら聞いてみるよ」
「ああ、それじゃ俺は行く。あぁ、それと」
「何かあるのかい?」
「近々開かれる神会(デナトウス)にはカーリーも招待されている。ガネーシャとは同郷らしいからな。これも何かの縁、仲良くしてやってくれるとありがたい」
「もちろんだとも!」
この神は善神だな。彼女を見ていると、カーリーは相当イカれた神ってのがよくわかる。

このヘスティアと関わって、ちょっとマシになってくれると嬉しい。百パー無理だと思うけど。
「じゃ」
「本当にありがとう！」
そうして、俺は廃教会を後にする。
ホームにかえる頃には、既に街の住民の数が増え始め、ダンジョンへ向かう冒険者の数もチラホラと。
これまで通り、自由気ままに都会生活（オラリオ）を満喫し、それから数日が経った。
神会の日、ホームでは一柱、身支度を整える主神カーリーの姿がある。
「言っていた通り、妾はガネーシャのパーティーに行く。留守は……まぁ頼む」
「任せろ。アルガナとバーチェが何とかする」
「お主もじゃよ」
「いや、俺は今日商談がある。悪いけどマジでアルガナとバーチェにここを任せる。バーチェは他のやつらとダンジョンに。アルガナはここで団員の稽古。カーリーの送り迎えは俺がやる」
「わかった」
「任せてちょうだい」

アルガナは最近、女性的なしゃべり方が板についてきたな。バーチェはこの変わりように混乱しているみたいだ。面白いからフォローはしない。

そうして各々が指示通りの行動を始める。

そして俺はカーリーを連れてパーティーの会場へと歩き始める。

「お主、商談というのはどういう意味じゃ？」

カーリーは訝し気に問いかけてきた。

まあ、妥当な反応だろうな。カーリーの俺に対する印象はクズでヒモな奴なんだろうな。否定もできないし間違ってもいない。

ただ、まったく仕事をしないわけではない。ダンジョンの祈祷と呼ばれる結界がいい例だ。

依頼者であるウラノスたちは、俺に結界の製作を頼んだ。本当は神で行うつもりだったらしいが、なるべく人の手で事を治めたかったらしい。詳しくは知らないが、神の力（アルカナム）関連であろうことは察するに余りある。

あの時の依頼の報酬はダイダロスの腕を借り、俺と呪具を作った。その作品は俺の呪具の中でも屈指の性能。

そうやって、でかい仕事を受けることは時折あった。

今回もまた、それだ。

「そのままの意味、商談は商談。内容と報酬についての相談ってだけ。いい感じに儲かったら酒でも奢る」
「……なら、楽しみにしておくかのう」
「そうしてくれ」
カーリーは案外、神らしいことをすることがある。闘争と殺戮が好きなだけで、ちょっとそこに目を瞑れば善い神だって、たったの二年の付き合いでもわかる。
「さ、着いたぞ」
「うむ、ご苦労じゃったな。夜には戻る」
「りょーかい」
カーリーと別れて、俺は依頼主に指定された場所へと向かう。
そこは都市の端にある寂れた建物。
そうそう誰も寄り付かないであろう建物に入ると、見覚えのある気配がした。
「いるんだろ。約束通り来たぞ」
呼びかけに反応して、徐々に俺を呼びつけた人物の姿があらわになる。
全身を黒のローブで包む幽霊を想起させる姿。
「お前、確かウラノスの……」
「ああ、私はフェルズ。ウラノスの使いだ」

やっぱり、依頼者はウラノスか……。
使いに骨の、人間?を寄越すとは……前もイカれ野郎と組まされたし、ウラノスは神の中でもイカれた人間と因果で繋がってるみたいだな。
「で、ウラノスのところに案内をしてくれるのか?」
「いや、ここで詳細を話す」
ここで……なるほど、帳を下ろせってことね。
「闇より出て闇より暗く、その穢れを禊ぎ祓え」
帳の効果は範囲を狭め、半径5メドル前後に留める。出入りは誰にでも可能ではあるが、光や音を完全に断つ。
簡易領域で閉ざしてもいいが、呪術改変はオンオフが出来ない。
フェルズの骨の体への影響を考慮し、内視話は帳の中でとする。
「どうぞ」
「助かる」
フェルズはウラノスに話を聞いていたのだろうか。
呪術に対し驚いた様子を見せることはなく、依頼内容の詳細を話し始める。
「ラック殿は人語を解すモンスターに、会ったことはあるか?」
「……ああ、何度か」

「っ！本当に!?」
「どうした急に?……ああ、どこだったかな」
唐突に驚いた様子で詰め寄る骨。
確かに会ったことはある。
怪物趣味の変態貴族の圧政。反乱軍の依頼だったかな。
その変態貴族の圧政を止めるため、貴族を反乱軍に引き渡した。報酬として、貴族の家にある金目のものを頂いた時に見つけたんだっけ?
数人いたのは覚えているが、顔は出てくるが、モンスターとしての名前がパッと出てこない。
「ラキアの……北の方だった気がする。鳥っぽい奴と、犬っぽい奴もいた気がするな。その日、一緒に飯食ったまでは覚えてるんだけど、街中でドンチャン騒ぎして、あんまり記憶がないんだよ」
「そうか……だが、生きているか」
「そうだ！」
「何か思い出したか!?」
「ああ、楽しかったぞ」
「……そうか」

うっわー、冷たい反応。洒落のわからん奴だな。
とはいえそうか、確かに普通に見たらあれらは迫害対象おそらく依頼は。
「そいつらはここにもいるのか？」
「そうだ。異端児、ゼノスと呼称し、我々は彼らと人間の共存を望む」
「それで、本題だな。依頼内容は？」
「ああ、異端児の保護を頼みたい」
「期限は？」
「未定だ」
「ということは、いざという時の保護ってことか？」
「ああ、そうなる」
なるほど、保険として俺を使うつもりなのか。
俺の依頼には優先順位がある。
俺が受けた依頼は先に受けたものが、後に受けたものより優先される。
つまり、先に依頼しておけば、そのいざって時に俺というカードが無条件で、今回であればウラノスの手札になる。
「そういうのは動きが制限されるからな。それなりの報酬を期待しても？」
「もちろんだ。無理な額を要求しなければもちろん」

「いや、こちらから指定する。フェルズは神秘を使えるか？」
「ああ」
「良かった。コレを」
　そう言って俺は一枚の紙を渡す。
「それはホムンクルスのレシピ。ただし、情報を持たない空の魂を持つホムンクルスのレシピだ」
「コレでどうしろと？」
「胸糞悪いが、備えだ。コレを大量に納品して欲しい。コチラは特に制限はない。とにかく作り続けろ。素材は俺が提供する。フェルズには腕を借りたい」
「コレは外法の術だぞ」
　そうだろうな。意思の宿らないとはいえ、人を人の手で生み出す。これほど罪深いものはないだろう。
「知っている。だが、人間を使うわけにはいかない。俺はそこまでイカれてない」
「……そうか。今はお前、いや、お前を信じるウラノスを信じよう」
「それでいい。それとコレを」
「これは…鷹笛か？」
「そうだ。そのいざって時に鳴らせ。なるべく早く向かう」

　これは登録された呪具に音を伝える呪具。もう片方の呪具、俺が持つ方の呪具が居場所も示す一級呪具。
「わかった。ありがたく貰い受ける」
「バカ言え。貸すだけだ」
　すぐに貰おうとするな。貴重品なんだぞ？世界の端にいても音が届く、一級呪具とは言え性能は破格なんだよ。
「話は終わりか？」
「ああ、報酬はホームに届ければいいか？」
「ああ、それと一応『縛り』を設ける。やり方はわかるか？」
「ああ、ウラノスから聞いてきた」
　それは上々。
　縛りによる契約によって、俺たちは利害で結ばれた。
　これで話は終わり、帳を解く。
「じゃあな」
「ああ」
　そう言って俺たちはその場を後にした。
　フェルズは姿を消しこの場を去ったが、アレはマントに備わった能力のようだ。透明

化とは面白い。俺には見えてるけど。

さて、商談は終わり。

カーリーを迎えに行って、後は帰るだけかな。

それから数日後。怪物祭にて、再びロキ・ファミリアと邂逅する。

疾走

「ラック、祭りに行くぞ」
「祭り？　ああ怪物祭ね。はいはい」
カーリーは基本、ホームで団員の闘争を眺めて過ごしている。
アルガナとパーチェは俺の知らないところでガネーシャ・ファミリアから仕事を受けたらしく、モンスターの捕獲に駆り出されて、今はガネーシャ・ファミリアに街中の警備で協力中らしい。
よって、祭りには俺とカーリーの二人で回る事になった。
現在、オラリオの人々は街規模での喧騒を奏で、普段のオラリオでは食べられないような様々な珍しい食べ物が売られた屋台がいくつもある。
「これうまそうじゃの」
「冷やしきゅうり？　また懐かしいものを。ほら、買ってやる」
「めずらしいのう。奢りか？」
「ああ、もちろん」
アルガナの奢りだ。アイツの物欲は死んでるからな。怒らないだろ。

買ったナイフは上層で練習程度に使ってるみたいだ。格闘戦闘しかやってこなかったからか、ナイフの扱いを練習するって言ってた気がする。いずれは二本持つ予定らしい。マスターしたら呪具を作ってやってもいいかな。

ちなみに、パーチェは毒の強弱による種類の使い分けの練習中。痛みを伴う神経毒の他に、麻酔の役割を持たせたり、痺れ、眠りなど。相手によって効果の出方が違うから、そこは洞察力次第かな。

以上、どうでもいい話。

それにしても怪物祭か……。モンスターのテイムを民衆の前で行うのは派手でウケがいい。

さらに、これによってモンスターに対する印象は変わる。民衆にとって、ほんの少しモンスターという脅威が身近に感じられる。

ああなるほど、ガネーシャはウラノスの協力者なのか……。

だが、こんなものが何の足しになるのか。異端児との共存？　ダンジョンをどうにかしないと無理だろ。

……いや、それがわからないウラノスじゃない。てことは、優先事項は異端児の安全ってところか？

ダンジョンってのはまだまだ攻略できそうにないし、保護しないと時間の問題で絶え

るだろうな。
「次はアレじゃ！」
「また食いもんか。太るぞ」
「神は太らん。早よ行くぞ」
「はいはい」
怪物祭を楽しんでるようで何よりだな。
ん？　なんだ。
「……」
「ラック、次は……どうしたんじゃ？」
今、空中で見えたのは風の魔法か……？
視界の端を横切った気がするが、なぜ街中で魔法を使ったんだ？
「ラック？」
「ストップ。おかしい、何かあったのかも」
モンスターでも逃げ出したか？
ガネーシャ・ファミリアはウラノスの話しがなくても、現在は協力関係。
もし、本当にモンスターが逃げ出していたらガネーシャファミリアだけでなく、協力関係のカーリー・ファミリアの信用に影響が出るぞ。

「団長！」
「アルガナか。何かあったみたいだな」
「はい、少しお耳を……」
俺の読みが当たったか……。
モンスターの脱走。ここで俺が動かないと責任問題に……。
「アルガナはカーリーといろ。俺は様子を見てくる」
「わかったわ」
今はとにかく急いで処理する。風が来た方向、行った方向は問題なしとしよう。他の場所のモンスターを処理するとしよう。
なぜ脱走なんて起こった。モンスターの移送中……モンスターの保管方法に不備……あるいは故意か……。
どっちでもいい。とにかく狩り続けよう。
雑魚ばかりのモンスター。とにかく数を狩ることを重視するが、街中で呪霊や式神を出すことは憚られる。
なら――――
「最速で片付ける」
投射呪法

一秒を二十四分割し、予め決めた通りの動きをトレースする。
テイムに使える程度のモンスターを狩るのに、そう手間はかからない。
俺は目についたモンスターを狩り続ける。

ラックは街を駆け続ける。
その疾走は、すでに穿血の初速に至る。
このオラリオ、最強の都市に投射呪法のタネを見破るものは多く存在する。
しかし、それは使用者が並みの術師であった場合。
ラックの術師としての実力は、まさしく『呪いの王』に相応しい。
この日、誰にも観測されぬ閃光が、都市の最速を塗り替えた。
「グルアアアァァァ!!!」
「ブオオオオォォォ!!!」
ラックの速さと体重、呪力を乗せた飛び蹴りがモンスターの体を粉砕する。倒したモンスターの魔石もしっかりと回収しながら街中を駆け巡る。
（結構倒したな。そろそろ――――っ！）
目端に捉えたのは詠唱中のエルフの魔導師。

魔法発動までの詠唱によって漏れ出た魔力を、六眼が観測する。
しかし、なにより目を引くのは地面より這い出る緑の触手。彼女はそれを避けられるような体制ではない。
急な方向転換。失速することなく、さらなる加速でエルフのもとへ――――
「きゃあっ」
「レフィーヤっ!?」
ラックはレフィーヤを抱え屋根の上に着地。しかし、触手の狙いは未だレフィーヤに向かう。
シン・陰流『簡易領域』
レフィーヤと自分を包むように展開したそれは、領域内に侵入した物をフルオートで迎撃する。シン・陰流最速の技『抜刀』。これはその応用。
ラックは一部の式神を用いる術式の使用中のみ、武器の使用を解禁する。
だがそれは、その術式のときにしか武器使用が解禁できないことでもある。投射呪法は呪具使用の解禁条件に当てはまらない。
『抜刀』は刀身を呪力で覆い鞘の中で加速させる。
しかし、その技術は投射呪法によってさらに早く、正面の敵だけでなく全方位に特化する。

（不意打ちに備えての簡易領域。いつでも来い！）
そして読み通り、不意打ちはあった。
触手はレフィーヤだけでなくラックも襲う。
しかし、雑魚とはいえ狩り続けたモンスターの数々。
全力での術式の発動に、上がりきったボルテージ。
二本の触手を最速かつ無傷で潰すため、集中は極限に達す。
二撃の拳から放たれたのは黒い閃き。
打撃との誤差は０．０００００１秒以内。呪力が衝突したその際に生じる空間の歪み。
その名も――――
『黒閃』
「すっごーー！」
「何よ今の…。下手したらオッタルより威力があるわよ」
威力は絶大。
ティオネとティオナでは、武器が無かったとはいえダメージを与えることのできないモンスターを素手のまま。
さらには触手を真っ二つに断ち切るほどの威力を出したスキルのようなもの。

「ぼさっとするな。来てるぞ！」
「バカっ！あんた――――」
見惚れるほどの一撃に、ティオナの動きが止まる。
モンスターは止まってくれるはずもなく、今度はティオナを襲う。
駆けだすティオネとラック。
（クッソ！間に合わない。ならば――――）
手近に見える、先端の欠けた触手。
合って間もなく、付き合いも短いが、明らかな隙に動かない第一級冒険者はいないという確信。
ラックは触手に触れる。
（（隙ができた！））
一秒。レベル5を前に一秒間の強制フリーズ。
触れることでモンスターの動きは停止する。
「うおりゃあああぁぁぁ！」
（無理か、だが注意は引けるか……）
「レフィーヤ、だったかな。魔法を撃てるか？飛び切りのやつを頼みたい」
「わ、わかりました！やってみます」

「やってみるじゃない。絶対に成功させろ。俺ら三人が絶対にあれを通さない。とにかく集中してやることだ」

言いたいことだけ言って、ラックはモンスターに飛び込んでいく。

言い方はきついが、冒険者にとって失敗は死を意味する。

「よしっ！」

レフィーヤは頬を叩き、気合を入れなおす。

飛び切りの魔法。

想うは、レフィーヤにとっての師である【九魔姫（ナイン・ヘル）】リヴェリア・リヨス・アールヴが使う第一階位攻撃魔法。

【ウィーシェの名のもとに願う】

（マジか。魔法一発それっきりのイタコってところか。繋がりがいるみたいだが、対象はエルフか……？降ろす分と発動する分の時間を稼げってことか……）

「レフィーヤの仲間ならわかるよな!?一歩たりとも通すなよ!!」

「うん！」

「わかってるわ……よっ!!!」

ティオネは拳を叩きこむも、やはりダメージにはならない。

ティオナとラックにとってもそれは同じ。ラックの黒閃が出ればダメージにはなる

だろうが、黒閃は早々出るものじゃない。
最前線にいるティオナとティオネを考慮し、領域の使用は選択肢から外す。
術式の切り替えは、切り替えてる間に攻撃が来れば最悪の場合は死ぬことになる。
今はレフィーヤを信じる。
その想いは三人の共通認識となった。
【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴（らくえん）の契り】
すでに、言葉は必要ない。
必要なのは足止めであって、目の前にいるモンスターの攻略ではない。
【円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか――力を貸し与えてほしい】
ロキ・ファミリアの、オラリオ最強の魔道士の後継が、最高の魔法を撃つためのお膳立て。
ラックが止めて、ティオナとティオネで隙をつく。
【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風（うず）を巻け】
そして、詠唱が終わろうとしていた。
【閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け三度の厳冬――我が名はアールヴ】
（ダメ押しかな……）

【ウィン・フィンブルヴェトル】
強制的な、一秒の硬直がモンスターに見舞われる。
直後、三条の吹雪、極寒の吹雪が、モンスターを氷漬けにする。
「やったか!?」
「ちょっと、あんたやめなさいよ」
「それ知ってる！死亡フラグだ」
ラックのくだらないノリに付き合う二人。
しかし、やったか!?などと言いつつも、ラックの六眼（め）にはモンスターが屍として映る。
氷が溶けると同時に、モンスターの体は灰と化す。
魔法の発動と、大量の精神力の低下。
安心と疲労によって脱力したレフィーヤ。
その体を今駆けつけたであろうアイズが支える。
「レフィーヤ、頑張ったね」
「アイズさん……」
（何だあの空間）
「みんなー」
一息ついた三人に、子供の手を引くロキが剣を持って現れた。

「ありゃ、アイズたんが来る前に、もう片付いとったんか」
「うん」
「あれ、ロキじゃん」
「んん？自分はたしか…ラック、やったよな？」
「どうも。ロキ、状況はわかる？」
数日ぶりの再会だが、その状況は手放しで喜べる状況ではない。
両者、出来れば酒場で会いたかっただろう。
事態の収拾という同じ目的を持つ二人の利害が一致した。
「自分んとこの副団長が地下水路におるモンスターの討伐を完了したそうや。今は見回りに行っとるって言ってたわ」
「そうか、ありがとう」
「ええねんええねん。走り回ってモンスター狩まくっとたんって自分やろ？」
「まあね。もしかして見てた？」
「いや、そうかなぁ思ただけや」
（わざわざカマかけなくても教えるのに……）
話術によって駆け引きをする神との交流は、ラックにはあまりない。
ラックは自分自身が最強だと、驕りでなく事実として受け止めている。

ゆえに、あまり嘘をつかない。ただし、適当なことを言うことはあるが……。
「俺なしでも片付きそうだし、俺帰っていい？」
「ならん」
帰ろうとするラックに待ったをかけるのは、ギルド職員を引き連れたカーリーだった。
「カーリー……。アルガナは？」
「ガネーシャのとこの眷属と走り回っておるわ。それよりラック、お主には団長としての仕事があるじゃろう」
「だよねぇ～」
「行くぞ。それと、久しぶりじゃのう、ティオナ、ティオネ」
「カーリー……」
「……」
「別にお主らを追ってきたわけではない。そう警戒するな」
「信じろっての？」
「妾は妾の興味。その果てを見た。業腹じゃが妾も認めている。もう最強の戦士にこだわる気はない」
「おい！さっさと行くぞ」

「わかっておる！それじゃあ、達者でな」

ティオナとティオネが何かを言う暇もなく、二人は去って行ってしまった。

だが、こんな格好つけた去り方をしたも、ティオナとティオネ、そしてラックはそれから間も無く再開することとなる。

労働

「チッ。またダメか……」
怪物祭でこ活躍を認められ、カーリー・ファミリアはそれなりの額をギルドより送られた。
収入の全てはオラリオにいるカーリー・ファミリアの全団員に振り分けられたが、ラックは臨時収入などと言って、全額をカジノに投入した。
「あーあ、仕事探さないとな。フェルズからの報酬は全て現物。必要だから依頼したが、金にはならないからな」
そんな独り言をこぼしながら、夜の街に消えていく。
ダイダロス通りの入り組んだ道を歩き、ホームへと向かう帰り道。
「おーい、いつまで付いて来る気？」
ラックは後ろに感じる気配に立ち止まり、何者かに声をかける。
「バレた……」
「隠れるの上手くなったよね」
「よく言う。ずっと気付いてた……」

後を付けて来ていたのはバーチェ。
ラックはバーチェの毒使い、口元のベールといった特徴から、安直に隠密の技術を教えたことがあった。
まじめに練習を続けたバーチェの隠密はかなりの実力となったが、バーチェはこの技術を教えられた理由が、ノリと気紛れによるものだということを知らない。
「で、何かよう?」
「ダンジョンに行かないと」
「……」
「嫌そうな顔……」
さすがに、オラリオに来て約三週間。
怪物祭であれほどの力量を示していながら、一度もダンジョンに潜らないラックに対し、ギルドは組織として疑惑を向け始めていた。
「私も、一度ぐらい潜って欲しい」
「バーチェが、どうして?」
「そろそろアルガナの財布がピンチ」
心底嫌だ。顔からそんな感情が見て取れるが、今回のバーチェの目は本気だというのも、ラックは感じ取っている。

「はぁ。わかった、行くよ」
「……。ホント？」
「ＭＡＪＩ」
ダンジョンに潜るという宣言に、心底驚いたという顔のバーチェ。
頑なにダンジョンに潜らない理由。バーチェ、アルガナを含めてファミリアの団員は何かあるんじゃないだろうかと思い始めていた。
本当は、ただただ都会生活が楽しく、戦闘以外に娯楽を求めていた。
面倒なだけだという真実を知るのは、嘘を看破し察しのついていた神カーリーと、当の本人であるラックのみ。
「じゃあ、行ってくる」
「待って、アルガナを呼んでくる」
「お前らも来る気か？」
「うん。それと、アルガナに声をかけておかないと、私が殺される」
ラックのダンジョン・アタック。
彼が求めるのはただ一つ。ダンジョンで得られる莫大な富。
アルガナとラックの瀕死の財布を救うための冒険が始まる。

ギルドで待つ。とは言ったものの暇だな。
いろんな装備のやつがいて、見てるだけでも面白い。
ダンジョンで全身鎧に大剣はキツくないのか？
あそこにいる奴らは着物か……。俺も子供の時はよく着てたっけ、懐かしい。
ダンジョンに入る冒険者たちを観察していると、見知った顔を見かける。
「あ」
「ん？おや、ラックじゃないか。今からダンジョンかい？」
フィンか……。裏にいるのはロキ・ファミリアの面々。皆さんお揃いで。
「そうなんだよ。パーティメンバーを待っててね」
「団長～！」
お、来たか。
「あ……」
どうした、バーチェ。そのやっちまったみたいな顔は？
「あ”？」
「あ”ぁん？」
ティオネとアルガナは、目と目が合うと睨み合い、一触即発いった空気が流れる。

こんな公衆の面前で手を出さない、そんなアルガナの成長は評価するが、二人とも顔が怖い。
「ねえねえ、バーチェもダンジョンに行くの？」
「ああ」
バーチェのほうは……陽の者と陰の者みたいな会話だな。
だが、アルガナと違って仲は良さそう。
「なあ、お二人さん」
「どうしたの？」
「？」
「あの二人って仲悪いの？」
「あー、テルスキュラでいろいろあってさ。ティオネはアルガナがすっごく苦手みたい」
「あらら」
いや、苦手って……。ティオネの方は今にもアルガナを殺しに行きそうな目をしてるぞ。
「そうだ、フィンたちは今からダンジョンだよな？一緒にどう？」
「……そうだね。構わないよ」
「お、マジで？ラッキー。報酬は山分けでいいだろ？」

「いいのかい？それだと割合はこちらが多くなるけど」
「大丈夫大丈夫。最後にこいつらを地上まで送ってくれるなら、特に言うことはないしな」
「最後に？君は残るつもりなのかい？」
「ちょっと見て回ろうと思ってさ。どう？」
ダメ元で協力を申し出てみる。ファミリアの等級はあちらがダントツに上だが、アルガナとバーチェという同格が協力すると考えればアリなんじゃないか？
フィンが考えるそぶりを見せ、少しすると口を開く。
「いいね、他派閥との協力……。試してみるのもありかもしれない」
フィン……めちゃくちゃいいやつじゃん。
「いいね、ならお世話になっちゃおう」
「な!?団長、何を考えているのですか!?」
「まあまあ、今のティオネの実力も見てみたいんじゃない？いい機会だと思ってさ」
おそらく、アルガナとティオネにはそれなりの付き合いがあるのだろう。
戦い方の基となる部分が、随分と似ている気がする。
だから、こう言えばアルガナも納得できるだろう。まったく興味がないってわけでもないだろうから。たぶん。

俺はアルガナの目を数秒見つめる。
「……わかった。わかりましたよ！」
はい、堕ちた。
「よしよし。あとはアチラ次第だが……」
ファンも説得中かな。
ティオネだっけ。アレもアマゾネスの色が強いな。
どういう関係か、見てればよくわかる。
「ティオネ、僕らは彼に恩がある。話によれば、レフィーヤが危ないところを助けてくれたらしいね。君も、その場にいたんだろう？」
「はい……」
「なら、恩は返さないとね。ティオナとアイズの武器の件もある。彼らがいればもっと深く潜れるかもしれない」
「団長がそこまで言うなら……」
ティオネはフィンに……なんか、これには見覚えがあるな。またデジャヴか？
……まぁいいか。考えてもしょうがない。
「話もまとまったし、行きますか」
「ああ、行こう」

はじめてのダンジョン。
地下にあるから薄暗いのかと思っていたが、案外明るいのな。
そんなくだらないことを考えながら、ダンジョンを進んでいく。
とはいえ、上層のモンスターは相手にならない。
十階層を超え、中層と呼ばれる場所まで辿り着くのに、そう時間はかからなかった。
「うおりゃああああっ!!」
おおー!ティオナは随分豪快な戦い方をするのな。
巨大な両刃剣を軽々振り回す程の膂力。
見たところ、武器の素材はアダマンタイトといくつかの鉱石を混ぜたもの。
ここまで軽々持ち上げる筋力は、さすがはレベル5といったところかな。
そして……。
「ふっー!」
負けじとバーチェも短剣を振るう。……そう、短剣を振るった。
前までは徒手を中心に、というよりは徒手オンリーで戦っていたバーチェ。俺との修行が活きて来ているようでよこった。
アルガナとともに、バーチェにも武器の扱いを教えている。武器の扱いに関しては、二人とも中々悪くない。

「その短剣、慣れてきたようで良かったよ」
「そうそう！バーチェって武器使うんだね」
この二年ほどで、いくつもの武器を試した。
その結果、バーチェには短剣と弓の適性が高く、毒の付与魔法（エンチャント）との相性も良かった。
だが、汎用性の高さから、ダンジョンでは短剣をメインで使うと、少し前に話してくれた。
「はあっ！」
「よっ！と」
前線に立つティオナとバーチェの間を抜けたモンスターを、俺とアイズでカバーする。
アイズの剣には不壊属性がついているようで、少々無茶な攻撃にも耐えられるようだ。
「それ、なんかおかしい？」
「気付いたのか？まあ、アイズからしたら変かもな」
いい目をしているな。
この刀を変に感じるのはわかる。
「これは俺が作った極東男児の魂『刀』。俺は鍛治師もやっててさ、最近はこいつを育て

てるんだ」
これは、三千年前に存在した呪術師の規定で言うところの二級呪具。
俺の趣味の一つである呪具の収集。その趣味が高じて始めた呪具の製作。
いつからかやっているかは覚えていないが、そろそろ二千年は経つと思う。
「ほう……その刀。それは魔術師の私から見ても一級品だ。それをあなたが作ったと？」
「そう、でも俺は真っ当な鍛治師じゃない。一本作りきるのに、早くても九年はかかる」
「九年〜？長すぎじゃない!?」
「まあね。でも園芸みたいで楽しいよ」
それも、手の全然かからないタイプの園芸。
この呪具化のやり作り方は至極単純。
長い期間、俺の呪力を普通の道具に篭め続けることで呪具化させるだけ。
時間を掛けずに術式で一気に作るのも悪くない。だけど、時間の経過とともに歪んだ呪いが、どんな術式になるかわからないのが面白いところ。それに、時間を掛ける縛りが働いて、特段強い呪具になるのも強み。
ちなみに、この刀は四十二代目で、銘も術式もない鈍ら。
「気の長い話だな」

「エルフにとっては瞬きだろ？」
「フッ、確かにそうかもな」
「これは完成間近だからさ、楽しみにしててよ」
　中層はやっぱり余裕だな。
　ダンジョンについてはよくわからないし、進行方針はフィンに丸投げが最適だろう。
「うん、ラックは余裕そうだね。このまま十八階層まで行っちゃおうか」
「オッケー」
　この辺は手応えのない敵ばっかりだし、ガンガン進んでいくのは最適解だろうね。
　そして、俺たちはさらに奥へと進んでいく。
「すごっ！街になってるのか？」
「うん！ここはリヴィラの街。昔のすごい人が立てたんだ」
　ダンジョンに街か……。面白いことを考える奴がいるもんだな。
「それで、ここからどうする？」
「そうだね、宿を取ろうかな」
「ここの宿は高い」
「おいおいマジか。なら野営にするか？」
「待て」

リヴェリアが足を止め、街の様子を伺い始めた。
「どうした。リヴェリア」
「街の様子が少々おかしい」
「そうなの?」
「そうですね。人がいつもより少ない気が……」
初見だと街の様子とかわかんないからな。お、これはリヴェリアの言葉のおかげか、アルガナも何かに気がついたみたい。
レフィーヤもすぐに気付いたみたいだし、やっぱりエルフは空気感に敏感みだいだ。
「アルガナ、何がわかった?」
「団長……血の匂いがする。それも近い」
血の匂い。ロキ・ファミリアみたいな高いファミリアも利用する街だ。殺人が日常化してるとは考え辛い。殺人事件の線が濃厚かな。
「場所はわかるか?」
「ああ、あそこだ」
アルガナが指したのはやさ小さな宿。
「くそっ!たまったもんじゃねぇぜ」
そして、そこから勢いよく飛び出してきたのは、左眼に眼帯を付けた大柄なヒューマ

ンの男性。フィンが言うには、ボールスというこの街の顔役を担う人間らしい。

花

ボールスに案内された部屋には、顔のない死体と不安そうにベッドに座る青年。
ラックたちが話を聞いたところによると、犯人は男と一緒にいた女である可能性が高い。
ただし、二人の顔とも顔が隠れるような装備だったため、どんな人物だったかはわからない。
被害者は、ボールスが持ってきた開錠薬（ステイタス・シーフ）と呼ばれる、冒険者のステイタスを強制的に表示させるアイテムによって、ハシャーナという名のレベル４冒険者と判明した。
レベル４を瞬殺できる力量を持つ女。それがこの街に紛れ込んでいる可能性が高いというフィンの予想を聞いたラックは、玉犬「黒」の魔力探知でその女の魔力を追わせていたが……。
「モンスターの大量発生!?急すぎるだろ！」
「リヴェリア、モンスターを惹きつけろ！」
「ああ！」
リヴェリアが詠唱を始める。

このモンスター、食人花は魔法魔力に反応する特性を持つ。フィンはティオネたちの報告と、五十階層での新種発見から学習し、その場における最適解を導き出す。

モンスターの注意は、魔法の詠唱により魔力が高まるリヴェリアへと集まる。

「お、来た来た。フィン、合わせる」

触手による攻撃はリヴェリアへと一直線に突撃する。

だが、放たれた触手がリヴェリアの身体を突くことはない。

「わかった」

短い会話は、ラックのフィンに対する信頼。

フィンはまるで一人で戦っているように、最も槍を振りやすい体勢で触手を迎撃する。一切無理なく放たれた槍撃は触手を最低限に迎撃しながら、モンスターへと駆け出す。

秘伝「落花の情」

フィンとラックによる初の共闘は、まさしく阿吽の呼吸と呼べるほどに、息の合ったコンビネーションを魅せる。

落花の情は領域対策の術。術式が命中する瞬間、呪力を放出し身を守るカウンター技ではあるが、剣技に転用する事により超高速での剣戟を可能とする。

そのスピードは、フィンの槍と寸分違わぬ速さを保つ。

「フィン、埒が開かない。一気に行くよ」
片手で結べる掌印。不意打ちに用いられる式神が影より這い出る。
大蛇
「攻撃はそこまで強くない。一気に食い荒らせ！」
大蛇はラックの指示に従い、猛スピードで前進する。
触手を掻い潜った大蛇は食人花に噛み付く。
「ギエエエエエ！」
「おーい、魔石は飲み込むなよ」
大蛇は容易に食人花に致命傷を与える。噛みつき、巻きつき、薙ぎ払う大蛇の縦横無尽に戦場を這うモンスター。
「これが言っていた大きい使い魔かい？」
「そう、こいつは大蛇。見ての通り蛇の式神」
「そうか……。僕はこの場の指揮を執る。ラックはモンスターの――――」
アオオオオオオオオオオン!!!!
「遠吠え……？」
「合図だ。女を見つけた」
探索に出していた玉犬「黒」の遠吠えが、リヴィラの街全体に響き渡る。

それと同時に、女人型の食人花が出現。
「チッ、新手か……まだまだ来るか？どうする、フィン」
「ラック、ここは僕らで充分だ。君は見つけた犯人の対処を頼む」
「わかった」
鵺
鳥の影絵を象る掌印を結ぶ。現れたのは骸骨を模す仮面をつけた大きな怪鳥。鵺が勢いよく飛翔する。
鵺の脚に掴まり、遠吠えが発生した場所へと駆けつける。
（アイズ……やばい、あのままだと殺されるぞ!?）
ラックの目下では、アイズにとどめを刺さんとする赤い髪が映る。
「鵺、急げ！」
ラックは鵺の脚を持って投げ飛ばす。
投げ飛ばされた勢いを推進力として、高速軌道でアイズの前に立ちはだかる。
「やれ」
「――――ツッ!?」
鵺の呪力は帯電する。助走なしの体当たりだろうと、電撃の威力に減衰はなく、赤い髪の女、レヴィスの身体が硬直する。

「待たせちゃったかな？アイズ、今治す」
「ラック…さん……」
ラックがアイズの肩に触れると、その瞬間に時間が反転したかのような急回復が起こる。
「すごい……」
（……治ってる。たぶん、リヴェリアの回復魔法より速い）
反転術式による急回復。
アイズが感じた通り、ラックの処置はリヴェリアの使用する第三階位回復魔法、ヴァン・アルヘイムを遥かに超える性能を誇る。
それを詠唱なしで扱う、異端。
「問題は？」
「ない」
「オーケー」
簡潔な問答を終え、アイズは立ち上がる。
「新手か……」
「そうなるかな。あっちはフィンが頑張ってるよ」
助走なしならこんなものか。そんなことを考えながら悠然と歩み出す、ラックの影が

揺らぐ。
「アイズ、剣を取りな」
「――っ!?いつのまに」
ラックの影は二方向へと飛び出す。
レヴィスが蹴り飛ばした筈のアイズの剣、デスペレートがアイズの目の前に現れる。
「ありがとう」
「チッ」
剣を取り、再び剣を構えるアイズを見て、レヴィスは舌打ちをする。
「こっちにばっかり気を取られても?」
ラックの言葉と共に、レヴィスは後ろから迫る気配に気付く。
雷撃後、空を舞っていた鵺。旋回し、助走をつけた上で放たれる雷の翼撃が、再びレヴィスの体に見舞われる。
「っ!?」
「目覚めよ(テンペスト)」
雷撃により、再びレヴィスの身体が硬直する。
アイズはその隙を見逃さず、風属性の付加魔法『テンペスト』による強化効果により、最速の刺突を見舞う。

「クソっ！」
剣が頬を掠め、レヴィスはギリギリのところで剣閃の回避を間に合わせた。
（マジか、まだ身体が上手く動かない筈だけど……）
鵺の雷を受け、その余韻による硬直があっても動く。その耐久力に内心驚きつつも、冷静にその場を分析する。
「アイズ、そいつは魔法の類は使えない。ガンガン攻めるぞ！」
「わかった」
アイズはコクリと頷くと、風を更に強める。
アイズの風を使った変則攻撃に、ラックの式神とシン・陰流の剣術を混ぜる。
「っ!?」
間髪入れずに行われる攻撃に逃げ場もなく、レヴィスの体には数々の斬撃の跡が残る。
（鵺の攻撃が当たらない。あれだけのピンチ。不発だろうと、そりゃ警戒するよな。でも、お前はそこまで気にかけなかっただろ。俺が何故ここに来れたのか）
「犬だと!?」
玉犬「黒」は、未だ健在。隙をつくように現れた玉犬に、レヴィスの意識がラックから玉犬に移るのを、ラックとアイズは見逃さなかった。

「リル・ラファーガ!!!」
（今!!）
　玉犬「黒」解除
「なっ!?」
　その身体が影になり、玉犬「黒」の体が崩れる。
　見たことのない式神に、威力の未知数な攻撃。迷いの末にあるのは玉犬「黒」の攻撃から身を守ること。
　そこに術式の解除を加えることで、さらなる迷いを生み出す。
「舐めるなっ!!」
　レヴィスに小手先の技は通じない。迷いを振り払い、アイズの攻撃をカウンターで対処する。
　だが、レヴィスは解除の意味を考えなかった。
　玉犬「渾」
「甘いなー。戦いは、騙してなんぼだろ?」
「ガフッ!」
　玉犬「渾」はレヴィスの脇腹を大きく切り裂く。
　口からは血が噴き出し、激痛と脱力感が体全体を襲い膝をつく。

「ハッハッ……」
（いける！）
浅い息に、膝をつくレヴィス。
叩くなら今、この時。
アイズは駆け出し、レヴィスの眼前へ。
「フッ！」
死力を尽くしたレヴィスの、渾身の蹴りがアイズに向けられる。
レヴィスが万全であれば、おそらくアイズでは受け切れない。
だが、今のレヴィスにアイズの風を打ち破る余力は残っていない。
「クソッ！」
アイズの剣が、レヴィスの足先を斬り飛ばす。
「グッ……ガ、アアアア！」
足先を失い、よろめくレヴィスの後ろには、納刀したまま構えるラック。
その技は、その構えは、極東で生まれた五千年以上の歴史を持つ抜刀術の数々。その中でも最も混沌とした時代、呪術全盛期において多くのものが振るった流派。その最速の技。
シン・陰流

簡易領域「抜刀」
間合いに入った瞬間。
音速を上回る剣速。アイズを相手に余裕を見せたレヴィスの、右腕をやすやすと斬り飛ばした。
「あーあ、魔石を狙ったんだけど…避けられるとは……」
（すごい…、レフィーヤたちから聞いていた格闘術。それに加えて、あれだけの剣術。たぶん、技術だけなら猛者にも届く）
すでに息も絶え絶えで、片腕と片足が使い物にならない者を前に、ラックは余裕を見せる。
「鈍ったかな？ま、次は当てる」
そう言って刀を構えるラック。
そこから溢れる死の気配が、レヴィスの頭に恐怖と焦りを与える。
「っ！」
抗いきれぬ本能に従い、レヴィスは背を向け駆け出す。
「逃がさない!!」
駆け出すアイズと同時に、ラックは指を絡めるように掌印を結ぶ。
先には川。落ちたとしてもレヴィスが死ぬことはないだろう。ここで逃せばおそら

く次がある。
ここで再起不能にするという考えは、アイズとラックの共通目標として合致する。
（逃すか！ここで仕留める。今なら届く）
「領域展――――!?」
バシャリ
ラックの背後から、そんな音が聞こえる。
術式の使用者であるラックには、その感覚が直に伝わる。
（術式の強制解除!?時間切れ……！）
玉犬と鵺が影へと還り、領域は不発となる。
ラックの術式は、複数の術式を可能とする。
ただし、術式を切り替えるために術式を解除した時、領域展開後と同じく、術式が焼き切れる状態になる。
それは時間切れでも同じ。別の術式の使用に約三十秒。十種影法術の再使用には、九時間の時間を要す。
（調査の時から十種影法術を使ってたから……）
「やっちゃったなぁ……」
完全な油断。

すでにレヴィスは逃げ去った後。
「ラック、アイズ、無事で何より。犯人はどうなった？」
リヴィラの街に戻ると、フィンたちによって騒動は収められ、既に主要な場所の復旧は完了されていた。
「ごめん、逃げられた」
「そうか……」
油断したとはいえ、逃げられることまでは完全に予想外だったラック。
魔虚羅を使えば一瞬だったかも……。
なんてことを思ったラックだが、怒られそうなのでそれについては黙っておく。
「あの女人型のは？」
「ああ、あれね……」
フィンの説明によると、アルガナ、バーチェ、ティオナ、ティオネの四人で徹底的に責め続けた結果、瞬殺と呼べる速さで片付いたらしい。
その後、残党を狩って事を収めたと、フィンは語った。
「ラック、僕らは一度地上に戻り、この事をギルドとファミリアで共有する。君たちはどうする？」
「アルガナとバーチェは戻る。俺はまだ進む」

ラックの答えはフィンにとっても予想外となる。
だが、一番に反発したのは、アルガナとバーチェだった。
「ダメです！どうして一緒に戻らない!?」
「うん、せめて私たちも連れて行ってほしい」
団長であるラックを置いていくのは、副団長の立場としても、アルガナは私情も含み、ラックだけで先に進めるのは反対だった。
「ムリ、足手まとい。一週間か二週間で戻るから、カーリーにもそう言っといて」
足手まとい。その言葉一つで、アルガナとバーチェは何も言い返せない。
カーリー・ファミリアの序列は力のみで決まる。
最強である団長が足手まといという理由に、幾度となく手合わせをした二人は無力さを痛感する。
「フィン、二人を頼む。これで貸し借りはチャラにする」
ラックは貸し借りについて持ち出し、地上へ二人と帰る事を依頼する。
単騎での迷宮探索は危険ではあるが、妙な説得力を持つラックを止める気にも追いかける気にもならず、フィンはため息を吐きながら頷く。
「わかったよ。僕らは彼女たちと地上へ向かうよ」
「助かる」

話は決まった。
ラックはフィンやアルガナたちと別れ、さらに深層へと向かう。
求めるものは刺激ある戦い、ただ一つ。

攻略

来た来た来た。

とうとうここまで来た。ここまで早三日。ダンジョンを駆け抜け、大急ぎでここまで来た。保険として二週間って言ったが、これなら一週間で帰れそうだ。

「なあ、ウィーシェから聞いたよ。強いんだって？バロール……」

「ギヤアアアアアアア!!!」

四十九階層。一本の草木すらない荒れ果てた、広大かつ単一の階層。石や砂など全てが赤茶色に染まった茫漠たる大空間、大荒野（モイトラ）。

目の前にはバロールが、さらには大量のフォモールが行手を阻む。

「グラニテ・ブラスト」

まずは小手調べに一発。

指先に呪力を集め、集めた呪力を放つ砲撃の術式。

ただの呪力操作が術式によってブーストされる。桁外れの呪力出力と瞬発力により実現される砲撃は、オラリオ最強の魔道士リヴェリアの第二階位攻撃魔法。

先日遠目に見たレア・ラーヴァテインと同じぐらいかな？

「……ハハ、結構消し飛んだか？」
「ガルォォォォォ!!」
「!?っと」
後ろからフォモールの奇襲。
バッと振り向き、その勢いと術式による高威力を乗せて放たれる拳は、三体のフォモールの体を吹き飛ばす。
「やっぱり大群相手はキツいな」
目隠しに指をかける。
これは世界唯一の眼。冒険者たちが言うところの魔眼、術式や呪力、スキルにより魔法やスキルも詳細に見ることが可能となった異能。
六眼が開放される。
「ウゥゥ、ルォォォォォォ!!!!」
「高魔力の砲撃！いいね」
グラニテ・ブラスト!!!
バロールと俺の間を、お互いの攻撃が衝突する。
破壊の砲撃。その余波がほとんどのフォモールを消し飛ばし、何もないこの大荒野の真ん中に、綺麗なクレーターが出来上がる。

「……！」

さっきの余波で、目の前のフォモールは消し飛ばした。

だが、後ろにいるフォモールがそのまま。

「ガアァァッ！」

「フッ！」

殴れば一撃で消し飛ぶ。フォモールじゃ相手にならない。

だが数が多――――

「――――いぃ!?」

バロールは己の巨大な尾で俺の体を薙ぎ払う。それもフォモールごと!?

「～～～～～っ」

重い。全力でガードしたっていうのに、ガードの上からでも俺の体を吹き飛ばすこの威力。

「ルオオオォォォ!!」

さらには空中に浮いた俺を狙っての砲撃。落下中は何もできないって？

「甘すぎだろ！」

グラニテ・ブラスト！

光線にグラニテ・ブラストをぶつけて相殺する。

閃光とともに粉塵が舞い散り、強い衝撃の波が音と風として伝わる。
お互い、高威力だが互角の威力。
そしてもう一発――――
「グラニテ・ブラスト」
「ギェア!?」
ここまで吹き飛ばす威力……流石だな。
だが、それで手を止める理由にはならない。
この粉塵、バロールから俺の姿は見えないだろ。
狙いを定め、四条に分散させた呪力砲が発射される。
「グオォォオオオオオ!!」
「今のは効いたろ」
このまま攻める。
徒手に取る連打にバロール見舞う。
術式の効果で威力が高められ、これを喰らうたびに確実なダメージになる。
「グルォォオオオオ!!」
「また砲撃か？能がないな！」
砲撃が降り続けるこの場を、全速力で駆け抜ける。

「邪魔」
グラニテ・ブラスト
道中立ちはだかるフォモールを一掃する。
今いいところなんだ。お前らはお呼びじゃないんだよ。
さあ、バロール。周りの駒は随分と減ったみたいだぞ。
「フッ!!」
「ギャア!?」
呪力を込めた拳が、バロールの顔面に打ちつけられる。
「まだまだ耐えれるよなぁ!!」
さらに、自由落下に従い地面に着地する。
それと同時に駆け出し、手近な前足から攻める。
「ガアァァッ!!」
足元なら、あの光線は使えないはず。
ここは言うなれば安全地帯。足を上げて踏み潰そうにも、ちょこまかと駆けまわる俺を捉えられるか？
「グルァァァァ!!」
「っ!?」

いい判断。真下に向けて、自傷覚悟の砲撃！
広範囲攻撃で俺を炙り出すつもりか……。
だが――――
「グラニテ・ブラスト!!」
全てを薙ぎ倒す咆哮、波のように広がる破壊の咆哮を、一本の砲撃で掻き分ける。
「範囲を広げたのは良くなかったな。集中攻撃して、俺と五分の砲撃ってのを忘れたか？」
直撃する砲撃。顎から突き刺さったこの砲撃で、頭まで破壊する。
魔石は避けた。脳天を打ち抜けば、いくらお前でも死ぬよな？
「ギャアアアアアアア!!!」
鱗を抉り、肉を貫き、骨を砕く。
さっきよりも威力を上げたグラニテ・ブラスト。どうだ……。
「グオオォ……」
生きてるのか。最大火力に高い威力を耐える耐久力は流石と言ったところかな。
「ハハ!!」
呪力に粘性を持たせ、形を成す。
左の手のひらに呪力を止め、右手で呪力を引き伸ばす。

手のひらに呪力を留めて、矢の形を象り放つ。
引き伸ばせられた呪力を、弓と矢の要領で放つコレは最速の技。
「アガァァァァァァァァァァァ!!!」
モンスターを倒す方法。魔石を砕いて即死させるか、致命傷を与える。
さっきのダメージが効いてる。時間が経てば勝手に死ぬだろうが、それでも放ったこの一矢。
「グ、グァァ……」
バロールの体が消滅する。
その場には魔石と……。
「ドロップアイテム……」
こういうのって、売ったら金になるんだっけ。
とにかく呪霊操術に切り替えて収納していくか……。
派手にやったからな。この辺のモンスターはほとんど狩ったかな。
「あれ、この辺にもあるはず……お、あったあった」
多くのドロップアイテムに加え、それよりも多くの魔石を拾い集める。
いちいち数えてられないほどの数が集まって嬉しい限り。
「これだけあれば、いい稼ぎになるか……」

このまま一つ下の階層の五十階層。火山灰に覆われたように森林が灰色に染まった大樹林。
少しうろついてみたが、モンスターはいないようで、ここは安全地帯みたいだった。
ここで一泊した後、俺は地上に戻るために来た道を辿るのだった。

「それで、どうじゃったんじゃ？ダンジョンは」
「気になる」
「そうですよ。すごく心配したのですから」
闘争街にあるカーリーの私室。
カーリーは一週間の単独遠征を終えたラックを特に労うこともなく、英雄譚を聞く子供のような表情を浮かべながら、愉快そうに話を聞く。
アルガナとバーチェも気になっていたようで、ラックに話を催促する。
「悪くない。五十階層まで行ったからな、ドロップアイテムと魔石は全部回収したし、それなりの稼ぎになるはず……」
「そうじゃない。骨のあるやつはおったかと聞いておる」
「ああ、それね」

やはり、カーリーたちが聴きたいのは闘争についての話。
ラックの強さは十分に知っている。
ラックが最強を使わずとも、アルガナとバーチェを軽く倒せてしまうということも。
「四十九階層のバロールは強かったな。グラニテ・ブラスト一発で殺れるような相手じゃなかったし……」
「ほう……あのビームを耐えれるほどか……。あれをまともに喰らえば、アルガナでも一撃で沈むしのう」
「あれは凄かった。それに、あの威力がすごく速く出てくる。初見は無理」
「あれは良かったわ。でも倒せたんですよね？さすが団長です！」
闘技場での鍛錬で、アルガナを含む団員はいくつかの術式を見たことがある。
レベル5以上になると、個別訓練が受けることができる。
アルガナはその訓練で、ラックが避けるだろうと踏んで放ったグラニテ・ブラストを、あろうことか真っ向から受けようとして片腕が消し飛んだことがあった。
カーリーはビームに大興奮。ラックは大慌てで治療したため印象に残っている。
「それで、話があるんだろ？」
「まあ、のう。お主がおらん間、妾のもとにロキ・ファミリアのフィンが来おった」
「フィン？なんで？いや」

（なるほどな、不信がられたか？やりすぎたか……まあ、あそこでアイズを見捨てるのはな……）

ラックのアイズとの共闘。オラリオに来て二週間かそこらの、新設のファミリアの団長。アルガナとバーチェについては、ヒリュテ姉妹から聞いていたとしても、ラックの情報はゼロに等しい。

ならば、警戒するのも無理はないだろう。ラックはあそこで力を振るったことに、毛ほどの後悔もない。

「何か依頼されたか？」

「察しがいいのう。何か心当たりでも？」

「めっちゃあるな。名目は鍛治師か？ヒーラーか？」

「五十点じゃな。目的はヒーラーとスカウトじゃ。同じ個人への依頼者じゃが、どうする？」

「……」

（個人への依頼……。ま、アルガナとバーチェを連れるのもな）

ヒリュテ姉妹との因縁がある。知ってはいたが、あそこまで空気が悪くなるとは思わなかったラック。

だが、連携は悪くなかったとも思っている。

とはいえ、これはロキ・ファミリアの冒険。あまり出しゃばる必要もなく、報酬はおそらく破格。

「そうだな、明日はロキ・ファミリアのところまで行かないとな」

ラック・マーストンはロキ・ファミリアの遠征への参加を決めた。

翌日、ラックはロキ・ファミリアのホーム、黄昏の館の一室にいた。

「よう、フィン。この前は留守にしていて悪かったな」

「構わないよ。急に押しかけたのは僕の方だ。それで、いい返事が聞けるのかな？」

探るような問いかけ。

ラックの読み通り、この依頼は己の力を探るためだと察する。

「ああ、報酬はここに書いてある通りで？」

「もちろんだとも。だが、それだけでいいのかい？」

報酬はダンジョンで手に入る物から発生した金額、その一割。

要するに、出来高払いとなるということ。高いか安いかは状況次第となる。

「いい、俺がいるんだ。良い買い物だと、そう思わせてやる」

「はは、自信満々だね」

ラックの中で、数百万にしかならないだろう金銭での報酬と、それ以上かもそれ以下かもしれないこの報酬とで天秤にかけた時、後者の方が高いという考えがある。

フィンからすれば、前者の方が確実だが、本人がそれで良いというのであれば特に止める理由もない。

「それじゃあ、十日後、頼んだよ」

「りょーかい。今後ともよしなに」

仕事の話は終わり。

こうしてラックは十日後に行われる、ロキ・ファミリアの遠征への参加が決定した。

だが、この十日の間、ラックはある少年の修行に付き合わされることになるのだが、これはまた次回。

特訓

フィンとの話し合いで、ラックはダンジョン遠征に参加することになった。

とはいえ、それまで十日の空いた時間は、特に何もすることはない。どこかに飲みに行こうかなと考えたものの、財布を忘れたことに気が付きいた。

取りに帰るのは面倒くさい。ならばと、呪霊の体内にストックしてある魔石の一部を換金すれば良い。

「あ、ごめん」

ギルドの中に入ると、ラックと同じ白髪の少年が慌てた様子で外に出ようとしたところ、注意が散漫になっていたようでラックの体とぶつかる。

「す、すみません……って、ラックさん!?」

「久しぶり、ベル」

オラリオへの道中を共にした少年、ベル・クラネル。

ベルにとっては半月ぶりの再会となる。ほんの少し話しただけだが、白髪はともかく、高身長の目隠し男というトレードマークからよく覚えている。

「どうしたんだ、そんなに慌てて?」

「あ」
「なんで逃げるの？」
「あああああああ！」
　再び走り出そうとするベルの首根っこをラックが掴み、逃げる脚を無理矢理に止める。
「人の顔見て逃げるのはヤバいって」
「い、いやっ、あっ、でもっ」
「あー、応接室とか借りれる？」
「わかりました。こちらに」
　慌てるベルを無視し、ラックはベルの担当アドバイザーであるエイナ・チュールと勝手に話を進めていく。
　エイナによって案内されたギルドの一室へとベルを放り込み、二人が話をしている間、ラックは単独遠征によって得た魔石とドロップアイテムの一部の換金を行う。
　これによって、ラックの所持金は４３０ヴァリスから、約１２０万ヴァリスとなった。
「そうだ、ベル。ファミリア見つかったって聞いたよ。おめでとう」
「ありがとうございます。それに、何度か助けていただいたみたいで……」
「ああ、それね。今度何か奢ってくれればいいよ」

「わ、わかりました」
　三人とも、ギルドでの用事が済み、自分のホームに戻ろうとギルドを後にした。
　三人は同じ道を適当な話をしながら歩く。
「ベルはどこまで潜ったんだ？」
「えっと……十階層です」
「もうそこまで行ってるのか……。結構早いな」
「うん、すごい」
「そ、そんなことないですよ！」
　ベルが謙遜するのを見て、アイズはふと思った疑問を投げかける。
「ベルは、誰から戦い方を教えてもらったの？」
「いえ、僕は零細ですし、教えてくれる知り合いがいなくて……」
　その言葉を聞いて、ラックは面白半分、期待半分で、ある提案してみる。
「そうだ、俺が戦い方、教えてやろうか？」
「いいと思う」
「えっ!?でも悪いですよ。それに、二人とも忙しいんじゃ……」
　ベルは戸惑いを見せる。だが――
「俺は暇だな」

「私も大丈夫」
特にやることもない二人は軽い口調で了承する。
二人の目的は別々。アイズはベルの成長速度に対する興味、ラックはもちろん。
（金もあることだし、こういうのも悪くない）
あとは、ベルの答え次第。
「えっと、それじゃあ、お願いします……」
ラックとアイズには遠征があるため、期間は一週間。こうして、地獄の特訓が始まった。
翌日、オラリオ北西にある市壁上にて。
「イエーイ！今日から張り切って行こう!!」
「はい!!」
（眠い……）
朝からハイテンションなラックと、元気いっぱいなベル。
アイズは普段しない早起きのため、未だ睡魔と格闘中。
「ベル、武器は何使ってる？」
「これです」
ベルが見せたのは二本のナイフ。

片方は両刃の普通のナイフ。新米からすればそれなりのものだが、ラックからすれば鈍ら。

だが、もうひとつのナイフ。刀身だけじゃなく、柄まで黒いナイフは、ラックの目から見ても超一級品だとわかる。

「少し持っても？」

「は、はい」

（これは……低く見積もって特級クラスか。ベルと……いや、神（ヘスティア）と繋がってるナイフ。大昔に見た、天逆鉾クラスの一級品か）

「ありがとう」

ベルにナイフを返し、思考を巡らせる。

（この特訓は、いつも俺が団員達（みんな）を相手にするときみたいな魔虚羅戦（ステイタスアップ）より、シンプルな技量向上を目的とする内容の方が効果的か……）

「オーケー、これで行こう」

「はい？」

「……？」

ラックの中での方針は定まった。あとはそれを実践するだけ。

「ま、戦って覚えるしかないかな。ほら、構えな」

隙を突く一発。ラックの拳がベルの頬を掠める。
「……っ!!」
「反応が遅い！いざというときに抜刀出来ずに死ぬ間抜けもいる。攻撃の気配を感じたら、なにかしらの反応は鉄則だから」
「は、はい！」
「このまま続けるから、頑張って俺に一発当てるところから」
呪力を最小限に、ベルへと攻撃を加える。
「――――っ!?」
攻撃の気配がさっきよりも少し強く、恐怖を感じたベルは、それを反射で避ける。
だが、その攻撃をブラフにした足払いで、ベルは大きく体勢を崩す。
「!!」
「はい、まずは俺の一勝。あからさまに強い攻撃の意思を感じたらブラフも視野に入れないと。ほら、もう一回」
何もわからないままに尻もちをついたベル。
言外に視野を広げるように言われ、今度こそはと活き込んでもう一度ナイフを構える。
「はあああああ!!」

今度はベルから攻撃を仕掛けた。
腹を狙った刺突攻撃。
「単純」
ラックは半歩下がってそれを避ける。
だが――
（囮攻撃……）
傍から見ていたアイズにはよくわかる。
半歩下がることも読んで、ベルは勢いそのままに懐に潜り込む。
（いける!!）
ナイフを逆手に持ち替え、ベルはラックの脇腹を狙う。
だが、ベルの腕は勢いが乗り、最高頂の威力になる前に、ラックの手刀によって阻まれ、そのまま肘を絡めとる。
そして――
「ぐっ、がああああああ……」
ベルの肘から激痛が走る。
ラックは絡めとった腕に、さらに追い打ちをかけた。容赦なく、無慈悲に放たれた掌底は、ベルの肘の関節とは逆方向に曲げられる。

ゴキリという音とともに、右腕からは強い痛みが。さらに無理矢理曲げられたことから、指先がピリピリと痺れ力が入らない。

「駆け引きが足りてない。言って先を読むのは良いけど、それだけなのは良くないかな」

いつものような、軽い口調を崩すことなくベルに近づき反転術式による治癒を施す。

痛みはすぐに引き、右腕は正常に戻る。

「ラック……さん……」

「ほら、立ちな。ベルは基礎がなってないから、あんな簡単に腕を取られる」

あの時、ラックは腕を掴まなかった。すぐに腕を引いていれば次手に持って行ける状況。

痛みの感覚が残る中、ベルはラックが言う通り、道筋を作った戦いだったと振り返る。

「どんどん行こう。アイズは……あとでね」

（ベルはアイズに教わりたいだろうが、アイズが教えるのに向いてるとは思えないんだよな～）

アイズはこくりと頷くと、少し離れた場所でじっと見守る。

「さて、次はどうする？」

「……お願いします！」

ベルは駆け出す。

先ほどと同じように真っ直ぐに距離を詰めるのではなく、姿勢を低くジグザグとした軌道を描き、フェイントを織り交ぜながら。

（さて、あからさまだが、どう来る？）

ラックの間合いに入ったベル。ラックはさっきと同じように手首に手を置き、腕を振る勢いを殺す。

「――――っ!!」

腕が触れたと同時。身を翻し、斬りつける。

腹部や脇といった急所は警戒する。ならば、狙うのは脚。ベルの思考に倒すことはカケラもない。

それでも……。

（ダメなんだ。弱いままじゃ、ダメなんだ！）

成長と挫折。ひたすらにそれを繰り返す。

ラックの指導は丁寧に的確に、そしてただひたすらに体を壊して癒してを繰り返す。

「グッ、オエエェェエエ……」

「……」

腹に膝蹴りをもらい、ベルは膝をついてうずくまった。

（反転術式じゃ体力は回復しない。それでも、伸び続けると思わせる成長性。……駆け

引きはともかく、対応が良くなってきている。明日からは本格的に術式ありでやってくかな）

百戦はしただろう。戦いを続け、幾度も転がされた。それでもベルは折れない。

強くなるために、血反吐を撒き散らしながらも成長は止まらない。戦いの中で、ラックからどんどんと何かを吸収していく。その一番の強みであり弱み。

「ベルは臆病だな」

「ハァハァ……臆病？」

「そう。恐怖に対する感覚が鋭敏。それが反射神経の高さを実現している」

（そしてスキルによって成長性も）

息も絶え絶えになりながら、ベルはラックの言葉に耳を傾ける。

「その回避能力に、強力な攻撃手段を乗せられれば」

「強くなれる……」

「そういうこと」

ベルの瞳に光が灯る。

「ま、今日は無理かな。もう限界でしょ？」

「いえ……まだ、やれます！――――！」

二時間も経たず、ベルは体力の限界を迎える。

立ち上がろうとしてよろめき、倒れてしまう。
「あらら」
「……すみません」
「いいよ。十分すぎるくらい成果あったし」
さてと、と呟いてアイズの方を向くラック。
「次はアイズだな。街中だし、魔法は使うなよ」
「分かってる」
アイズは剣を構えて前に出る。
「ベル、第一級冒険者の戦闘なんて見る機会ないだろ。よく見とくように」
「はい」
「よし」
ラックとアイズが向かい合う。
「あんまり時間無いから、一時間ぐらい適当に打ち合う感じでいいよな？　じゃあ行くぞー」
そして、次の瞬間には、二人はお互いの間合いの中。ベルには両者の腕がブレるように見える。
「よっ！」

「っ!?」
アイズが振るったサーベルの一撃を、ラックが腕で払う。
（素手……!?）
武器を使わずに、ただ腕で弾くだけで対応した。
アイズの特殊武器（スペリオルズ）には不壊属性（デュランダル）を付与されている。その代わりに攻撃力が低い。とはいえ、それを素手で弾くのは異常な身体能力といえる。
「太刀筋ブレブレ。軽い軽い♪」
「はあっ!!」
短く力を溜め、大きく踏み込む強烈な突き。ラックの顔を正確に捉えた刺突攻撃。
「こわ」
剣の腹に手を当て、次々と放たれる攻撃を軽々と逸らしていく。
そして、少し打ち合った後、剣を逸らすと同時にラックが前に踏み込んだ。
「激震拳」
「――ッ!?」
ギリギリ、寸でのところで、アイズはその場を飛び退き回避する。
激震拳。少しコツはいるが、楽にダメージを稼ぐ方法の一つとして、ラックが時折使う攻撃方法。

「いい勘してるよ、ほんと」

当たる可能性は五分だった。それでも、剣で捌けない攻撃を受けることなく、飛び退くような回避に力を回した。

（これが、駆け引き……？）

全てが見えていたわけじゃない。それでも、剣で受けれそうに見える攻撃を躱したり、隙をついて懐に潜り込んだり。

今まで、ベルに無かったものを、今二人は見せてくれているのだと教わる。

だが、アイズにとってはそうでもない。

（すごく強い。あの時、リヴィラの街の一件から思っていた。この人は、あの召喚術無しで、単純な体術ではオラリオの誰よりも強い……）

（アイズの剣技は足運びを重視するタイプか……そこはベルと同じ）

お互い、思考を巡らせる。ラックがアイズの体の動きを見て、そこからズレを調整をする理由。

それは、一つはベルに戦いを見せること。客観的に見ることも必要だと感じたから。

もう一つには、アイズの手元が狂って気絶なんてことになった時の対策。効率的に、気絶の間を与えることなく、過密スケジュールで特訓を重ねる。

「調整は今日中に仕上げようか」

アイズは剣を水平に構える。

多くの強者に会ってきた。それでも、目の前の壁は最も厚く、高いであろう壁。コレを超えて、さらに高みへ。

警告

アイズはいつもの剣の冴えを取り戻し、ラックと共にベルを半殺しにする日々が始まった。

「闇より出でて闇より黒く、その汚れを禊ぎ祓え」

ラックにより降ろされた帳。その中で、ベルはひたすらに戦う。

帳を下ろす理由は二つ。

一つは周りからの干渉をなくすため。隠すに全振りしたこの帳は、神々でもそうそう見つけることはできない。

もう一つは魔法の使用を可能とするため。この中で行われる魔法ありの戦闘を隠すためにある。この場所はオラリオ内。街中で魔法を放つのは騒ぎになりかねないため、それも隠すためにある。

「ファイア・ボルト!!!」

「アツッ!?」

ベルが放つ火球の魔法。詠唱を必要としない速攻魔法がラックの目の前まで迫る。それを少し熱いお湯がかかっただけと言わんばかりに右腕で叩き落とす。

「フッ!!」
火球が簡単に落とされたことなどお構いなしに、ベルは攻め続ける。
振るわれたナイフを流し、ベルのバランスを崩す。
倒れる。そう思うよりも早く、ベルは地面に手を付きラックの顔を目掛けて蹴りつける。
（手数が、技の引き出しが増えている。アイズの剣と、俺の徒手が混ざり、より自由な戦い方へと進化している……！）
ベルが蹴りを放ち、脚が伸び切った瞬間を狙い足首を掴む。
「うわぁ!?」
持ち上げられた浮遊感と、急速に動く視界。盛大な音と共に、全身に強烈な痛みが走る。
「～～～～～～～っ!!!!!」
耳元で轟音が鳴ったように聞こえ、ベルの鼓膜が破れる。全身の骨にはヒビが入り、動ける状態ではない。
その怪我も反転術式により瞬時に治される。治療が完了するとラックは脚から手を離し、少し距離を取って胸壁に腰掛ける。
「うん、悪くない。出来れば俺に足首持たれた瞬間、指を数本切り落としておけばなんと

かなる時もある。無理な時もあるけど」
「わかり、ました……」
どうしても甘さを消しきれない。
息も絶え絶えとなったベルを見ながら、ラックはそんなことを考える。
この一週間で、ベルの臆病は武器になった。問題はベルの持つ優しさが、言い換えれば甘さが、攻撃行動の邪魔をする時がある。
（今、ここでどうこうするのは無理か……。その場面が来た時、決断を迫られるだろうが……ま、そのときはその時。頑張れってことでいいか）
「今日はもうやめとこう」
「うん、動きが鈍くなってきてる。明日もあるから」
「わ、わかりました。ありがとうございます……」
ベルはドンドンと強くなる。日に何度も限界を超えさせられ、超えても戦いを続けることを強制される。
飛躍的に強くなっていることを、ベル本人が実感できるほどに。
（随分と成ってきた。この調子なら、キッカケひとつで完成かな……）
最終日となった今日、ベルの特訓は終了となる。
コレらが開花するかはベル次第。二人が教えたのはただの基礎。ベルはこの基礎を

自分の形に発展させなければならない。
「ベル、卒業祝いだ。じゃが丸くん、奢ってやるよ」
「ありがとうございます！」
「私、おいしいお店知ってる」
「お、いいね。ならそこ行こうか」
「はい！」
こうして一週間の特訓を終えたベルは、二人の師匠とじゃが丸くんを食べたあと、ヘスティア・ファミリアのホームである廃教会へとヘスティアと共に帰った。
帰り道、アイズとも別れホームへと帰る道すがら、前から二人の男女が向かってくる。
「本当に意外だったわ。あなたのような人が、より一層あの子の魂を輝かせてくれるなんて」
向かってくる女が唐突に口を開いた。フードを被っていても分かる美の神が放つ特有の色香を感じる。
彼女の隣には猫人の青年。
「フレイヤ・ファミリア……」
「あら、バレているわよ」
クスリとフレイヤは笑いながら、誰に向けてでもなく言葉を漏らした。

（目の前には二人、周りに六人……）
「囲むか？普通さ」
「あの子達はあなたに痛い目にあわされているもの、警戒するのも無理はないわ。許してあげてちょうだい」
　この言葉に嘘はない。フレイヤは最初、隣に立つ青年【女神の戦車】アレン・フローメルと二人で会おうとしていた。
　だが、他の幹部陣が猛反対したために、遠目での護衛を了承しただけ。
「それにしても、久しぶりの再会での第一声が『あなたのような人』呼ばわりとは、随分な物言いをする」
「ふふ、ごめんなさいね。あなたの魂はそれほど綺麗に見えないもの。あの子の魂を輝かせられたことが本当に意外だったのよ」
　美の神フレイヤの瞳は魂の色、いわば相手の本質を見抜くことができる。
　フレイヤの目にはベルの魂が今までにないほどに透明で輝いて見える。そして、ラックの魂は凡庸な、道を歩けば二、三人は居るような色に見える。
　そんなラックがベルの輝きを増すスパイスになった。フレイヤにとって予想外の出来事。
「それで、俺を呼び留める理由は？」

「簡単よ。一言お礼を言っておきたいと思ったの」
「お礼……？」
「ええ、あの子、ベル・クラネルをより一層鮮やかに彩ってくれたでしょう？その感謝を伝えに来たの」
「それはどうも」
「だからと言って、あまり余計なことはしないで頂戴ね？」
　そう言うとフレイヤの隣にいた青年が一歩前に出る。
「おーこわっ！殺りあうことがないことを祈ろうかなぁ～……？」
　アレンはフレイヤの前に威嚇するよう立ち塞がったまま、ラックの顔を睨みつける。
「……」
「ま、どうなるかはお前ら次第でもある」
　そう言いながら、ラックはフレイヤを守るように立ち回るアレンの目の前まで瞬時に移動して見せる。
「――――っ!!」
　急な移動にアレンの顔つきが変わる。
　アレンはそのままラックの首元へ向けて槍を放とうとする。
　だが、その攻撃は届くことなく、ラックはアレンの槍に手を添え力押しで勢いを殺し

て静止させる。
「俺に警告？その程度で？」
次の瞬間、ラックの四方を囲むようにフレイヤの眷属たちが斬りかかる。
ラックはその全てを避けることなく、二本の指を立てて掌印を結ぶ。術式は発動し、武器による攻撃はどれもラックの体に到達することはなく、直前のところでピタリと止まる。
「はぁ……無駄だと思うよ、俺は」
ラックはため息交じりに呟くと、五指を交えさせるように手を合わせる。
囲まれた状況から瞬間転移によって離脱する。
「街中で大暴れするとウラノスにゴチャゴチャ言われそう。ってことで、退散しまーす」
建物の上から見下すラックはそのニヤケ面を崩すことなく、手を振りながらその場を後にした。
「あら、逃げられちゃったわね」
「……」
フレイヤの眷属たちは黙って構えを解く。
その表情には各々悔しそうな感情が見え、フレイヤはそれをイタズラっぽい表情で眺めるのだった。

フレイヤのところは相変わらずのフレイヤ至上主義。
振り回される眷属はアレをどう思っているのか。
俺はホームに着くと数分前のことを思い出す。
「警告ねぇ……」
ほんとクソみたいなのに目を付けられたよ。俺も、ベルも。
ホームにある寮の扉を開けてすぐのところに映るのはロビー。
「おー、待っておったぞ。お主に客じゃ」
ロビーのソファには黒衣の魔導師とカーリー、そしてカーリーの後ろにはアルガナとバーチェが控えている。
「来たか、ラック・マーストン」
フェルズか、ここにいるってことは……。
「例のものを？」
「ああ、ここに……」
フェルズは隣に並べられた二体のホムンクルスに顔を向ける。
顔がないフェルズから表情は伺えないが、やはりこのホムンクルスの生成には嫌悪感

を抱くのだろう。いや、罪悪感か……。
「うーん、見た感じ問題はなさそうかな。この調子で引き続き頼むよ」
六眼で見た感じ、これで問題なさそう。
このホムンクルスに魂は存在する。だが、この魂には人間としての情報は存在しない。
器としても申し分なし。
「ひとつ、聞いてもいいか？」
「どうぞ」
「コレを用意させて何をするつもりだ」
あー、作っといて心配になったのね。
魔法大国でも結構やばい類の禁術だしね。
ホムンクルスでもまぁまぁやばいってのに、魂の情報を与えず、持たないように細工してるんだ。倫理的に最悪だろうし。
「うーん、そうだな。お前が気にいるように答えてあげる」
本当は無為転変のためのストックだけど、他にも用途がある。その一つを彼、彼女か？とにかく与えよう。
「コレは異端児に与える可能性の一つ。外で出会った異端児で試したけど、コレと同化

させた異端児は人の姿とモンスターの姿を入れ替えられるようになったんだ」
「なに!?人の姿だと!?」
「そう、あくまで決めるのは異端児だけど、共存の方法の一つとしてこのホムンクルスとの同化を提示する」
新たな可能性の提示。フェルズの表情が分からずとも、迷っているのがよくわかる。
たぶん、フェルズは今のままの、人語を解すモンスターのままで共存の道を進めたいのか。
「このままの共存は無理じゃないだろうけど、よりこの共存をイージーにするための手段。どう?満足できる答えじゃない?」
「……」
黙っちゃったよコイツ。迷いまくってるな～。
正直、フェルズの倫理観とか、心底どーでもいい。
「はぁ……これからも引き続きよろしく。めんどくさ」
パンっと柏手を一つ。
「まーーーー」
ここ、闘争街は結界の中。
入ってきた人間一人、拒絶するぐらい訳ないさ。

フェルズを強制的に結界外、闘争街への扉があるバーへと飛ばす。
「さーてと、カーリー悪いな。付き合わせて」
「構わん。だが良かったのか？まだ話足りん様子じゃったぞ」
「あれは今日中に答えが出る考え方じゃなかっただろ」
「それもそうじゃのう」
さてと、アルガナとバーチェは黙って自分の部屋へと戻る。
この辺、二人は弁えている点扱いやすくて助かる。
さてと、あと三日、実質二日でコレの調整をしないとな。

呪物

このホムンクルスの調整はすぐに終わった。
さすがフェルズ、いい仕事をする。
このホムンクルスの用途は異端児との同化のための素体、それと無為転変の改造人間のストックに使う。
しかし、もう一つ用途がある。数も二つ、ちょうどいい。
これは契約した人間を受肉させるための器。
「ふ、ふふんふ、ふんふんふんふん♪」
さすが一級。呪物に魂が宿った時、特級相当の呪いが籠るとは……さすがと言ったところかな。
この呪物に宿る人物。出会ったのは今から八年前。

「やあ、同席いいかな？」
荒れた果てた荒野のど真ん中。そんな場所にも酒場はある。オアシスにある泉のすぐそばに建てられたこの酒場はまばらながらも人がいる。

店主は数日前、俺がモンスターから命を助けたのが縁となり、二階にある部屋の一室を借りている。今の職業はこの酒場の用心棒といったところか。
「いいよ、ツレの二人も座るといい」
「助かるよ」
「……」
三人は何を頼むでもなく、ただじっと座り俺を観察しているようだった。
そして目の前の、一部灰がかかった漆黒の髪に漆黒の衣を纏う、酷く整った顔をした男。いや男神が口を開いた。
「俺は神、エレボスだ。ラック・マーストン。いや、呪いの王、君に頼みがあって来た」
「……」
俺はそれを聴きながら、アップルパイを口に運びコーヒーを啜る。
エレボスの頼みはオラリオで起こす大抗争の助力。
絶対悪として闇派閥を率い、オラリオの冒険者の踏み台となる。
「俺に死ねとでも言うつもりか？だが、俺は不老不死。その語り口調、知ってるんだろう？」
「ああ、知っている。だが、その不老不死を解除できることも……！」
「――――!?」

これは驚いた。俺の術式の全容を知っているのか。
「なるほど……世界のため、命をかけろ。いや、捧げろと、そう言いたいのか……」
「ああ、頼む」
エレボスは誠実に、真っ直ぐに頭を下げた。
切実な願い。絶対悪、いいや、必要悪による次代の英雄の作成。
「そうか、でも悪いな。大義とか、滅私奉公とか、そういうのはやめたんだ」
「だが、お前もオラリオの現状を知っているんだろ?最高レベルは6、それも一人だけ。このままじゃ、君の目的も果たせないんじゃないか?」
よく知っているな。俺の目的、三千年前の、俺がまだ反転術式も使えなかった頃の雪辱を晴らす。
二度目の黒竜討伐にて退路を断つための包囲網の構築。アルバートと同じヘマはしない。確実に殺すこと。
「そもそも、冒険者が冒険者にするお願いに、一緒に命を懸けてくださいは大前提。それが俺みたいな呪術師でもな」
そして、俺に命を懸けさせるだけの何かを示してみせろ。
俺が立ち上がると、後ろに控えた鎧とローブの二人も立ち上がる。
「俺に一撃入れられたら俺がお前らの下、ダメだったならお前らが俺の下」

俺が指を振るうと、鎧の兜とローブが真っ二つに両断される。
二人とも避けたのか。兜が割れ、ローブが裂ける。
二人の面は見覚えがある、消滅したと聞いていた二つのファミリアの団員。いや、元団員か……。
「お前、ザルドか……」
「久しいな」
てことは……
「アルフィア……」
「貴様の音は相変わらずの轟音だな」
ゼウスとヘラのファミリアの残党。
悪には悪を以て制す。
「その刺青！」
「五大災厄の力か!?」
さすが千年続いた二大ファミリア。詳しいな。
「解」
「「――――っ!?」」
掌印まで用いた見えざる斬撃。

ザルドとアルフィアだと、アルフィアの方が足が速い。十分な距離をとって確実に回避してくる。
ザルドの方は五感で感じるよりも経験で読んでるのか……二人とも上手いな。
俺たちは揃って店外に出た。ザルドは剣を構え、アルフィアは魔力を練り上げる。
「ザルド、あの眼……」
「ああ、六眼だな。あの目は他者の能力を見破るという……。だが」
「わかっている。呪力がない私たちのステイタスは見えていない！」
「詳しいのな。でも、だからなんだよって話だよ、な!!」
俺はアルフィアに急接近する。
【福音（ゴスペル）】!!
「単調」
速度をさらに上げ、アルフィアの背後に回り込む。
そして、俺はアルフィアの体を蹴り上げ、上空へと吹き飛ばす。
「――――ッ！」
「さて……」
背後からザルドが斬りかかってくる。
俺はそれを振り向きざまに剣の腹を殴りつけ、そのままさらに反撃を加える。

「解」
「ガハァ!!」
「ザルド……お前は本当に強いよ。俺の『解』を受けて生きてる」
さらに追い打ち。ザルドの顔面目掛けて拳を振り下ろす。
「ガァ?!!」
ザルドはまともにくらい、地面に叩きつけられる。
地面に激突しても、勢いは止まらず、地面を削りながら滑っていく。
「……俺が飽きるまで付き合うよ」
俺でも肌で感じるほどの魔力の波。
俺はバッと、空中に飛ばしたアルフィアを見る。
【福音(ゴスペル)】
音の魔法。俺と同じ不可視の魔法。
「■」
「開(フーガ)」
骨の髄まで焼き尽くす炎の術式。
弓のように引き絞られた炎は、音すらも焼き尽くす。
「……」

落下してくるアルフィアに対し、回り込み、両手を組んで振りかぶる。
さらに地面との距離が近づき、とうとう激突する。
俺がふわりと着地すると同時、ザルドが飛び上がり剣を振り下ろす。
「ガアァァァ!!!!」
「解」
「なっ!?」
ザルドの動きが止まる。
ザルドの振り下ろした剣、最初のとは比べ物にならない威力を出している。
さらには自壊するような傷のつき方……自分の身の丈以上の身体能力を引き出したか……。
それでも、その剣は俺の解と互角。
「ダラダラとやっても埒が明かない。全力を見せてみるのが手っ取り早い」
ザルドとアルフィアは並び立ち、こちらを見つめている。
「バケモノが……まだ本気じゃないのか?」
「もちろん」
「ハッ!お前に勝てるイメージが欠片も沸かんな」
「俺もだ」

二人ともボロボロだが、まだまだ戦えそうだな。
【祝福の禍根、生誕の呪い、半身喰らいし我が身の原罪】
【父神よ、許せ】
魔法の詠唱。
こいつら、見たところ万全じゃないな。
タイムリミットまで戦えば確実に勝てる。
だが、そこいらの雑魚と同じ考えはしない。
「いいね、真っ向勝負だ」
【禊はなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罪。神々の喇叭、精霊の竪琴、光の旋律、すなわち罪禍の烙印。箱庭に愛されし我が運命よ砕け散れ。私は貴様を憎んでいる！代償はここに。罪の証をもって万物を滅す。哭け、聖鐘楼】
【神々の晩餐をも平らげることを。貪れ、獄炎の舌。喰らえ、灼熱の牙！】
アルフィアは高速詠唱まで身に着けているのか……。
【ジェノス・アンジェラス】!!!
【レーア・アムブロシア】!!!
炎と衝撃が混ざり合い、威力は底上げされる。
「はあああぁぁ!!!」

「ガアアアア!!!」
アルフィアとザルドの同時攻撃に、最大まで火力を底上げした『開』をぶつける。
拮抗。
「……」
「ぬぅ!?」
「くっ……!!」
一帯の地を轟かせる咆哮と共に、二つの炎が衝突し、爆風と爆煙が辺り一面に広がる。
大爆発が巻き起こった。
だがそれも一瞬の事。煙はすぐに霧散し、視界が晴れていく。
そこには、巨大なクレーターが出来上がる。
「相殺か……死力を尽くしたみたいだね」
「ハァ……ハァ……」
「グゥッ……」
二人は息も絶え絶えといった様子。
そして、いい感じに街から距離を取れたな。
「これで最後。死ぬ気で守れ」
その言葉を聞いた二人。

アルフィアは小さな声で魔法を唱え、ザルドはスキル効果を最大ギリギリまで引き上げたようだった。

「領域展開」

この場から音が消えた。

半径２００Ｍが、俺の生得領域に塗り替えられる。

「伏魔御廚子」

万死の廚房、すべてを喰らう廚子が現る。

相手に逃げ道を与えるという『縛り』により、必中効果範囲を増大させる閉じない結界。

領域展開後、必中効果範囲内の呪力を帯びたものに『捌』が、呪力の無いものには『解』が絶え間なく浴びせられる。

だが、この場に呪力を帯びたモノは、アルフィアとザルドを含めて存在しない。

二人を含む周囲には絶え間なく、『解』のみが浴びせられる。

「……お見事」

二人は膝をついて、周りには血溜まり。二人はギリギリ生きている状態を保っている。

およそ十秒、伏魔御廚子を受けて、気絶はしているが生きているとは……。

俺は二人に反転術式をかけて急速回復で全快させる。
「エレボスのとこに行くか……話ぐらいは、聞くとしようかな」

「はは……マジか、あのザルドとアルフィアが簡単に……」
甘く見積もっていた。
レベル7、その中でも異質なこの二人なら、万全でなくともあの二人なら、一撃入れれば勝利という条件を達成できると。
だが、あのサングラスの男、呪いの王を最初に見た時、これだけ高い壁であれば踏み台としての役目を十二分に果たせる。そう思ったが……。
「強すぎるだろ……」
そんな独り言が思わず溢れた。
「それじゃあ、約束通りこの二人は貰って行くよ」
気絶した二人を抱え戻って来たこの男は、戻ってくるならそんなことを言って来た。
遠目に見ていた戦いは圧倒的。踏み台として、壁として高すぎるとも思った。
「待ってくれ、それは困る」
それは困る。二人は必要だ。
約束してしまったが、俺の目的に二人は必須だ。

さて、どうしたものか……。

受肉

エレボスの提案。
アルフィアとザルドの引き抜きの折衷案。
ラックは一週間の間、アルフィアとザルド、そしてエレボスとこのたちに留まる。
「敗者のくせに面の皮の厚い奴……」
「はははは！あれでこそ神というもの！お前も知る通り、ゼウスよりはマシだ」
「あの爺も面の皮が厚い。何度ヘラに殺されかけようともセクハラをやめない糞爺」
ザルドは豪快に笑い、アルフィアはため息混じりに呆れる。
「それで、本当にいいのか？」
ラックは確認するように、何度目かの同じ質問をする。
「ああ」
「無論だ。我らは敗者、貴様の寛容に感謝する」
「そうか」
ラックは二人から体の一部をもらい、二人にに呪印を貼り付けた。
「これは呪術によって行う『蘇り』と思ってくれていい」

術式の開示をしながら作業を、というよりは儀式の準備を進める。
「死という生物にとっての最大最後の変化、そして強い負の感情に感応し、呪印がオートで発動する」
そして、呪物に不壊効果がつくと呪物が完成となる。
「蘇り……魔法大国の賢者がそんな魔法を使えると聞くが……」
「ふーん……ま、蘇りとは違うよ。これは死なない転生みたいなものかな
」
ラックは呪術師。魔力を持たず、使用することも出来ないラックには、ザルドの話す魔法関連のことには興味はない。
「あとはこの呪物になるものに魂の一部を貼りつけるだけ」
マーキングに魂の一部を用いるほどの高度な呪術。そして面倒な制約の多い作業でもある。
だが、二人に天界への道を辿らせようとするエレボスが、後悔か罪悪感か、この呪物作成について泣きそうな顔で懇願したのもあり、ラックはとことん付き合うつもりでいた。
「これに私たちの魂が籠っているのか？」
「手荒に扱わない方がいいよ。魂の全てが内包されていないそれには不壊効果はない。

普通に脆いから、壊れるよ」
「そういうことは早く言ってくれ……」
恐る恐る、アルフィアは自分の指を台の上に戻す。
この呪物は二人の指が一本で完成する。もちろん、戦闘に支障をきたさないように指の治療はしている。
呪物は完成し、三人はこの町を去る。
ラックはこれから一年後に起こる正邪決戦の終結までオラリオに近づかないこと、もし二人の魂の全てが呪物に宿るようなことがあった場合は二人を蘇らせる。
この二つの約束をした。
それから一年後ーーーー
「二人揃って未練タラタラじゃないか……」
二つの呪物に不壊効果が宿った。
二人はラックが聞いていた通り、オラリオにて散った。
大言壮語を並べていたが、やはり死を望んでいたわけではなかった。二人が抱いたのであろう負の感情（後悔）についても、ラックには心当たりはある。
それは大神の置き土産、二人の期待を一身に背負うであろう子供がいるらしい。大きな期待を背負う名も知らぬ少年。

七年後、計らずとも出会う少年が、二人の後悔……。

ーーーーーーーーーーーーーー

ホムンクルスに指は食わせた。

食わせる前、気を利かせて布を着せてから受肉させる。

ホムンクルスの作成は呪力でも不可能ではない。だが、呪力で作ったホムンクルスだと、おそらく彼らのステイタスと馴染まない。

（フェルズに頼んだのは、結果的に正解だったというわけだ）

二つのホムンクルスの肉体に、取り込ませた呪物に宿る魂が馴染む。

ホムンクルスは徐々に肉体が変化していき、大柄な男と灰髪の女へと変体していく。

（受肉完了か……ホムンクルスを使ったんだ、自我の殺し合いをしないはず……まあ、一回死んでるんだ）

「そのうち起きるでしょ。遠征は明後日か……明日までに起きてくれよ～」

ラックは二つの体を空き部屋に放り込み、今日のところは休むことにした。

ーーーーーーーー

病に侵され、死にゆく体に鞭打って、次代の英雄への期待を乗せて戦った。

私は最期、この身を炎に投げ死んだ。

ラック・マーストン、オラリオ外でのクエストにて時折見える男。

我らの団長を、いいや、我らヘラ・ファミリアを軽く捻るほどの強さを持った軽薄な笑みを浮かべるあの世界最強は、私とザルドを呪った。

死の瞬間、どうしても負の感情を抱くだろう。決断を委ねたフリをして、奴は嘘をついていたと、今ならわかる。

我らが抱く負の感情。怒りでも、憎悪でも負の感情になりうる。だが、あのクズは、ソレを後悔に絞って設定したのだろう。

「……本当に、どこまでも」

私を、私たちをバカにしている。この『縛り』は効力に関係ない。無意味な、私たちを揶揄うためだけの『縛り』。この呪術の詳細を、脳内に直接開示させる効果。

全ては奴の手のひらの上……それを嫌でも理解させられた。今頃、あの薄ら笑いを浮かべていることだろうと思うと無性に腹が立つ。

「そうだ……ここは……」

ここは、ただの部屋のようだ。だが、ヘラ・ファミリアにいた頃の、懐かしい、あのホームを思い出す。

私が眠っていたベッドから立ち上がり、部屋の外に出ようとする。

身体は鈍い。だが、軽い。病が感じられない。生まれて初めて感じる好調。

ドアノブに手をかけ、捻って扉を開ける。

「……！」

「うわあっ！」

扉の前には右手を上げ、ノックをしようとしていたのだろう、アマゾネスの少女が立っていた。

「……。ーー!?だ、団長！起きてるよー!!」

ドタバタと大きな音をたてて、どこかへ走り去っていってしまった。

団長…おそらくはラックのことか……。

「煩い」

そう呟きながら、私はいつものように髪に手を触れる。

「？」

髪が…バッサリと無くなっている……!?

腰近くまであった髪は、肩程で切り揃えられている。体を乗り替えたからか？

そんなことを考えながら、あの少女が走った方向へ歩こうと一歩踏み出す。

「や」

「ーー!?」

一歩踏み出すと、さっきとは全く別の場所。

ソファに座るサングラスをしたラックと数名のアマゾネス、そして赤い髪と褐色の肌

の幼女神とザルド。
皆が食しているのはザルドの料理か……。
「お主、結界の効果で転移させるのはやめよと言うておるじゃろうが」
トマトソースを口に付けた神が、ラックに対して不満を垂らす。
「どうせ道わからないでしょ。道案内だよ、み・ち・あ・ん・な・い」
「適当いいおって……」
辟易とした様子の神は再び料理を口に運ぶ。
「アルフィア、調子は？」
「問題ない」
「それはよかった。ザルドはもう済ませたんだけど、アルフィアにもカーリーの恩恵を刻んでもらうぞ。改宗だな」
なるほど、やはり目的は私とザルドの力か……。
恩恵が消えているということは、既に私はヘラの眷属ではなくなっているということ。改宗も容易だろう。
だが、懸念もある。
「あ、そうそう。アルガナはいつも通りダンジョンだろ？」
「ああ、明日から団長が遠征だからな。消費できるクエストは今のうちにやってしまい

たい」
「だよな、ならバーチェ、お前はザルドの慣らしに付き合ってやれ」
「わかった」
慣らし……？
まさか…レベルアップしたのか!?
いや、おかしくはない。主神に会えず、ステイタスの更新ができない時間が長かった。その期間にあれだけの経験値、何もおかしくはない。
「じゃあ、カーリー。恩恵の件、覚えてるよな？」
「もちろんじゃよ。アルフィアと言ったな、妾の前に」
そう言って、神カーリーは手招きをする。
何が起こるか、想像はつく。
何をされるかまではわからないが、ラックのやることだ、これほど信頼に足ることはない。
前の私からは考えられない。ここまで他者に、妹以外に信頼を寄せることなど。
時間にすると浅い付き合いだというのに、面と向かって話したのは、たったと一週間と少しの時間だけだったというのに。
私たちのため、これだけのことを為す我らの英雄に、惜しむことのない敬意と感謝を。

だが、だがしかし、尊敬はしない！

そんなことを考えていると、ラックは後ろを向き、神カーリーは恩恵を刻む準備を始める。

「俺の術式、お前ら冒険者で言うところのスキルや魔法にあたる異能の中に、無為転変というものがある」

私が身につけている服を脱いでいる間も、ラックは話をやめない。

何の話だ?と、そう思いはするも、おそらくこれも意図があってのことなのだろう。

「対象の魂に触れ、その形状を操作する。そうすることで、対象の肉体を形状と質量を無視し、思うがままに変形、改造する術式」

術式の開示というやつか……相手に手の内を晒すという縛りによって、術式の効果を底上げする事ができるんだったか。

この病は【ヘラ・ファミリア】が力を尽くしてもどうすることもできなかった。ヘラもこの病気をどうにかする方法を探していたが、終ぞ出来ることはなかった。しかもこの病は私の恩恵に刻まれている。ラックがやろうとしているのは、恩恵の書き換え。神ですら成し得なかった、ある種の偉業の達成。

「そして領域展開。アルフィアが受けた伏魔御廚子のような、領域内において必中必殺となる領域はこの術式でも使える。カーリー、準備は?」

「いつでもいい」
「アルフィア、俺の術式を受け入れろ。了承があれば術式は通りやすい」
「ああ、頼む。始めてくれ」
恩恵を刻む準備は整ったようだった。血を一滴たらし、恩恵が刻まれる。
それと同時に体は軽くなり、全身が苦痛に苛まれる。雑音だらけの、嫌気がさす体に戻った。
しかし、刻まれて一秒も経ず、ラックは振り返り、あの美しい碧眼を私に向ける。
「領域展開」
大きく口を開け、口の中に生やした二つの手で同時に掌印を結ぶ。
「自閉円頓裏」
私の体を、大きな手が包み込む。無数の手が、格子のように私を包む。
これは結界魔法に近いか。背後にいたカーリーはいない。おそらく締め出されたのだろう。
この中に入った瞬間から、すでに苦痛を感じない。
ラックは私たちと戦った時よりも真剣な表情でこの術を行使している。
二分ほど経っただろうか、ラックは目を閉じて、私たちは先ほどの部屋に戻された。
「ふぅー、さすがは神の力。簡単ではない。だが、不可能ではない」

そう言いながら、目隠しを着けて、テーブルに置いてあったグラスを煽る。
成し遂げた。病は消えた。
私は紙に移されたステイタスを見る。
アルフィア／レベル７
基本アビリティ
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
敏捷：Ｉ０
魔力：Ｉ０
発展アビリティ
・魔導
・耐異常
・魔防
・精癒
・覇光
スキル

・才禍怪物
・双分運命
・奏律曲光

魔法

・サタナス・ヴェーリオン
・シレンティウム・エデン
・ジェノス・アンジェラス

「そうだ、普通にじゃ無理だったから、ステイタスを下げる縛りを使わせてもらったよ」
「そうか」
だいぶ、というか全部消えたな。
基本アビリティオール０。病が消えた代償としては安すぎるぐらだ。
「ラック、いや団長殿」
「ん？」
「ありがとう。心からの感謝を、あなたに」
私はこの、与えられた幸福と奇跡の全てを忘れまいと思った。
メーテリア…少し、お前のもとに行くのは遅くなりそうだ。
「はんっ。なら、今後のアルフィアの働きに期待することにしようかな」

団長殿はこの偉業を鼻で笑った。体を乗り換えるだけでは完治したとは言えない程の大病を、物の数分で治す、この世唯一の異能。

どうせ、もとは失われるものだったんだ。この命、このクズのために使ってやろう。

常に聞こえていた、あの煩わしい雑音が消えた。

「悪くない」

これから先も、きっとそう思えるのだろう。

冒険

「これより、ダンジョン深層への遠征へと向かう」

広場に集まった冒険者たちに向けて、フィンはこの遠征の概要の説明を、そして仲間を鼓舞するための演説を始めた。

ここでのラックは一班、フィンが指揮する先遣隊としてこの遠征に参加する。ヘファイストス・ファミリアからも数名の鍛冶師が参加している。

この仕事（バイト）はロキ・ファミリアの五十九階層攻略が目的となる。五十九階層はラックにとっても未知の階層。

昨日、ザルドとアルフィアからダンジョンについて聞こうと思ってはいたが、二人は闘争街の表にあるバーを本格的に営業しようと、その前準備に忙しそうだったため聞き出せなかった。

ラックは五十階層より下について何も知らない。

こうして、ラックは先発隊に着いていく形で遠征に向かう。

ダンジョンの上層を、フィン、リヴェリア、アイズ、ティオナ、ティオナ、ベート、そしてラックの七人で進む。

「――フッ！」

ラックは後ろからサポーターとしてついて行く。

ラックは目の前でティオネが切り裂いたモンスターの魔石を影の中に収納していく。

「やっぱり便利だね、それ」

「まあね。大きいドロップアイテムとかを収納できないのは難点だけどね」

ラックはフィンに十種影法術について、少しぼかして説明する。

十種影法術によって影の中に収納した物体の重量を、己の身に受けなければならない。

この『縛り』で何度も痛い目を見たラックは誰にでも、この重さについてしっかり話すことはない。

ただし、持ち前の圧倒的な呪力量による身体能力の強化により、ヒューマン五人分ぐらいの重さであればいつもの動きを保てるほどだ。

（このまま五十階層まで、そこまでは遠足みたいなものかな。玉犬出して周囲の警戒、あとは魔石を拾って着いていくだけ。楽だね）

さらに、バロールは先日討伐済み。復活まではまだまだ時間がある。

そのためラックにとってだけでなく、フィンやアイズといったロキ・ファミリアの第一級冒険者が数人のパーティであれば、そこまで難しいことじゃない。

「？」

「あ？どうしたよ、アイズ」

先頭を歩いていたアイズが急に立ち止まった。

その様子を訝しんだベートがアイズに声をかけ、一行の注目は前方より走り向かってくる冒険者へと集まる。

「ハッハッハッ……」

「どうした？」

「ミ、ミノタウロスが……九階層に、デカい剣を持ったミノタウロスが……」

走って逃げてきたであろう二人組の冒険者は、壁に背を預け息を整えると、その詳細に着いて話し始めた。

九階層、上層と呼ばれる階層に中層から出るはずのミノタウロスな出現。目の前の冒険者は見たところ二人ともレベル1。

「何にしろ無事で良かった。他の冒険者は？」

「奥で一人。白髪に赤眼のガキが……」

「――っ！」

白髪に赤眼の子ども。アイズとラックは低級の冒険者で思い当たるのが一人。

「ベルか！」

その答えに辿り着くと同時に、ラックはもう一体の玉犬を呼び出す。
「黒はフィンにつけ、白は俺と来い。フィン！」
「ああ、この冒険者は任せてくれ」
「了解。あ～っクソッ、足速すぎ！アイズ！」
そうぼやきつつも、玉犬とラックはアイズに追いついた。
二人と一匹はダンジョンを駆けベルとミノタウロスを探す。先導する玉犬が先程の冒険者の臭いを辿る。
「冒険者さま……」
「パルゥム!?」
「ワンッ！」
（玉犬が吠えた。このパルゥムから強いベルの残穢…ベルの仲間か!?）
話を聞く時間も惜しい。ラックはパルゥムの少女、リリルカ・アーデの首根っこを掴んでそのまま抱え、彼女に反転術式をかける。
そして、背後からは強い気配。
「ラック、そして剣姫か……」
「オッタル……なんか用？」
「……」

オッタルは答えない。アイズならば敵対する派閥ということでいいが、ラックは人数が多くとも、収入が多く出費も多い。財力から見れば未だ零細と言ってもいい。

オラリオの二大派閥の片方が零細と争う。レベル7が殺し合う理由には足りないと感じ、いい言葉が浮かばない。

「フッ!!!」

「クソ脳筋がっ!」

オッタルの大剣が振り下ろされる。

影から出た黒い半月刀によって、その剣撃を受け流す。

「ヒッ……!」

「あ、ごめん」

リリルカの髪を剣が掠め、髪の先がハラリと落ちる。

オッタル(レベル7)とそれに匹敵するものが相対する戦闘を間近で見たリリルカ(レベル1)。傷は既に癒え、命の危機は遠のくが、別の理由で死にそうになり、恐怖に身が強張る。

そんなリリルカの様子に気づいたラックは軽い口調で謝るが、あまりの衝撃に言葉がリリルカに届くことはなかった。

(さて、簡単に抜けさせてくれそうにないな。目的は……ああ、なるほど。修行の時に見たけど、ベルの魂の色は透明。綺麗かどうかは置いておいても珍しいものではある。な

ら、これはフレイヤのワガママ説が濃厚かな……）
そんなことを考えながら、ラックは半月刀を影へと収め、リリルカを地面に置いて掌印を結ぶ。
「脱兎」
術式が発動する。『玉犬・白』は、既に術式を解除し影に戻っている。この場を何百、あるいは千にも届くほどの兎の式神が埋め尽くす。
「これは……？」
（視界を埋め尽くすほどの兎…陽動か！）
オッタルは瞬時に脱兎の役割を理解する。
脱兎は群で一つの式神。オッタルの読み通り、主に陽動として使われる。とにかく数が多く、視界を遮るブラインドの役割がある。
「フンッ!!」
そんな脱兎も、オッタルの剛腕で振るわれる横薙ぎの一筋の剣により、その大半が消滅する。
しかし、オッタルは呪術師を相手にする経験が少なすぎた。
だからーー
「よっ!!」

「ぐうぅぅっ!!」

特級呪具『遊雲』

特殊な能力を持たない赤い三節棍。

使用者の膂力に破壊力、殺傷力が大きく性能が左右されるこの呪具は、呪力込みでの身体能力がレベル６のラックの膂力に特級クラスの呪力が乗せられる。

その威力はレベル８へと至ったザルドであろうとも、その打撃は無視できない威力を誇る。

「ぐ、うぅ……」

（立った……戦闘続行のスキルの効果か。でも、いつもの動きは出来そうにない。それに回復されると厄介……そもそも、左腕一本で游雲をガードして腕が落ちてないのはヤバいよね）

「俺たちはベルのところに行く。オッタルはそこでゆっっっくりと休憩しておくといい」

（すごい…攪乱で逃げたと思わせての側面からの攻撃。気配の緩急、武器の振り方、立ち回りからしてレベルが違う。やっぱりこの人、【猛者】よりも強い……）

ランクアップを経て更なる高みに上ったアイズ。

だが、そんなアイズでも未だ届かないのが【猛者】。

そして、また更に高いステージに立つのがラック・マーストン。
（フィンが警戒してた通りの圧倒的な強さ……これが英雄）
『才禍の怪物』と呼ぶに相応しい常軌を逸した才能を持ち、神時代以降眷族達の中で最も才能に愛された女がアルフィアであれば、神時代以降眷族達の中で最も才能に愛された男がラックである。
才能はアルフィアと互角。二人を分ける差は能力の手数と威力。そして戦闘経験の質と量。
現代の下界以上に混沌とした時代を生き抜き、一つの時代を終わらせた英雄。極東最強の英雄とまで呼ばれた称号は伊達じゃない。
「アイズ、なにボーッとしてる!?さっさとベルのとこ行くよ！ほら走って！」
「――！わかってる」
一瞬の攻防に目を奪われていたアイズはラックの声でハッと気が付く。
前を走るラックはリリルカを抱え、その足はとうとうベルのもとへとたどり着く。
そこは小さな広場。地面に手を付いて痛みを堪えるベルと、片角のミノタウロスがついさっき見たような気がする大剣を振り上げる。
それを見たアイズはベルの前に立とうと脚に力を込めるがーー
「ベル！」

「待てアイズ……脱兎」
場を攪乱し、少しの時間を稼ぐ。
壁となり、視界を遮る脱兎たちの中心で、ラックはベルの肩に手を置き反転術式をかけるでもなく只々言葉をかける。
「ベル……怖いだろ？」
「……」
「ミノタウロスはレベル2、しかもアレは強化種。今のお前に勝てる相手ではない。でも、あきらめるのか？ここで逃げれば、お前は助けられるだけの民衆になる。それでいいのか？英雄は、もういいのか？」
覚悟を問う。ラックには自信と確信があった。己が課した修行が正解である自信、修行によりベルに蒔いた種は芽吹くという確信。
ラックには、ベルが戦意を失う程のトラウマをミノタウロスに抱くことなど知りもしない。
それでも、ラックはベルを焚きつける。ミノタウロスを倒せと。偉業を乗り越え高みへ登れと。
「消えたか？雑念は」
「はい！」

ベルの返事と同時、脱兎は影へと戻る。
ベルは二本の短剣を両手に構え、その目はミノタウロスを見据える。
雑念を振り払い、ただ目の前の状況を、事実に即して対処する。ラックは呪術師らしく、ベルに教えた戦い方の基礎の基礎。
「俺は手を出さないし、誰にも手を出させない。だが、勝てよ、ベル」
構えは自然に、拘らない。
「ヴオォォォォ！」
ミノタウロスが振るう剣。
ベルは首を傾け、ミノタウロス振るう横薙ぎの剣が、ゆっくりと頭の上を通り過ぎるのを確認する。
（見える。大丈夫）
「ヴオオオォ！」
さらに振るわれる大剣。ミノタウロスは大きなこの剣を軽々と振り回す。
しかしベルはその動きを見極めることが出来る。
横に振られた剣を屈んで避け、次の振り下ろされた剣を飛び上がって避ける。
そして着地と同時に後ろに下がって再び構える。
（よく見れば躱せる。当たらなかったら剣なんて、無いのと同じ）

「ヴオォォ」

ベルが再び駆け出し、ミノタウロスもそれに続く。

金属のぶつかり合う音がダンジョン内に響く。

（憧憬すらも制御しろ。ベル、俺らみたいな戦う奴らは常に個人戦。最期は一人なんだよ）

モンスターと冒険者（ベル）の攻防が続く中、ロキ・ファミリアの面々が揃い始める

「おい、ありゃあの時のトマト野郎か？この一か月で何があったんだよ」

「それってアイズが助けた子だっけ？」

「ああ、だが……」

（あれから一か月。一か月でここまで強くなるわけがねぇ）

レベルという壁。それがどれほど大きな壁か、レベルを重ね、強さに取りつかれる者ほど実感する。

第一級冒険者ともなれば、一つのレベルの差が早々埋まるものではないことなど百も承知。

だが、この少年ベル・クラネルは、レベル2でもさらに強いこの隻角のミノタウロスと互角に渡り合っている。

「……ラック、君が鍛えたのかい？」

フィンはベルの動きからそう推測した。
剣の振り方はアイズの動きによく似ている。だが、体全体の動きはラックによく似ている。
「ああ、一週間だけだけどね」
「鍛えただぁ？それで済むなら苦労しねぇよ。レベル1の駆け出しじゃねぇのかよ、あのトマト野郎はよ」
「もちろんレベル1だよ。それに、教えたのも基礎だけ。魔法とかスキルとか、戦い方で基礎以上を教えると悪癖に成ったりするし……でも、いろいろ教えた中で、どれが成るかまでは俺にもわからない。まあ見てなよ、ここは何もせず」
英雄の誕生をさ。
これは、駆け出しの冒険者がミノタウロスを倒すだけの、千年以上織りなされた迷宮にある、たったの一頁（ページ）。
ベル・クラネル、初めての冒険。ただそれだけ。

奮闘

アイズさんとラックさんから教わった全てを吐き出すように、僕はミノタウロスに挑む。

英雄（ラックさん）は僕の冒険に背中を押してくれた。アイズさんも、この場を静観してくれている。

二人の英雄に背中を押され、僕は今日、初めて冒険をする。

「ヴオオオォォ!!!」

「はあああぁぁぁ!!」

ミノタウロスが剣を振るう。

ミノタウロスは巨剣を軽々と片手にて振るい、袈裟懸けにベルへと斬りかかった。

二本の短剣でミノタウロスの攻撃を凌ぎ、その剛腕に切れ目を入れる。

「浅い……!」

「ああ、ミノタウロスは耐久に優れる。あの少年では肉を断つのは困難だろう」

たしかに、フィンの言うとおりミノタウロスの肉は断ち難い。高威力の攻撃で一気に

押し切るのが得策。
だが、その手段がないベルがこうした耐久力が高い相手と戦う方法。
（そうだ、とにかく削れ。隙をうかがうな、隙を作り出せ）
ラックがベルに教える。幸運すらも実力で掴み取り、勝利への道筋を作り出す。
ラックの教えは呪術師らしく、ベルもその影響は強く受けた。偶然だろうとなんだろうと、勝利は己が手でモノにする。
「ファイアボルトォ!!」
「ヴオッ！」
ベル唯一の魔法。稲妻の如き爆炎が放たれる。
「詠唱なしの魔法!?それを至近距離で!!」
「ああ、あの一言での発動。ミノタウロスの動きが一瞬とはいえ怯む」
一瞬の隙。ベルは体を回転させミノタウロスの懐に潜り込み、逆手に持った神の刃（ヘスティア・ナイフ）で一気に左腿へ連続の突きを繰り出す。
さらに――
「ヴ、ヴオオォォ!!」
「――――っ!?」
更なる攻撃に意識を向けた瞬間、ミノタウロスはさらに姿勢を低くし、隻角でベルを

刺そうと頭を傾ける。
「バカが、欲張りすぎだ！」
ベートの言うとおり、ベルは攻撃に振り切った動きをしている。
ここは防御に切り替えるのがベター。第一級冒険者であろうと、あの実力差にあの状況。誰だってそうする。
ならばベストは？
「踏み込んだ！」
「死ぬ気か!?」
さらに攻める。
ミノタウロスの懐へと潜り込み、ヘスティア・ナイフは喉元へ。
「はあああぁぁぁ!!」
短剣がミノタウロスの喉元へと突き刺さる。
ベルは歯を食いしばりさらに腕へ力を込める。
「くっ、ああああぁぁぁ!!」
「ヴヴゥッ!?」
ミノタウロスの頭は持ち上げられ、隻角がベルに当たることはない。
ナイフが深々と刺さったことにより、口からは血が吐き出される。

「ヴオオォォ!!」
顔が上がれば剣が上がる。ベルは攻撃に踏み込みすぎた。ミノタウロスにとっての良い位置であるここは回避しなければならない。
ベルは刺さったままのヘスティア・ナイフから手を離す。後ろへ飛び退き、さらに距離も取って一息つく。
「あの子、レベル1じゃないの?」
「上手すぎる……!」
老練すら感じさせる深い読み。
だが、実際に深く先を読めるほどのセンスはベルにはない。
もしあるのならそれは成長、経験から来る教訓。
「フー……」
「ヴフゥゥ……」
一息。お互いが一息つき、先程までの闘争が嘘のような静寂が訪れる。
ベルはシュワイザーデーゲンを右手に持ち替え、真っ直ぐにミノタウロスを見据える。
「笑ってる……」
ベルは笑った。格上の好敵手を前に笑顔を見せた。

悲壮感なんて感じさせず、今この状況を楽しむように。
「どんなにボロボロになっても、絶望的な状況に打ちのめされようと、唇を曲げて無理矢理でも笑う。笑ってないと、周りは不安なまま」
「……？それってアルゴノウトのこと？」
「……」
ラックは答えない。ただ黙ったまま、目隠しを外した。
（この場はこの六眼で見届ける。英雄になれ、ベル。僕に並ぶ、英雄に……！）
未だラックの隣はいない。三千年間、誰一人として隣に立つものはいなかった。
ラックからすればザルドとアルフィア、マキシムでさえも弱すぎた。才能でも、努力でも、彼らはラックに及ばない。
ならばと、優れた頭脳を持つものをと、現在はロキ・ファミリアのフィンに目をつけた。
だが、同等の力を持つものがいない。
今までその力を持つものはいないわけではなかった。その悉くが相対するものであったが……。
ラックは最強。それは紛れもない事実であるが、目的のためには並び立つものが必要だった。それも複数人。

「はあああああぁぁぁぁ!!!」
「ヴオオオオオオオオオオ!!!!!!」
その中の一人。英雄候補の少年は、振り下ろされるミノタウロスの剣をシュワイザーデーゲンで受ける。
「ぐっ」
シュワイザーデーゲンが砕けた。悪くない性能の武器だが、ミノタウロスの剣を耐えるほどの耐久性はなかった。
「ベル様!」
「いいや、上手い!」
腹を割かれ鮮血が宙を舞う。
心配する声をあげるリリルカの隣で、ラックはベルの見事な立ち回りに賞賛を送る。
(腹が……!。でも薄皮一枚、大丈夫!)
武器を失った。しかし、ベルはミノタウロスの喉に手を伸ばす。
「ヴモッ!?」
刺さったままのヘスティア・ナイフを掴む。
ミノタウロスは反射的にベルを剥がそうとベルの腕を握る。
そのまま剣で突き刺そうとするが――――

「――――ファイアボルトっ!!」
ミノタウロスの喉が、手が爆ぜる。
一瞬、ミノタウロスの手が緩む。しかし、剣は未だベルを捉えている。
「ヤベェ、やられるぞ!」
脇から心臓を一突き。剣の大きさからすれば両断と言っても良い。
死の予感は近くとも、それでもベルは攻め続ける。
「ヴォ……!?」
ミノタウロスの顎を足場に、ベルはナイフと共に下へと避ける。
首から腹にかけて、ミノタウロスの上体は割かれた。
そして――――
「ファイアボルト……」
「ヴオオォォ……オ……」
サクリと腹に入れられたナイフ。ナイフからは火が溢れ、ミノタウロスの体は魔石ごと崩壊する。
残されたのミノタウロスの隻角が一本。
勝敗は決した。傷は浅い。だが、体力の殆どを出し切った。
「成ったな……ベル・クラネル」

ラックはポツリ、言葉を漏らした。
倒れそうなベルをアイズが支え、ゆっくりと地面に降ろす。
意識が朦朧とする中、綺麗な金髪が離れ、白髪碧眼の男が自分を治療するのがベルの目に映る。
（やっぱり……。おじいちゃんが言っていた。極東最大の英雄にして、下界における最強の英雄。ラックさんの本当の名前は……）
ベルは祖父の影響により、英雄譚に詳しい。
極東の英雄であろうと、三千年前の英雄であろうと、祖父はベルに失伝したような英雄譚も聞かせている。
だから、ラックの真名にも――
「ありがとうございます……道真さん……」
「――！」
道真の、スガワラノ・道真の名は今も残っている。もちろん逸話も。
だが、種族、特徴、能力、思想も不明。
逸話はただ一つ、五大災厄の一つ。両面宿儺の単独撃破。
だが、ベルの祖父は知っている。種族、特徴、能力、思想を知っている唯一柱の神。
「……はは、懐かしい名前だね」

思い出した、昔日の名。なぜ知ってるか。とは思ったが、情報源は神以外いない。神の中にはスガワラノ・道真の名を知るものが、多くはないが居るには居る。

心当たりの、そのどれかだろうと推測するが、今はベルの治療に集中する。

「傷は浅いね。でも、問題は体力か……体力は反転術式じゃ治らないから」

「ありがとうございます……」

治療は問題なく完了した。

ベルは立ち上がり、リリルカと共にこのまま地上に向かう。

「ねぇ、ほんとに二人だけで行かせるの？」

「もちろん、帰るまでが冒険さ」

軽口を叩くラックをティオナは睨む。言外になんとかしろという目で。

「や、やだなぁ～。流石に何もしないほど俺も鬼じゃない。だから、こいつを貸す」

そう言ってラックは玉犬・白の背を撫でる。

「近くに敵が来たら吠える。あと、命令すれば戦う。地上に着いたら帰れと命令してやってくれ。見た目は割と魔物だし、地上に入らないからね」

「何から何まで……」

「もういいよ。さっさと行け」

シッシッと手を払う。

ベルとリリルカは一礼すると歩いて地上への道を歩いて行った。
「いいのか？送らなくて」
「いい、どうせ帰れる。それに今のベルの集中を乱したくない。アレを好きに出せるようならないと、英雄なんてものには成れないよ」
ベルは冒険者。主に魔力を扱う冒険者たちには黒閃が存在しない。
だが、黒閃後に起こる集中状態（ゾーン）へと、黒閃を撃たずに至ることができるのが魔力の強み。
今のベルは集中状態（ゾーン）。
ラックはこの感覚、ベルが掴んだチカラの核心を掴ませておきたい。
「そうか……」
リヴェリアは心配そうにベルの背を見送るが、ラックの何かを確信したような表情に納得させられる。
「さあ、今度は僕らが冒険をする番だ。予定通り、このまま五十階層へ行こう」
冒険を見た。ベルの冒険はミノタウロスを倒すだけの物語。
今度はフィンたちが冒険をする。
いざ、五十九階層へ。

談話

遠征は安全階層（セーフポイント）である五十階層、灰被りの大樹林を見下ろせる大岩の上を拠点に開始した。

フィンに指示されたラックの役目は五十階層にある拠点、キャンプの防衛。

索敵（スカウト）と回復（ヒーラー）の役割を担えという指示だった。要は察知したらモンスターの場所を団員に教えレベル上げを手伝えとのことだった。

フィンにとって、五十九階層でラックに気を回す余裕はない。

十種影法術にあまり強さを感じていないのもある。

魔虚羅を見ていない以上当然ともいえるが、低く見積もっているのは確かだ。

「南西、３０Ｍ。フォモール三体」

パチパチと鳴る焚き火を突きながら、ラックは近くの猫人に偵察したことを報告する。

「クルス、一班を率いて討伐に向かって」

「ああ、任せろ！」

【貴猫（アルシャー）】アナキティ・オータムが全体を指揮する居残り組は、アナキティを含め全員が

ラックに疑念を持っていた。
フィンがどこかから連れてきた、零細ファミリアの団長。
ロキ・ファミリアに取り入ろうとする浅ましい男にしか見えない。
だが、そんな疑念は初日で振り払われた。
アナキティも依頼内容は聞いている。その内容を期待以上の働きで、期待以上のパフォーマンスを見せた。
最低でも半径１Ｋの偵察範囲。指示はせず、役に徹する。
そして極め付けは。
「二班、シャロンが足をやられた！」
「オッケー」
おかしな方向に曲がった足は二秒もせずに完治。
失われた血液さえ回復させ、詠唱を必要ともしない回復魔法らしきものはあらゆる傷を瞬時に癒す。
そして疲れた様子を見せることなく、再び焚き火を楽しむ。
（平和だな～……）
地上に想いを馳せる。
これは仕事。ベルの冒険を見れたのは良かったが、この依頼はそれだけになりそう

だ。

そんなことを思いながら、時間は過ぎていく。

ラックは遠征中。バーチェはダンジョン探索に熱心さを見せ、アルガナはそれに付き合ってダンジョンへ向かった。

手持ち無沙汰な団員が二人。

「そうじゃ、ザルド、アルフィア」

「なんだ?」

「……?」

ザルドとアルフィアの現在の主神であるカーリーは、新米二人を案じてか話を始めた。

「お主ら、これからどうする気じゃ。もう、冒険者ではやっていけんじゃろ?」

ザルドとアルフィアについて、カーリーはある程度聞いている。

七年前の【暗黒期】。二人は神エレボスに協力し、オラリオで三万人もの犠牲者に及ぶ、大抗争を引き起こした。

当時を知る冒険者は健在なものが多く、中には二人の姿を覚えているものも少なくない。

「ああ、本業で続けるつもりはない。少なくとも今はな」
「そうだな。ザルド、お前はだいぶ見た目が変わったようだが……」
「お前は髪型以外の変化は無しか……」
浮き上がる問題はやはり見た目。
受肉の影響で肉体年齢が素体となった肉体に引っ張られた。現在、この二人の肉体年齢は十八歳程。
ザルドは顔の傷、髭が無くなり顔は若々しく年相応となっている。
わかりやすい特徴が悉くなくなっているため、パッと見ただけじゃザルドとはわからないだろう。
問題はアルフィア。
元々が二十四歳と若かったため、そこまで見た目が変わっていない。
長い灰色の髪は短く、おかっぱ頭になっている。違いと言えばそれだけだ。
生き返ってまず困るのが職とは、ままならないものだ。
「どうするんじゃ？」
二人が考えを巡らせるのを眺めるカーリーがそう問いかける。
「……神カーリー」
「なんじゃ？」

「外の酒場で働けないか?」
アルフィアの提案。
闘争街の外の酒場の話は他の団員から聞いている。
クレアというアマゾネスの団員が店主をしており、彼女が出す料理が馬鹿みたいにマズイという事も。
「良いが……出来るのか?」
武人然とした大男と、治ったとは言え病に侵され病弱だった女。
二人が料理をできるとはカーリーには思えなかった。
「問題ない」
「ああ。酒場の料理は昨日の夜に出たやつだろう?毎日アレが出てくるのはさすがに堪える。次からはウマイ飯を出すと約束しよう」
そう約束したザルドは、一人オラリオを周る。
カーリーは神会へ、アルフィアは待機。
ザルドの見立てでは酒場を開くのに必要な時は一週間。
そして必要なのは良い酒と良い材料。
「デメテルとニョルズ、他にもいくつかの商業系を回ってみるか」
デメテル・ファミリアはオラリオの外にある大農場で農業を営んでいるファミリア。

オラリオの農産物のほとんどはこのファミリアの活躍により担われている。
そしてニョルズ・ファミリア。ここはオラリオの南西３Ｋ先にある港町メレンの管理、運営を担うファミリア。主に水産物を扱う。
そして、商業系で酒を調達しようと考えるザルド。良い酒ならソーマだが、ぼったくられる可能性がある。それなりの酒をそこらのファミリアで購入したするのが手だろう。
だが、その前に行くところがある。
オラリオ北西、第七区。
「ギルドの登録を頼む。ファミリアはカーリー」
レベル１。そういうには随分と大柄な男がギルドを訪ねた。
「登録……えっと、わかりました。こちらの書類に必要事項の記入をお願いします」
受付をしていたハーフエルフの女性は戸惑う様子を見せたが、すぐに切り替え業務に徹する。
なんの因果か、この受付はベル・クラネルの担当アドバイザーをしているエイナ・チュールというギルドの受付嬢。
一応、ラックとも少し話したことがある。
ファミリアのアドバイザーのミィシャ曰く、彼のファミリアの団員はバーチェ以外が

全く話も言うことも聞かないとも聞いていた。
（アマゾネス……じゃないよね……。ラック氏以外で男の人がきたのは初めてかも……）
　そのラックもほとんどギルドには寄り付かないが、アマゾネスしかいないファミリアに二人目の男性冒険者。
　異様に感じるのも無理はない。
「ほら、書けたぞ」
「はい、えっと……」
（名前はザルドとだけ、年齢は十八、役割はサポーター……）
　風格の割には見た目通りに若く、レベル1と言うのも嘘じゃないと感じ始めていた。
「これでギルドでの登録は完了です。他に何かありますか？」
「ああ、ウチの団長がコレを換金しろとのことだ。頼めるか？」
　そう言って大量の魔石が入った袋をエイナの前に置いた。
　中には中層で取れるような魔石が大量に。
「これは……」
「さあ、団長には売ってこいとだけ言われただけだからな。出所までは知らん」
「そうですか……それでは買取、承りました。少しお待ちください」

レベル1を名乗る男が持ってくるには質の良いませきだが、レベル6が二人在籍するファミリアであればそういうこともあるかと、エイナは納得した。
「それではコレを……」
「ああ、ありがとう」
受け取った金額は百万ヴァリス。
これだけの大金があれば数日は仕入れに困ることはないだろう。
ラックが倉庫に詰め込んだ素材はまだまだある。
倉庫に詰められた素材が入った箱には売り時が指定されており、需要が高まった時に売るつもりらしい。
書いてあったこの袋は今日であれば二割増で買い取って貰えるようで、意外と商才があり抜け目のないラックであった。
用は済んだザルドは振り返りその場を後にする。
「あぶっ!?」
急に振り返った大男に少年がぶつかった。
白い髪に、どこかで見たことのある赤い瞳の少年。
ひ弱そうな少年は尻餅をついて倒れた。
「ああ、すまん」

ミノタウロスとの闘いを経たベルであっても、更なる高みの空気を纏う男。
「どうした、大丈夫か？」
「は、はい。ありがとうございます」
差し伸べられた手を支えに起き上がる。
「問題ないなら俺は行く」
「はい、すみませんでした」
「構わん、気にするな」
ザルドはギルドを後にし、商業区画で大量に食材を買い込んだ後、再びホームへと向かった。
地下にある氷室に食材を納め、ダンジョン産の食材も同じく、闘争街奥の倉庫から氷室へ移す。
作業を終えると既に日は暮れ、カーリーも神会から帰って来ていた。
「神会、どうだったのだ？」
カーリーにアルフィアが問いかける。
話のキッカケを作ったアルフィアの声に反応し、団員の注目がカーリーに集まる。
「うむ、それでは今回の神会について話そう」

数時間前。
『バベル』三十階の大広間。
神々を集めた会合『神会』。
「それじゃあ、第ン三回目の神会を始めるで。今回の司会はウチことロキや。よろしくなー」
「「「イエー」」」
テンション高いのう……。
妾はこの神会には初参加。
ガネーシャのパーティにもおった、ヘスティアが隣に座っておる。
妾は議論に参加するでもなく、ただその場を見ておっただけ。
ソーマの酒造りの禁止、ロキが見た極彩色のモンスター、そしてガネーシャの子供の死。
ソーマの酒も一応は噂には聞いてあったし、目新しい情報はなし。
「資料は行き渡ってるなー。今回は大所帯のファミリアがオラリオに参入した。命名式は過酷やでー」
スマンの。
この場の神々に向けてウィンクでも投げておいてやろう。

今オラリオにいる三十人の団員の命名。
頑張ってくれ。
「ほら、先に他のファミリアの子の命名や。まずはセト・ファミリアから」
妾の眷属の命名は後回しになったみたいじゃな。
二つ名……アルガナはそのまま女神の分身（カーリマー）になるじゃろう。
問題はバーチェか……。
妾としてはどんな二つ名になろうと良いが、バーチェは気にするかもしれんのう。
あやつはラックと出会い変わった。
アルガナへの恐怖が払拭され、己への自信が付いた。
あやつも存外、ティオナと似たタイプだったのかも知れんのう。
「よーし、ほんならあとはクソチビんとこの命名で終わりや。巻きで行かんと夜になってまうで～」
「うむ、良い名を期待するぞ」
そう社交辞令を述べておくかのう。
白熱の命名には、冷やかしの神々も後になるにつれ疲弊していった。
元より面倒になってきていたのか、最後の方は無難なものが多かったしのう。
「ほんなら次、アルガナ・カリフ。レベル６の副団長や。なんかあるか？」

「まんまでいいんじゃね？」
「それな」
「待て待て、女神はオラリオにも多いぞ」
「「「確かに」」」」
　意外と凝るのう……。
　そのままでいいじゃろうに。
「俺、怪物祭で戦ってるところ見たぞ」
「マジかよ、どんなだった？」
「ありゃやばいな。上層のモンスター相手だが無双状態」
「レベル６なのでしょう？そんなの当然じゃないの」
「いやいや、何より目を見張るのはやっぱり技だぜ。空中で攻撃かわすんだぜ？ヤバすぎだろ」
「む、それが彼女なら俺も見たぞ」
「ほう、タケミカヅチ。お前はあれをどう見る？」
　偶然その場に居合わせたという武神タケミカヅチ。
　武の神がその目で見るアルガナの闘いについて、神々から注目が集まる。
「とにかく対応が上手い子供だ。ステイタス頼りの荒々しい闘いに見えるが、洗練され

た技を駆使した闘法。徒手であれだけ闘える子供は初めて見たな」
「それはすごいな」
「だろう？そして何より驚いたのは、シルバーバックに襲われそうになった民衆を庇うため、合気を使ったことだ」
合気。
妾も詳しく知ることではないが、ラックの故郷の技。
対人戦特化の技法が源流らしいが、ラックとアルガナが使うものは無型。
モンスターに対しても応用が効くらしいが、あの二人は無型ゆえ、モンスターに対しても十全に効果を発揮させるようじゃな。
「合気？なんや、それは」
「極東の武術だ。アレは聞きかじりなんてものじゃない。ちゃんとした師がいるはずだが……カーリーがいたテルスキュラにも合気は伝わっているのか？」
「つい最近伝わったんじゃよ。団長のラックがよく使うからのう。アルガナも見て盗んだんじゃろうな」
アルガナのはラックの隣に立つため躍起になっておる様だからのう。
極東の武術に似たのかのう……。
「自分らやること忘れてない？」

いつの間にやらアルガナ自身の話になっておった。
命名の話をしておったというに、神々はやはり気まぐれなのかのう。
「よっしゃ、気を取り直して命名や。なんか無いか？」
「女神でなく戦神。戦神（カーリマー）の分身ではどうだろうか」
「「「「じゃあそれで」」」」
飽きたか。
アルガナが決まったなら、次はバーチェかのう。
「次はバーチェやな。二人目の副団長でアルガナの妹。有名なんは毒の付加魔法か……」
「あー、あの子か」
「黙々とモンスターを殺してたよな」
「褐色アサシン……イイネ！」
「ふむ、この子供にも二つ名があるのか……」
「だがあの名は二人合わせてだぞ」
「テルスキュラの蠱毒の王か。彼女はその片方だが、この際彼女の二つ名にするのはどうだろうか？」
「「「「異議なし!!」」」」

帰るかなしじゃな。

まあ良い。妾も帰りたくなってきた。ここはすぴーでぃーに終わらせてほしいところじゃな。

「最後は、ラック・マーストン」

「白髪に目隠し、長身のミステリアスボーイ……」

「誰や変な補足付けたやつは。まあ、間違ってはないんやけどな」

「どんな奴だ？」

「カジノと酒場の常連だな。カジノはクソ雑魚って聞いてる」

「クソニートじゃん！」

それな。

あれでべらぼうに強いんじゃから妾とて強く出れん。

「ガネーシャのところに団員を派遣したのって彼だろ？」

「うむ！そう聞いているぞ。怪物祭での協力、それに加えてのラックの治療。ガネーシャ脱帽!!」

ラックの治療は見事じゃよな。

予備動作無しで腕を生やしたりするんじゃから意味がわからんよ。

おかげで無茶な訓練が出来るんじゃからな。アルガナとバーチェであろうと容赦無

し。腕も足も臓物も、何度も引き千切られ、擦り潰され、捻じ曲げられようとも治療は完璧。

　それでも二人が懲りずに挑む。衰えることなく、より鋭く強い闘志でラックはと挑む、真の戦士へと格段に近づいている。

「ファミリアの内情にとやかく言うつもりはないけど、なんで自分らのところの団長をレベル2がやっとるんや？」

「妾のファミリアはテルスキュラの伝統に則り、力だけの序列で団長と副団長が決まる。ただラックがファミリア内で最強というだけのことよ」

「レベル6よりレベル2の方が強いっちゅうんか？うちらの恩恵がそんな甘ないってわからん訳ないやろ？」

「お主も忘れたか？恩恵はあくまで促進剤。元からある力に干渉は出来ん」

「ああ？ちゅうことは――」

「ここまでじゃよ。いらん事を喋った」

　妾は再び押し黙り、ただこの場を傍観する。

　ロキからすれば気になるじゃろう。遠征に誰ともわからん奴がついて行くんじゃからな。

　それでも妾が勝手に教える訳にもいかん。個人情報じゃからな。

「チッ。まあええ。ファミリアの内情には不干渉やからな。それで、どないする？」
「ああ、それはーー」
会議は続いた。
最後はどこぞの神が出した【黒閃】に決まった。
確か怪物祭の時に出したと言うておったから、まあ見てたんじゃろうな。
その後もいくつかの命名があり、最後のヘスティアの命名の後、無事神会は終了となった。

遭難

神会から十日が経とうとしていた。
ベルは【リトル・ルーキー】の二つ名を授かった。
没落貴族した鍛治師、ヴェルフ・クロッゾ。
クロッゾの家系に生まれた、『戦える鍛治師』を自称する青年を新たに仲間に加え、今日初めて中層に立つ。
「【ファイアボルト！】」
足元からは疲労の影が虫のように這い上がる。
それでもベルたちが逃げる背にはモンスターの群れ。
少し振り返っては魔法を放ち、再び距離を取る。
この繰り返しで、ベルたちは地上を目指す。
「っ!?」
（討ち漏らした……）
ファイアボルトは超短文詠唱の魔法。詠唱が短い分、威力は低い。
火炎が巻き起こる中から、四つの影。その身を焦がしながらも怒りのままに猛り走

る。
『グオオォォオオオッッ!!』
「ヴェルフ!」
「おうよ!」
ヴェルフの大刀が振り上げられる。
凄まじい速さで高速回転するハード・アーマードの体を打ち上げる。
ベルは目の前の二体のアルミラージを即座に斬り払い、真横を抜けようとするヘルハウンドの蹴り上げヴェルフの下へと弾き飛ばす。
「いい位置だぞ、ベル!!」
振り上げられた大刀が一息に振り下ろされる。
ヘルハウンドの肉体はその重さに耐えることは叶わず、一閃のもとに両断される。
そしてベルは振り向き様に打ち上げられたハード・アーマードに手を翳す。
「【ファイアボルト】!」
こんな調子で逃げに徹し、追いついたモンスターのみを狩っていく。
こんな無駄だらけとも言える戦法を取る羽目になったのは数時間前。
自分が遭遇したモンスターを他の冒険者へと退却に際し押し付ける緊急離脱方法である怪物進呈と呼ばれる戦術。

ベルたちはそれを押し付けられてしまった側となった。
モンスターの大群に追われ、ダンジョンを直走る。
「ヴェルフ、足の調子は？」
十三階層の崩落で潰れた左足。
応急処置で潰れた足は切断し、ベルが持つ大剣と盾、さらに少しのドロップアイテムから作った急拵えの義足を足に取り付ける。
義足は急拵えのため棒状のもので、切断面は回復薬で止血、癒着させることで治ったように見せる。
一歩踏み出すだけでも走る激痛には、ラックがベルに持たせてあった、クラゲの式神が出す毒から作ったという鎮痛剤を投与することで、小走りできる程度にはなった。
壊れたリリルカのバックパックは完全にばらし、布を体に巻き付け回復薬と解毒薬、少量の魔石とドロップアイテムを三人で分けて持ち運ぶ。
「ああ、ベルがくれた鎮痛剤のおかげで痛みは全くねえ。変な感覚はするけど、まだまだ戦えるぜ」
「よかった。ラックさんが遠征から帰れば多分治してくれる。お金については多分いらない。たぶん……」
失った手足の治療はラックであれば容易だろう。それはベル自身の身体で体験した

こと。
ヴェルフの足の完全な治療の条件はラックと出会うこと。
「ま、気にすんな。とにかく今は進もうぜ」
「そうですよ。十八階層まで残り三層。縦穴を見つければ直ぐですよ！」
リリルカの顔には疲労が見える。
ヴェルフは最も顔色がいいが、一番の重傷を負ったまま。
二人は死への恐怖を誤魔化すように笑いかけ、釣られてベルにも笑みが浮かぶ。
「そうだね。進もう」
三人は十八階層、安全地帯を目指す。

酒場はオープン三日目。知りあいの伝手が無いとはいえ、売り上げはそこそこ出せていた。
飯と酒は美味く、ウェイトレスは美人だと評判になり、ほんの少しづつだが客は増えている。
そして今日も酒場は開かれる。そのため昼過ぎからはザルドとアルフィア、クレアが開店準備に取り掛かっている。
「やあ、カーリー。神会ぶりだね」

「なんじゃ、ヘルメス。まだ開店前じゃ、帰れ帰れ」
カウンター席に座り商品の酒を勝手に開けるカーリーの元に、飄々とした男神が尋ねてきた。
「そんな釣れないこと言うなよカーリー。今日は頼みがあって来ただけなんだ」
「ほう、頼み」
「ああ、実はラックくんの弟子の子が中層から帰らないみたいなんだ。それで、アルガナちゃんかバーチェちゃんに救出隊に加わって欲しかったんだけど……留守かい？」
店内を見渡し、二人の姿を探すヘルメス。
しかし、当の二人はここにはいない。
「今ちょうど出かけておるみたいじゃな」
「そうなのか？それは……どうしたものか」
腕を組み、悩む素振りを見せるヘルメス。
カーリーファミリアはラックのワンマンチーム。
アルガナかバーチェ、もしくは二人とも。彼女たちはラックの意を汲み協力してくれそうだと考えていた。
しかし二人ともが不在なら話は別である。
それに、とヘルメスは考える。

（リューちゃんがいればいいだろうけど、確実になるダメ押しが欲しかったんだけど……）

「カーリー、商品の酒が足りないん、だ、が……」

ヘルメスがいることに気が付いたのか、店の奥からが現れた灰色の髪の美女。

そして、その視線がヘルメスで止まった。

「静寂の、アルフィア……」

後ろに控えるアスフィはその姿に見覚えがあった。

七年前、闇派閥の切り札の一角として神時代の崩壊を画策した。

【剣姫】や【九魔姫（ナイン・ヘル）】、【重傑（エルガルム）】、そして【アストレア・ファミリア】との死闘を繰り広げ死んだとされる人物。

「おいおい、マジかよ道真公。受肉させたっていうのか……」

神は呪いについて無知ではない。

詳しさは神によってそれぞれだが、ヘルメスは詳しい部類に入る。

故に、目の前にいる人物が誰かを理解してしまった。

「神ヘルメスか……」

「はは……驚いた。でもちょうどいい」

「ヘルメス様、まさか彼女に助力を乞うつもりですか!?」

アスフィの言葉にヘルメスは首を縦に振った。
「いいじゃないか。戦力は多い方がいいし、強さも申し分ない」
「それは……ですが、リオンはいい顔をしませんよ」
「まぁ、そこはなんとかするさ」
ヘルメスはいつもの調子で答える。
「勝手に話を進めるな。私は受けるとは言っていないぞ」
「まあまあ、ここはひとつ頼むよ。ベル君を助けると思ってさ」
「ベル？何かあったのか？」
アルフィアの問いに、ヘルメスは現状について知る限りのことを答えた。
それを聞き終えると、アルフィアはしばらく考え込むように沈黙して、それから口を開いた。
「そうか、事情はわかった。私も力を貸そう」
「えぇっ!?」
「助かるよ。集合は夜の八時、中央広場」
「ああ、必ず」
あっさりと承諾したアルフィア。
あまりの展開の早さに驚くアスフィだったが、ヘルメスは全く気にしていないよう

だった。
アスフィを連れヘルメスが店を出た後、アルフィアは約束通りに装備を整え始める。
「意外じゃな。お主があの小僧のために動くなど」
「ああ、私にも情はある。ベルは私に唯一残された血縁。助けてやりたいと思うのは当然だ」
「……ほう。驚いたお主の親戚だったか。であれば仕方なし。行って来るがよい。ザルドには妾から伝えておく」
カーリーはそれだけ言うと、店の奥へと引っ込んでいった。
「ああ、助かる……」
誰に告げるわけでもなく呟く。
どこの酒場にでもある護身用の剣を携え、旅装用のローブを被り、アルフィアもまた店を後にした。

「おや、来たね。最後の助っ人が」
ヘルメスが目を向けたのは安っぽいローブに安物の剣。大凡ダンジョンに潜る装備をしていない女戦士。
それでも、この場の全員が察する。

目の前に立つ女戦士の佇まいだけで分かるほど、彼女がこの場の誰よりも強いことを。

「久しいな。小娘」

掛けられた声色、フードから覗かせる灰色の髪、そして特徴的な左右非対称の虹彩。

覇道を貫き死んだ、かつての英雄の姿。

「……!? 嘘でしょう……」

助っ人、そう助っ人。

ヘルメスが呼んだ、リュー・リオンとは別の助っ人。

「静寂のアルフィア……」

覆面の冒険者。リュー・リオンは彼女に見覚えがある。

「あーあーあー。質問は後。今は急ごう」

二人の冒険者を加え、捜索隊はベルたちを救出するため広大なダンジョンへと進入する。

『ガアアアアア!!』

「【魂の平静（アタラクシア）】」

ヘルハウンドの火球。

アルフィアはその全てを己が身体で受け止める。
後ろには神、それでも一切の動作なく、短い詠唱のみを行い神々の護衛を最優先に行動する。
「強い、なんてものじゃないな。これは……」
「う、うん。超短文詠唱で全部防いだ」
「カラクリがわかりません。どのような魔法なのでしょうか……」
答えは単純。
敵の魔法を無効化する付加魔法。強度は凄まじく高く、オラリオ最強の魔導士、【九魔姫（ナイン・ヘル）】リヴェリアの魔法すら容易く無効化してしまうほど。
「さっさと片付けろ。小娘」
「わかっています」
「……」
リューの振るう木刀が全てのモンスターを薙ぎ払う。
十数体はいたモンスターは全てが一頭のもとに叩き潰される。
現在一行は十三階層。
アルフィアは一切攻勢に出ず、アスフィとリューが中層のモンスターを相手に無双する。

「後衛は安心ですね。レベル７の護衛。彼女の防御を抜けることができるモンスターは、それこそ深層にも数えるほどしかいないでしょう」
「あ、ああ」
リューにはまだアルフィアの生存が頭で処理できていない。
目の前でアルフィアの最期を見たリューにはアスフィ以上の衝撃がある。
「……アルフィア殿、それでどこを探すんだ？　でたらめに探し回ってもベル・クラネル達は見つかりっこないぞ」
後衛に控える桜花はアルフィアに低い声で尋ねた。
「五月蝿い。口を閉じて黙って控えていろ、雑音」
返ってきたのは突き放すような侮蔑の言葉。
今までアルフィアの指示に従い進んで来た。
これまで、誰もベルたちの痕跡を見つけていない。このアルフィア以外は。
（あそこで立ち止まったか。だが、あの先からは音がしない。なら、次なる痕跡は……あれか）
魔法使いのアルフィアであるが、酒場が開くまでの一週間で前衛の技術を磨き、余った時間を斥候の技術の修練に割り当てた。
こんなことをした理由は暇つぶし以外の何でもないが、ここに来てこれらが役立っ

た。

　これらの技能は、かつてゼウスとヘラの眷属が行なっていたものの再現。もちろん、スキルやアビリティは模倣できないが、それでも技能事態の修得は完璧に仕上がっている。

「そこを右だ。それと、モンスターが三体。鉢合うぞ」

　さらには音による探知で、半径５０Ｍは確実な探知圏内。

　捜索隊の進行は順調、というかは迅速に進む。

「止まれ」

「静寂、どうしましたか？」

　急な停止の合図にアスフィは怪訝そうな顔をする。そしてそれは他の面々も同じ。

　十七階層、嘆きの大壁に現れる迷宮孤王と呼ばれる階層主の出現。

　一度倒すと二週間は復活せず、ロキ・ファミリアが倒しているはずではあるが……。

（ゴライアスに紛れた、足音が二つ……）

「走れ、冒険者がゴライアスに襲われている」

『!!』

　この十七階層で、これだけの大きな足音を鳴らす存在。心当たりは一つ。階層主ゴライアスの出現。

アルフィアとリューが、疾風となり駆け出した。
通路を抜けると、黒いゴライアスから逃げる白髪の冒険者。背には大男。後ろには小人族の少女。
「救助優先。散れ」
ゴライアスは明らかに強化種。アルフィアの見立てではゴライアスのステイタスはレベル５相当。
討伐は容易。だが、背には二柱の神とレベル２とレベル１が数名。彼らを守りながらの戦闘は、流石のアルフィアであっても骨が折れる。
リューとアスフィが二人を回収したのを見届けると、アルフィアはゴライアスと向かい合う。
ゴライアスの腕がアルフィアの華奢な身体へと迫る。
『ガアアアアアッッ!!』
「遅いな」
その詠唱は短かい。魔法で止める間もないほどに
その魔法は防げない。高い威力に加え、余波だけで平衡感覚をズタズタにする絶望的な破壊力。
その魔法は躱せない。音としての不可視の性質が魔法の形を捉えられない。

「【福音(ゴスペル)】」
あたりを鐘の音が染める。
巨体は宙を舞い、ゴライアスは再び白壁へと還される。
『ガアアアアアアアアッッ!?』
半身が失われた。
それでも、黒いゴライアスが持つ再生が始まる。
「すごい……」
「立ち止まらないでください。アレが来ます!」
リューは出来るだけ距離を取るため、焦った様子で全員を十八階層への入り口へ誘導する。
殺し切れないモンスター。発動した魔法は【福音(ゴスペル)】。何が来るかは容易に想像がつく。
黒いゴライアスの再生が始まろうとしていた。
「ガ、アアア……」
「再生か……だがそれもまた、遅いな」
半身の破壊。ラックであれば三秒もあれば癒すだろう。
むき出しの魔石を傷付けないよう、細心の注意を払い残りの肉を削ぐ。
アルフィアは捉えている残留する音の魔力を。

あとはこれらを起爆剤とし、祝言を唱えるだけ。
「【炸響（ルギア）】」
音が炸裂する。
響き渡る音、ただの残り滓が、ゴライアスの残る肉体をズタズタに裂く。
「スペルキー」
誰かが漏らす声。その言葉が生み出す答え。
階層主を一撃にて屠ったということ。
魔石を残すという縛りまでありながらも、ゴライアスの強化種。その討伐を為す。
詠唱が二言、魔法は一発。
（一撃。七年前より動きに冴えがある。ゼウスやアストレア、ロキの話と違う。やはり治ったのか……!?）
そうなれば、彼女の器に際限はない。
彼女は才禍の怪物。その才覚はレベル7すらも超える。
ヘルメスは神時代の唸り、英雄達の行く末に歓喜するのを必死に噛み殺し、いつもの貼り付けた笑みを浮かべる。
「何をしている。持て、小僧ども」
「あ、ああ」

「は、はい」

アルフィアの声でベルと桜花は黒いゴライアスが生んだ巨大な魔石へと走る。

ベルはアスフィな持ってきた回復薬により傷が癒えたため、アルフィアの命令に従い魔石を運ぶ。

一行は大荷物を抱え十八階層へ。

帰還

毒妖蛆（ポイズン・ウェルミス）。遠征の帰りに出会った『毒の墓場』の異名と共に恐れられ、上級冒険者が保有する耐異常のアビリティすらも貫通させてしまう致死性を持つ毒液を放つ。

毒の異常攻撃を行うモンスター。その最上位の大量発生。

「うわっ、きもっ」

ラックの目の前。蛆の様に蠢くモンスターの群れ。

リヴェリアの魔法が放たれた後も、別の通路から大量に合流する毒蛆。

「何をやっている。逃げるぞ！」

遠征の帰路。皆が心身ともに消耗する中での異常事態。対処に遅れが出る。

「わかってら！」

気の抜けた返事と共に、両手を結び影絵を象る。

「脱兎」

逃げる際にはこの式神が最も有効打になる。

フル出力で展開する兎の群れが、毒液を受けた団員の回収と同時に、ポイズン・ウェルミスを攪乱する。

それでも、ポイズン・ウェルミスは数の力で兎の群れの中を掻き分け、稼げた時間は数十秒程度。

「総員、運ばれてくる動けない団員を回収！このまま十八階層まで、走れ!!」

フィンの指示に、全員が必死になって十八階層まで走り抜ける。

ヘファイストス・ファミリアの鍛治師は椿を除いて全員が、毒に侵される始末。

ロキ・ファミリアの団員達も数名が毒液を浴び、引き摺られて通路を進む。

「ラック、先行してくれ。十八階層までの道は覚えてるね？」

「一応は、ね」

「なら頼むよ。僕らは後ろから着いて行くから」

（フィンやリヴェリア、ガレスの様な一流でありながら経験豊富な冒険者でも、疲労が溜まればあの程度のモンスターにも遅れを取るのか……）

それだけ、五十九階層のモンスターが強かったのだろう。

あの日、五十階層で期間したのは間違いだったかと思い返しつつも、ラックは刀を仕舞い前に出る。

「十八階層までだぞ」

死なれても困ると打算ありきで先鋒を務めることを了承した。

武術の習熟度は徒手空拳が最も高い。それに、現在使用中の十種影法術との相性もい

い。
「玉犬・渾」
　このダンジョンでは多くの式神は要らない。走、攻、守が揃う玉犬・渾が最優の性能を誇る。
　人も怪物も関係なく、後ろからは激毒が。
　当然、前にも怪物は群れをなしている。
（前以外は第一級が手を回しているのか。ま、この辺の階層はどれだけ数がいても烏合。玉犬は他に回すか）
　玉犬が後方に移動し、ラックは前方のモンスターを殲滅する。
　後方では玉犬・渾がガレス、椿に加勢する。
　毒が効かないラックの体質は式神にも継がれている。
　毒液を飛び散らせ、浴びながらも玉犬は怪物が如く暴れ回る。
「ラックの使い魔じゃ！今のうちに走れ！」
　玉犬・渾に怪物進呈し、ロキ・ファミリアは十八階層へと逃げ込んだのだ。
「はい、こっち終わり。次はどれ？」
　ロキ・ファミリアの野営地。
　そこかしこから苦痛の声が聞こえてくる中、ラックは毒を浴びたものの治療に専念す

る。
「ラック、次は彼を」
「あー、ハイハイっと」
幕を開け、風通しが良い天幕の中。
ラックは治癒魔法が使える者たちに混じって、毒を受けた者たちの解毒を行っていた。
反転術式での毒の治療。体内に侵入した毒物は特定後に除去するという、より高度な呪力操作と時間が必要になる。
解毒系の治療魔法を扱える魔道士であっても全快できないポイズン・ウェルミスの毒ではあるが、ラックならば時間をかければ治療が出来る。
天幕では一人を対象に解毒をするラックと、多くの者の傷を癒やし毒を緩和する魔道士が絶えず術を行使する。
これは十八階層が暗くなるまで続いたが、ラックは涼しい顔で本営で夕食をとる。
「よく続けて使えるな。疲れないのか？」
強力な朝から晩まで休むことなく治療を続けた方法に興味があるのだろう。『精癒』のアビリティを持つリヴェリアならば尚更だろう。
「それはスキルを使えば簡単。精神力の消耗を自己補完の範疇に収めればいいだけのこ

と」
「自己補完……自動回復の範囲内で反転術式とやらを行使するか。言うに易しだぞ、それに解毒はどうする？」
「あれは毒の除去をしてるだけ。中和じゃない。だからまだ二割ぐらいしか治療できてない。毒の治療には手順がいるから、一人を全快させるだけでも時間がかかる。重いやつから治療しても、あと三日ぐらいかかるかな」
　それでも、他の団員の解毒よりも早く、尚且つ確実な解毒が可能。
　それに、毒の除去によりポイズン・ウェルミスの毒を治療するのなら理解もできた。あれらの怪物の毒は中和できるほど弱い者ではないと、己の身で知っている者も多い。
「なるほどのう……それも呪術か」
「そう、使い勝手が良く見えるだろうけど、魔法と違って質が負（マイナス）に寄ってる。魔法の方が発展もしてる。大昔の魔法ぐらいの認識でいいと思うよ」
　古い呪詛ではなく古い魔法。
　古い英雄譚で時折描かれ、大規模な力から小規模の力を振るった呪術。御伽話にしかないその術の担い手。
　興味は尽きることなく話し合い、今日のところは眠りに着いた。

ーーーーーーーーーーー

翌日、早朝ーー

「ーーーーーオオオオオ」

遠方から聞こえる方向。それを掻き消す様に、次いで鐘の音が響く。

（アイズ……？）

今日も毒を受けた者の治療。

とぼとぼと患者が居る天幕へと歩くなか、十七階層へ続く洞窟から響く音に気がつく。

アイズが走って洞窟へと向かうのを見かけるが、仕事のため天幕はと向かった。

一人目の治療に取り掛かろうと毒の場所を探ろうとした時。

「ラックー！」

聞き覚えのある声。

つい先日、ホームで聞いた様な声。

「あるぇ？アルフィア……なんでここにいんの？」

振り返った先には白髪に異色の両目。後ろにはエルフに着物の集団と他数名。

そして、ベル・クラネル。

「ボロボロだね。それにで、どういう組み合わせ？」

「ラックさん、ヴェルフが……」
「ヴェルフ？ああ、足をやられたのか」
　そう言って気絶するヴェルフを見る。
（完全に気絶中か……澱月で追加する必要はないな）
「ちょっと君、いいかな？」
「わ、私ですか？」
「そう、治すから刀貸して」
　着物の少女。ラックは彼女が差す一本の刀を指す。
　現在、ラックは傷の悪化を防ぐため、状態維持の術式の使用中。
　武器の取り出しも武器の作成も、術式を変えなければ使用はできない。さらに、ここで術式を変えてしまえば帰りが一日延びる。
　ならばと、命の刀を使い、ヴェルフの義足をスパッと切り落とし治療する。
「わ、わかりました」
　命から刀を受け取り、居合の構えを取る。
　なるべく早く切り落とし、痛みを感じる前に治療する。そのために、ラックは今できる最速の技を使う。
　これは極東の貴族に伝わる、家伝の一刀。連綿と受け継がれる抜刀術、その原型に当

たる。呪術が廃れると同時に流派は廃れ、それでも残った技の原典。
シン・陰流。
「居合『抜刀』」
誰の目にも、刀を振るう瞬間が映らない。
それでも、リューとアルフィアにだけは知覚ができた。
構え、踏み込み、斬り方。アルフィアの才能が、リューの既視が、この居合抜きの知覚を許す。
「……」
「嘘でしょう……？」
その一刀からは一滴の血も出ない。術式の効果により、受けた傷が悪化することもない。
アルフィアはあの一刀を思考の中で吸収し、どう活用するかを思案する。
それよりも、リューの衝撃はアルフィア以上。あの構え、あの振り。あの一刀は、かつて冒険を共にした仲間の一刀。
「そこに寝かせて。傷を治す」
ベルはヴェルフを床に寝かせ、ラックが手をかざす。
反転術式により足は元の状態に戻され、ヴェルフの傷は癒え、ベルへと引き渡された。

「アイズ、フィンに滞在の了承をもらって。それとテントもね」
「わかった」
「あ、ありがとうございます」
　ヴェルフを担ぎ、ベルたちはアイズの紹介でフィンがいる本営へと歩いて行った。リューは何かを聞きたそうに時折振り返るも、ベルの方へ着いて行くことを決めたようだった。
「いよーし、ほら動いて動いて。足を生やしたぐらいでボーッとしてちゃ夜になっても終わらないよ」
　ラックの声に、治癒師たちはハッとする。
　おそらく毒以上の重体であろう少年の治療。冒険者を引退してもおかしくはない、そんな怪我の治療も容易にこなす。
　治療師としてのレベルの高さは、オラリオでも屈指と呼んでもいいほど。その事実に、ロキ・ファミリアの治癒師たちは舌を巻くほどだった。
　ーーーーーーーーーーーー
　皆が夕食を食い始めた頃。
　キャンプ・ファイアの方へと向かうため、テントを出て直ぐのこと。
「やっと終わったか」

「アルフィア……なぜここに？」
ヴェルフの治療の時はいなかった。
身バレがしやすく、爆弾の火種に成り得るアルフィアがダンジョンに。それもロキ・ファミリアの本営に。
ラックの疑問は当然の事。
「ベルを助けに」
「なぜ？」
「私の血縁だ」
「ああ、そゆこと」
短い問答でラックは納得してしまった。
そこから、治療にいなかった理由はフィンに話を通していたからだとも想像がつく。
「……なるほど。アルフィアは本営には来ない方がいい……って、フィンも言うか」
「ああ、私は『疾風』。リオンと外にいる。用があれば呼べ」
「はいはい」
それだけ伝えると、アルフィアは背を向けた。
七年前に冒険者だった団員はロキ・ファミリア内にも多い。仲間を失った者も。
フィンもラックの影がチラついたため、黙認したに過ぎない。

「ああ、それと。俺の帰りは三日後になる。後続に付いて行くことになってるから」
それだけ伝え、ラックも治療テントを離れ、フィンたちがいるキャンプ・ファイアに向かうのだった。
そして、次の日。ベルたちがリヴィラに向かっている間も変わらず治療。昼過ぎには全員の治療を終え、さらに次の日の朝にはロキ・ファミリアの先発が地上に渡る手筈になっている。
「お前は後か」
「うん。ゴライアス倒されちゃったから、先発じゃなくてもいいってフィンが……」
ゴライアスはアルフィアが討伐してしまったため、先発と後発は戦力が均等になるように編成された。
先発の主力はフィン、ガレス、ティオネ、ベート、椿、さらに多くのレベル４。
後発にはリヴェリア、アイズ、ティオナ、そしてラックが組み込まれている。
「そうか。じゃ、護衛はよろしく」
「うん」
他は武器屋道具の整備中。滞りなく準備が進む中、トラブルは神の手で運ばれる。

変異

先発隊が発つより前日。
アルフィアとリューはラックに伝えた通り、森の中で野営をしていた。
二人とも一切の言葉を発することなく焚き火を囲む。
そして、沈黙に耐えかねてか。先に言葉を発したのは、やはりと言うべきかリューだった。
「生きていたのですね……」
アルフィアはリューの目の前で死んだ。
あの時、アルフィアの目は死の覚悟をしていたことはリューも見ていたし、実際アルフィアも死ぬつもりだった。
「……ああ、私にはまだ、やることがあるらしい」
「やることですか……」
「ああ、ラックは態々私（たち）を生き返らせた。それには何か目的があるのだろう」
ラックは飄々とした態度をとる。だがアルフィアの目に映るラックには、ある程度の犠牲であれば止む無しとする冷酷さが見える。

こういった人物はアルフィアがかつて所属していたファミリアにも、アルフィアが現役で冒険者をしていた頃の他派閥にもいた。このオラリオでは珍しいというほどではない。

そのラックは、アルフィアとザルドの覚悟を無視し、了承があったとは言え黄泉帰りという命を弄ぶような事にまで手を出した。目的が、何も無いなんてことは無いだろう。

「目的ですか……」

「ああ、大方黒竜討伐だろが、どのように成し遂げるつもりかまでは奴に聞かねばわからん」

「黒竜、人類の悲願。彼に出来るのですか？彼はまだ冒険者になりたてのはずです。彼のレベルは？」

「レベル２」

ベル・クラネルと同じ。

オラリオの中でも２５％がレベル２の冒険者。オラリオの外でも時折見かけることがある。それがレベル２。

第二級冒険者のリューには、ラックが強いとは思えない。

恩恵を賜り、器を昇華させ、レベル４にまで至ったリューには恩恵という存在の大き

さがよく分かる。

「それは……大言壮語が過ぎる。まだ猛者のほうが出来そうなものです」

「フッ、バカ言え。アレは黒竜と同格だぞ。ヘラの眷属とゼウスの眷属が総出で殺し合っても、最後に立つのはラックであろうよ」

アルフィアの脳裏には八年前の領域が浮かぶ。

そして、アルフィアは感じている。ラックは八年前から成長している。恩恵を手にし、一つだけでも位階を伸ばした。

さらに、元々か増えたのか、もう一つの領域を目にした。

アルフィアが知る領域はこれで三つ目。見たのはアルフィアがヘラ・ファミリアいた頃に、八年前と数日前。

すべてが違う領域だとすれば、まだまだ手札はある。ステイタスの改変に領域を見たあの瞬間に確信した。

「あなたも……冗談を言うのですね……」

「どうとでも受け取ればいい。だが、奴の手元にはレベル6が二人いると言うのは忘れるな」

「レベル6……カリフ姉妹ですか……」

ガネーシャ・ファミリアが担う治安維持の協力で一躍有名となったカリフ姉妹。

レベル6に相応しい膂力に加え、その身体能力を十二分に使い熟す技量。
（シャクティの話では人格以外は問題のない人物……）
「ああ。あの性格の、特に姉を御す方法は力のみだろうな。それに、カーリー・ファミリアはカーリーの意向もあってか実力至上主義。その団長が弱くは無いだろう」
「強さ……それでもレベル2が勝てるとは……」
「レベルは問題では無いだろう。英雄の時代には精霊の協力はあったとはいえ、モンスターを退けることがあったと聞く。レベル6に勝る常人。肉体を鍛え上げればなんとかなるのだろう」
それはアルフィアが求めた、英雄の時代に闊歩した神に頼らぬ英雄。
黒竜を討てるのは、そんな傑物だと断じた。
そして十年以上前、神とその眷属たちは出会った。
レベル6、レベル7、レベル8、レベル9。
かつて、オラリオで最強と呼ばれた英傑たち。
彼らを蹂躙するのは、出来た存在は二つだけ。
そしてどちらも、神に頼らぬ混沌が生んだ怪物。
「彼がそうだと？神に頼らない。恩恵がなくとも強い、神なき時代の英雄と同じと……？」

「信じれないか？そうは見えないか？だが、あの一刀を見ただろう。そして、薄々気付いているのだろう。アレは我らが辿り着くべき、一つの極限」

「……」

静寂。

パチリ、焚き火の燃料が小さく爆ぜる。

火を通していた木の実を突き刺す枝を手に取り、木の実の上に載せられた香草を振り払う。

「知ってるか？リオン。この木の実はある香辛料を振りかけ、火を通すことでより上手くなる。ほら」

「あ、ありがとうございます……」

差し出された枝を手に取り、リューは木の実を口に運ぶ。

（空気感……）

そう思いながらも木の実を口へ運ぶ。

口に入るとともに、口内に広がる芳醇な甘み。それを際立たせ、決して邪魔することがない香辛料の風味。

「おいしい……」

元ヘラ・ファミリアが持つ、迷宮の知識を享受する。

そんな一幕から一夜が明け、出立を伝えるためにリヴェリアはアルフィアとリューがいる森へと進む。
「時間か？」
「ああ。ここにはアルフィアだけか？もう一人いると聞いていたが……」
焚き火を片付け、アルフィアは帰還に備えて剣の手入れをする。
剣をメインで使ってこなかったアルフィアは、ほんの少しだけ刃こぼれがあるこの剣の整備を欠かすわけにはいかない。
「後で追うそうだ」
「そうか……」
アルフィアが最近手に入れた安物の剣を手入れしているところを、リヴェリアは横から眺める。
「剣を使うのか……それに手慣れているな」
「ああ、あれだけ見たのだ。いやでも覚える」
戦いの日々。
前衛が剣の手入れをしている姿を思い返しながら、その所作をなぞる様に紙で錆を落とし、砥石で研いでいく。さらには剣に油を塗り、布で拭きあげる。
その所作は数十年戦ってきた剣士の様。

こうやって武器の手入れをする姿にガレスの姿が重なる。
「それは……サレナに習ったのか？」
「いや、習ってはいない。剣の手入れをしているのを見てな。少し見た程度だが、案外覚えている物だ」
そう言いながら、アルフィアは剣を鞘へとしまう。
用意は終わり、アルフィアはフードを被り、リヴェリアの後を追って本営へと向かった。
本営はすでにテントが片されており、多くの冒険者が集まっている。
（ベルがいない……あの小娘と小僧、主神もラックもいない。何かあったのか？）
しかし、この冒険者が集まる中にベル達の姿は無く、それどころかラックに二柱の主神もいない。
「少し捜索範囲を広げるか」とアルフィアが足先が向く方向を変えた時――
「なっ――!?」
足場の揺れ。
いや、これは階層の揺れ。
周囲の木々は左右に揺れ葉は音を奏でる。
心当たりは一つ。

「異常事態（イレギュラー）か!!」
天井一面に生える数多の水晶。
水晶は唸りながら混ざり合い、やがて体を成す。
「キエエエエエエエエッッ!!」
その叫びはミノタウロスが放つハウルに似ていた。
しかし違う。
これは完全な新種。
橙色の六つの瞳を持ち、背からは六肢の羽を生やす四足獣。
さらには、４５Ｍはあろう肉体を透明度の高い皮膚が覆う。
「竜!この階層で!!!?」
新たな怪物の出現。
事の始まりは数分前に遡る。
「――いやがったな!ラックさんは先に行ってくれ。後で追いつく」
「りょーかい」
並走していたヴェルフの言葉に、ラックは速度を上げて冒険者の集団の中へと飛び込んだ。
「あれは!?」

「『黒閃』だ。止めろ！」
「囲め囲め！」
立ちはだかる三人の上級冒険者。
同じレベルならば問題ないと、各々が武器を構える上級冒険者との距離を縮めていく。
そして一息。
「なっ!?」
「速え！」
パパパンッと三度の打撃音が響いたあと、三人の冒険者は他に倒れ伏す。
その勢いのまま、ラックはベルがいる広場まで一直線に進んで行く。
「てめぇ、見えてんのか!!」
「見えません！でも、透明化なんて甘いもの、ラックさんは使ってくれない！」
思い出すは特訓の日々。
「あの人は平気で景色に溶けるし、一秒に二十四回も動くんですよ！」
透明なはずのモルドの剣を躱し、さらに交わす。
見えないなんて、いつものことだ。
勘と経験、今までの超克で戦う、古代の英雄たちが振るう力が身に染みている。

「砲台ってなんですか!?一息であんな魔法、使わないでください！他にも！隕石は降るし、空気は掴むし、モンスターの大群を出すし、何にもなくても強いのに手数を順々に変えたりしないでください!!!」
「オメェ何言ってやがんだ!?――ぬぉわ!!」
「あるぇ?もしかして、結構根に持ってる!!?」
ラックがたどり着いた時には、すでにベルの優勢。
顔に一発殴られたような後があるものの、ベルはほぼ全快状態でモルドを圧倒する。
「ラックさん!?いや……今のはその……なんと言うか……」
「……」
「何か言ってください!!」
「はぁ、はぁ。テメェ……、随分と、余裕だなぁ!!」
意識が外に向いたと悟ったモルドの剣撃がベルへと向けられる。
ベルは背からの強襲を一瞥をくれることもなく避けると、モルドが持つ剣を蹴り飛ばす。
「ぐっ……。テメェら！ぼーっと突っ立ってんじゃねぇ!!やれ！やっちまえ!!」
「やめろー！やめるんだー!!」
リリに助けられ、この場に駆けつけたヘスティアが声を上げる。

だが、喧騒は止むことはなく、戦いの収束が見えることはない。
「ベル君！他の子達も！無駄な喧嘩はやめるんだ！」
声を上げるヘスティアだが、怒りの形相を浮かべるモルドは、怒鳴るように仲間に吠え続ける。
「やれ、やっちまえ！」
今日一日、モルドは恥を掻いただけだった。
怒りが収まるなんてことは到底なく、眼前のベルへ飛びかかろうと拳を振りかぶった。
しかし。
「――止めるんだ」
女神が発する神威。
静かな一言だが、その声にはラックであろうと畏怖を感じる神の威光。
「剣を引きなさい」
全員が女神に注目する。
この場にいる人間も。
この場であるダンジョンですら。
「ベル君！」

ヘスティアは走り出し、ベルは向けて体当たりを喰らわせる。
「無事かい!?怪我は」
「大丈夫です。僕の方こそ守れなくてごめんなさい……」
「そんなこと……」
ベルはヘスティアを胸に抱きながら、困り果てたように眉を曲げた。
「ベル……ま、大丈夫そうだね」
「ラックさん……えーっと」
気まずそうにベルがラックから目を逸らす。
そしてヘスティアのために動く冒険者たちが集まり、事の解決に安堵する。
しかし、その安堵は束の間だった。
「なっ――!?」
足場が揺れる。
そのダンジョンの異変にいち早く気付いたのは、やはりラックだった。
ダンジョンの怒りが発露すると同時に、ラックは異変に気付きその原因を理解する。
「やってくれたな。神ヘスティア……」
そして忘れてはいけない。
後天的ではあるが、彼は六眼と無下限の抱き合わせ。

因果は渦巻き、ダンジョンという閉鎖された空間に溜め込まれる。
そして、ヘスティアによって神威という起爆剤が放たれた。
ダンジョンは怒りと憎悪に打ち震え、更なる位階へと昇る。
そして今ここに、新たな怪物が誕生する。
そして、それは誕生した異様の竜から放たれた。
この階層を呑み込む、青い閃光を纏う咆哮が。

臨界

「おいおい、ウラノス。こんなのは聞いてないぜ……」

眼前に広がる炎の海。

それを作り出した一体の怪物。

天井にあった結晶のような色をする龍。ダンジョンの怒りそのもののように猛り、怪物はそれを炎として吐き出した。

その熱線で十八階層は炎の絨毯が敷かれ、リヴィラの街の三割ほどが火の海となった。

「い、生きてる……のか？」

炎が放たれた先のうちの一つ。ベルたちがいる広場は静まり返っている。誰もが死を直感したであろう熱線が直撃したと思われたが、少なくともこの場に死者は一人としていない。

そんなことを確認することも出来ず、起きたことを脳内で処理することで精一杯となる。

「これは……」
状況からを飲み込める、唯一はベルだった。後ろを振り向くと、熱線の通り道として、階層の壁には大穴が開けられている。
「あー重かった。そう簡単に曲げさせてはくれないな」
何もない空間を掴み取り、減速させながら地面へと近づく白髪が気の抜ける口調で舞い降りる。
「ラックさん！」
「お、怪我はない……みたいだね。無事で良かったよ」
ベルが考えた通り、熱線を逸らしたのはラックの術式だ。
ベルもそれが出来そうな術式を見たことがあるから、その考えに至った。術式のタネまでは知らないが。
「あれが何かわかりますか？」
「さあ？新種とかじゃない？」
図鑑では見たこともないモンスター。ラックの言う通り、ベルもあの怪物は新種のモンスターだと考えている。
高台になっているこの広場から下を覗き込むと、ロキ・ファミリアの団員は不確定要素を多く孕む新種の怪物を相手に討伐するつもりでいるようだ。

「アイズたちはやる気満々だね」
「みたいですね。僕も前に出ます。ラックさんはどうしますか？」
「もちろん行くよ」
　そう言って異常事態の原因である新種のモンスター。天井を覆う白水晶にも似た色を持つ龍へと目を向ける。
　問題は神の安全だな、と考えているとふと前線からこちらへと走る灰色の髪が目に止まる。
「ちょうどいいところに……」
「どうかしましたか？」
「いいや、何でもない。それじゃあ、始めようか」
「はい！」
　ラックの独り言を聞くものはいなかった。
　そして八人の冒険者が森を抜け、階層中央地帯へと身を投じるのだった。

「やあああああっ!!」
「はあああああっ!!」
　ティオナが超大型武器、大双刀（ウルガ）を振るう。

それと同時に、風を纏ったアイズの剣が振るわれる。
『キイイィィィ!!!!』
耐えるような声に合わせ、水晶龍は翼を使い薙ぎ払う。
重く、広い翼は足元で攻撃を加える冒険者たちを巻き込み、辺りの木々ごと一掃する。
「あぶな！アイズ、そっちは大丈夫？」
「うん、大丈夫」
声の主、前衛部隊の中でも高位の冒険者である二人だけが、翅による一掃を凌ぎ切る。
しかしそれでも、二人の衣服には細かい傷が生まれている。
「ティオネ！」
「うんっ！」
二人が左右に分かれ、同時に攻撃を仕掛ける。それに合わせるように、水晶竜も体を回転させた。その勢いに飲まれぬよう二人は動きを止める。そして、回転が終わったと同時に、再び攻撃を始めた。
「【目覚めよ・エアリエル（テンペスト）】」
アイズが呟くと同時、剣身に神風が宿り、それが弾けるようにして放たれていく。
「やあああぁぁぁ!!」
アイズの放った一撃に合わせて、ティオナがさらに追撃を仕掛ける。水晶龍の体は振

りぬいた翼の影響で硬直しているのか動かない。それを無視して二人は攻撃を繰り出し続ける。

『――――』

喉元、胸から腹にかけてに焔が灯った。

それは徐々に大きくなり、やがて顎へと辿り着く。

『ゴアアアアアアッッッ!!!!』

顎から放たれたのは、熱気を帯びた蒼の息吹だった。

吐き出された蒼炎はアイズとティオナを飲み込む。回避行動に移る暇も与えない速度。咄嗟の判断でティオナはアイズを抱えて飛び退く。だが、完全に避けきることは出来ない。

「やば!?」

「――――っ！」

しかしそこへ対抗するようにして大飛沫が飛ぶ。

まるで壁のように展開されたソレは、灼熱の息吹を完全に受け止めていた。

「あんまり、危ない橋は渡らない方がいいんじゃない？」

水壁の向こう側から聞こえてくる言葉。

大きな一つの影を率いているのは、ラックだ。

二人の視線がラックへと集まり、そしてその様子を隙と、捉えたかのように水晶龍の腕が伸ばされる。
「アイズ、ティオナ、気を抜かない！次来るよ！桜花!!」
「任せろぉぉぉ!!」
ラックの声に応えるように桜花は精霊（サラマンダー・ウール）の布を巻いた盾を構える。
振り下ろす細腕。静かな蒼炎を纏い、桜花が敷く全力の防御へと迫る。
「うおおおおぉぉっ!!!!」
腕と盾、精霊を纏う布が交錯する。
瞬間、起こるのは爆ぜる蒼炎。
桜花を中心に、蒼炎は地面と溶け出し、辺りへと伝播する。
「ぐぅ……！」
桜花の防具からは煙が立ち上っている。
「いいぞ桜花。鵺、落とせ！」
『――――――ッッ!!』
ラックの言葉と共に、水晶龍の頭上から少年が降る。
空へと運んだ怪鳥は影へと還り、影の黒から鋼が這い出る。
「っ!!」

現れたのは、巨大な剣。
横薙ぎに振るうには大きく、だが振り下ろすには適する鉄塊。
ベルはそれを両手で握り締めると、水晶竜の首めがけて一気に降り下ろした。
『ギイイッ!!』
金属音に似た悲鳴が上がる。
手首を硬質な手応えが打ち抜くも、しかしそれを裏切るようなすり抜けるような感覚。
大剣は砕け、同時に水晶龍の首元の鱗が小さく欠ける。
（硬い……けど）
上に注意が向いた。
そう思った瞬間に、今度は水晶竜の爆炎を纏う腕が衝撃に揺れる。
「――ッ！」
ベルとラック、桜花が作り出した龍の六目に観測されない死角。そこを縫うように、疾風が駆け抜ける。
真横から、速度を乗せた渾身の一打――――振りぬいた木刀には確かな手応えが走る。
快音を響かせ、自重を乗せた腕が強打された衝撃で、支柱を失った水晶龍の体勢が崩れる。

「ナイスタイミング！」
「いえ！」
覆面の冒険者、リューに向かい、ティオナは親指を立てながら笑みを向ける。
そして、崩れた水晶竜の腕に更なる追撃を加えようとティオナが前に出た時だった。
『キイイィィィ、アアアアアアアアアアアアッッッッ!!!!!』
階層全体を水晶龍の吠声が包んだ。ビリビリと肌を打つ振動。
「なにこれっ?!」
反射的に動きが止まる。
一瞬の硬直、その隙を突いて水晶龍が大きく首を振った。
「っ!?」
その巨躯に見合わぬ速度で放たれる一撃。
避けることも防ぐこともできないまま、ベルはその攻撃に晒される。
「ベル様！」
リリが叫ぶ。その声を聞きながらも、ベルの体は吹き飛ばされた。木々を倒し、岩を割り、それでもなお止まらずに転がっていく。ようやく止まった時、その体は地面に倒れ伏していた。
「あ……」

全身を襲う鈍痛の中、視界の端に映るのはこちらへ駆け寄ろうとする少女の姿。
そして後ろには――――
『グルァァァッ!』
その行く手を阻むようにして立ちふさがる一頭のヘルハウンド。
「【ファイアボルト】!」
咄嗟の判断でベルは魔法を放つ。雷の如き炎の一撃が狼を貫くと同時、森からは更なる増援が現れる。
「増援?!声につられて!?」
リリが叫んだ。
見れば、その数は数十を超える。中にはミノタウロスやゴブリンといった中層レベルのモンスターも含まれている。
「オラァァッッ!!」
「雑魚どもが邪魔すんなぁー!」
「来るんじゃねえぇぇッ!」
他の冒険者たちも必死に応戦するが、いかんせん数が多すぎる。
加えて、敵の殆どが中層のモンスター。この場の戦力では抑えきることは不可能に近い。

「【九魔姫（ナイン・ヘル）】！」

　高台から魔法による援護を繰り返す魔導士部隊。それを指揮するリヴェリアの元へ、和服の少女を抱えたアスフィが舞い降りた。

「【万能者（ペルセウス）】か」

「お久しぶりです。この少女で彼が選んだ人達は揃いました。三分後この少女の魔法で水晶龍の動きを止めます。そこから三十秒後に魔法の照射をお願いします」

「了解した。神々はどうした」

「それには【静寂】が。私はこれらの伝達に行かせていただきます」

　そう言うとアスフィは再び飛翔し、戦線へと迫る。

「ああ、気を付けろ」

　その背中を見つめながら、リヴェリアも覚悟を決める。

　そして――

『キイイイイ、アアアアアアアァァァァァッッッッ!!!!!』

　水晶龍の絶叫に、大量のモンスターが動き始める。

（状況が変わってきたか。三分……アイズ、ティオナ、保たせてくれ）

　祈るように呟くリヴェリアの背後では、既に戦闘準備を整えたエルフ達が詠唱を開始

していた。

状況を俯瞰し、ラックは次手の組み立てを思案する。

（他の術式を……いや、手数を晒すだけか）

確実に水晶龍を打倒出来る術式は、周りの冒険者の影響を考えると使用は不可能。

十種影法術の領域では、呪力で足場を作る技術を持たない冒険者を巻き込むことになる。

そうなれば、大局的な冒険者側の敗戦は免れない。

だから――――

「少し、本気でやろうか」

まずは増援を断ち、今いる数百に達しようとするモンスター。

（この数に絞る……）

四方八方は埋められている。だが、術式の強度を上げ、今の状況に対応する。

交差させる指はいつものもの。普段、周囲への影響と汎用性を考慮し落としていた出力を、己にとって自然な形であるスケールで顕現させる。

「鵺」

ラックの影からその異様を形成し顕れたのは、人面の巨鳥。翼を広げ、階層の天井から見下ろす巨体。

「なんだよ、ありゃあ……」

「デカすぎんだろ……」

冒険者たちの上空に立つ怪鳥に、戦闘中の冒険者が声を漏らした。

新たな異形、新たな怪物の出現に、誰もが息を呑む。

そして、怪鳥が纏う呪力は帯電し――――降る。

『――――――』

十にも昇る閃光が、モンスターで埋められた森林を覆った。

荒れる轟音と、白化する景色が階層全体を埋める。生きとし生ける怪物の、一切が灰燼と帰す。

そして、その豪雷の一本は、臨界に達する水晶龍にも届く。

『ゴアアアッッ!!』

苦痛に満ちた声を上げる水晶龍。放たれた雷光が、水晶の鱗を焼く。

着弾点には炭化した木々と、モンスターの魔石と灰だけが残っていた。その威力の落

雷が注がれる。

『ゴアァッ!!グウゥ……!』

しかし、砕かれた鱗を露出しつつも耐えられる。さらには――――

『ゴアアアアアアアアアアアアッッッッ!!!』

モンスターが吠える。蒼い、命が如き色の炎を振りまき、胸部のにある発光器官へとエネルギーが蓄積する。

全身で燃やす命が暴発したかのように溢れさせる臨界状態。

「ヤバ……!満象!!」

ラックが焦りの声を上げた。即座にゾウの式神を喚び出し、水晶龍のまき散らす炎を鎮める清水の雨を降らす。

ラックはこれに相当な能力を割く様子を見せ、抑えきれなかった蒼炎が冒険者を焼く。

「クソッ!アイズ、ティオナ、リュー、龍の足止め!千草は桜花の回収、急いで!」

「う、うん!」

千草が桜花を引きずり、戦線を離脱する。

残り三分。状況は少しずつ進んでいく。

冥灯

（やっぱり、ダメなのか……？）

ベルは唇を噛んだ。いくらダメージを与えられても倒すことが出来ない。この臨界状態をこのまま続けていればいずれは倒れるだろう。だがそれまでにどれだけの被害が出るのか。

そうして思考しているうちにも戦況は大きく動く。

見知った中でもない冒険者同士は、緻密な連携を捨て各々の間合いを空け戦線の維持を務めた。

全員が、作戦の内容を悟っている。残り時間はそう遠くない。

ベルにも、それはわかった。

「ベル！無事か!?」

「ヴェルフ！」

ヴェルフが声を上げ走り寄ってくる。

「ヴェルフ、準備は！」

「問題ないらしい。ラックさんの方は……」

「今は手一杯になってるけど、タイミングは会わせてくれると思う」
「ならいい。それとベル、これを使え」
そう言って、ベルに渡したのは飾り気がない、柄と刀身だけの長剣、武骨さがありながらも、炎が煌々と照るような、美しい深紅の――
「魔剣？」
「ああ、いつか――カッコつけたけどよ…意地と仲間を秤にかけることは、俺にはできねえ。だからお前に託す」
「ヴェルフ……わかった、任せて！」
ベルは立ち上がる。
「そいつの銘は火月。振るえるのは一度だ。ベル、ミスんじゃねえぞ」
「わかってる！」
ベルは水晶の炎を纏う、龍を見据えた。
憧憬を、願望を、自分の最大火力を目指し限界を解除する。
己の腕に白光を束ね、蓄力（チャージ）を開始する。
魔剣に鐘の音を載せる。
戦局に、一手を――――

「鐘……？」
アイズが呟く。
「えっ？」
その視線の先――魔剣を携える少年の姿があった。
「アルゴノウト君だ！」
ティオナは嬉しそうな声を上げた。
だが、鐘の音に釣られるのは水晶龍も同じことだった。
『ゴアアアアアアアアアッッ!!!!』
天を衝くような雄叫びを上げると、迷宮に満ちる魔力を活性化させる。噴出する蒼白炎。ベルに命中しないのは幸運か。
しかし、振るわれる腕が、尾が、翼が、ベルの体を捉える。
「やらせない！」
それを阻むのは、ティオナだった。
ベルの前に立ち塞がり大双刀（ウルガ）を振るい、攻撃の軌道を逸らす。
『グルルルル……』
苛立たしげな水晶龍の眼光がティオナを貫く。

ティオナはそれに怯まず、真っ直ぐに射貫く。
「クラネルさんに攻撃を近づけてはいけない。申し訳ありませんが死守です!!」
「わかった!」
アイズの風も一層強く吹き荒ぶ。
水晶龍の攻撃は全てティオナが捌き、アイズは隙を見て風の刃で牽制する。

（あれは……少年――）
「命、と言ったな。詠唱を開始しろ」
「はい？ですがまだ時間では……」
「いい、急げ」
リヴェリアの声で我に帰った少女は慌てて詠唱を開始した。
策の引鉄に選ばれたのは、先日昇華（レベルアップ）したばかりの冒険者。
桜花と同じく、【タケミカヅチ・ファミリア】に所属する武芸者。
「【掛けまくも畏（かしこ）き――】」
ヤマト・命は与えられた使命を全うするため、全霊をこの一撃に。
「【いかなるものも打ち破る我が武神（かみ）よ、尊き天よりの導きよ。卑小のこの身に巍然（ぎぜん）たる

御身の神力(しんりょく)を――――」

そして、リヴェリア達、魔導士部隊が続く。

「終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風(うず)を巻け――――」

リヴェリアの言を皮切りに、魔導士たちの詩(うた)が響き渡る。

勝負は一度。精神力の残りを考え、魔導を紡ぐ。

詠唱が織りなす魔力の渦。

水晶龍の瞳が高台へと向けられる。

『グルルルルゥゥゥ!!!!』

唸り、喉元が赤に染まる。

「――注意が!」

水晶龍の焦点が移り、喉元の焔が放たれる予感を感じる。

アイズが焦りの声を上げると同時、二人の冒険者が次手へと動く。

「お前の相手は……こっちだあああああっっ!!!」

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤(ちりば)む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火(せいか)の加護を――――」

ティオナは超重量級の大剣を回転させ、水晶龍の顎を打ち抜く。
そしてリューも詠唱を始めながら、魔力を発し囮となる。水晶龍の逡巡する判断の隙を縫い、ティオナの一撃で水晶龍の歩を止める。
『グウウウッ!?』
超重量の衝撃に水晶龍の動きが止まる。だが、リューの囮は余計な注意を引き付け、周囲のモンスターを呼び寄せる結果となってしまう。跳躍し、体は水晶龍の目の前――――空中でモンスターたちの的になる。
しかし、近く――――影より飛び出すラックの手にはいつか見せた凡庸な刀。
「シン・陰流――――【簡易領域】」
半身の構え。刀を鞘に納めたまま、空中だというのに地に足が付いたような前傾の姿勢。
簡易領域により、自身から半径２．２１メルド内に侵入したリューを除く全てを全自動反射で迎撃する。さらに、刀全体が過剰なまでの呪力を纏う、ラックのオリジナル。
「居合――――【曼珠沙華（マンジュシャゲ）】」
都合、六条。
彼岸のごとき赤に染まる呪いの斬閃。神速の抜刀と共に長刀は分裂し、さらには呪力

の刃は九つに割れる。上下左右前後、居合で収まらぬ術が空間を制し、詠唱を次に繋げる。

「【汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人（ともがら）。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ】」

そして、後方から響く。

「引けええええええ!!」

後退の合図。それは、策の引鉄。

「【フツノミタマ】!!」

少女の声が戦場を渡り、水晶龍を捉える光剣が直下する。

重力の檻として、水晶龍を地に縫い付ける。

そして続く。

「【星屑の光を宿し敵を討て】！」

全ての魔導士の詠唱が終わる。

そして、最前線で時を計らう。

『〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッ!!!?』

圧倒的な膂力の差。

徐々に上体を上げる水晶龍。だが、すでに策は始まっている。

「【ウィン・フィンブルヴェトル】!!!」
「【ルミノス・ウィンド】!!」
相性を考えた三条の吹雪。それの数瞬後、響く数多の魔法名。
同属性の魔法の親和により、ウィン・フィンブルヴェトルを芯とする極寒の槍の顕現。
それを、緑風の大光玉が連なり推し進める。
緑風に乗る槍撃と、重力が接す寸前――――

少し前。
戦場の只中、大量の中層のモンスターを相手にするアスフィは、唐突に話し始めたラックの言葉に耳を傾けた。
「上で待機している魔術師どもの魔法を同所同時にぶつければ、相当の体力を削れるだろ」
ラックのモンスターを処理する速さが上がる。アスフィの負担が徐々に減り始め、話す余裕が生まれてくる。
「だが、その同時攻撃。寄せ集めの魔術師で足りるのか？」
「問題ない。放つ魔法をリューの魔法でスピード調整すれば、同時での着弾は問題ない。魔法は……土、いや氷に限定するのが好ましいか……」

簡単にいう話。巨体ではあるが、動き回るモンスターを前に同時での魔法の着弾。
「だが、それだと着弾箇所がブレるでしょう。冒険者たちは寄せ集め。上手く行きますか？」
「止まった的ならできるでしょ。そこで刀を持ってる和服ちゃんの魔法【フツノミタマ】。ドーム状の重力結界を展開する魔法は、あの怪物を留めるのに丁度いい」
ラックはモンスターを全て引き受け、身軽になったアスフィが飛翔する。
「緩衝材になるかもしれない結界は俺が解く。その策を広めて回れ」

（フツノミタマは結界魔法。呪術的に見ればこれは領域だし、呪術改変（スキル）の解釈的には魔法とスキルは術式。これを中和し解体する方法）
「【領域展延】」
魔法（フツノミタマ）の結界に触れる。
ラックの身を包む空の庭。呪術改変（スキル）と術式を共鳴させ、空白の領域にフツノミタマを流し込む。
この解体の精度は領域の方が速い。
だが、ラックと命の間を隔てる、確たる力量の差。

命の半可とラックの卓越。
内と外を断つ結界は、氷柱の必中が成る瞬間に解する。
『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!!!』
水晶龍の炎が荒れる。大質量の氷は、冥灯の炎と拮抗する。
熱により氷は解けだし、時間が過ぎれば氷は消失するのが自明。
「そんな……」
どこかで冒険者の一人がつぶやいた。
これはリヴィラ最強の魔法ともいえる一撃だと確信があったからだ。
だが、経験を積んだ冒険者はこの先に冒険があると――何故だか確信できた。
「待ってたぜ!この時をよおお!!!」
空を疾走る伝令は、ヴェルフに言った。
『もし、水晶龍の炎が最高潮になったとき、あなたの魔法をお願いします』
『はあ!?急になんだよアンタ』
『ただの伝令です。私にも意味は分かりませんが、お願いしますよ!』
伝令は短く、訳も分からないままに空を駆けた。
それから、ヴェルフは中衛と前衛の間で待った。
そして、その時が来た

「【燃え尽きろ、外法の業】！」
纏まる魔法を転じさせるために。拮抗する炎と氷を解け合わせるために。
なにより、友が駆ける道を開くために。
「【ウィル・オ・ウィスプ】!!」
その瞬間、誰もが焼ける炎に目を焼かれた。
己の炎と、敵の氷。それらは転じ、混ざり、大炎界を織り成した。
『――――――オオオオオオ!?』
全身が燃える。体の鱗を焼き、青白い体躯が赤に染まる。
爆散する魔力を受け、長い戦闘の中でも一番の致命傷を受ける。
それでも、瞳が冒険者を捉える。
「三分――――」
ベル・クラネルの静かな声が、水晶龍の耳を刺した。
【英雄願望（スキル）】の引鉄、思い浮かべる憧憬の存在は、『英雄サルージャ』。
商人から成り上がり、炎の剣と仲間とともに強大な王国の陰謀を打ち砕いた、優しき英雄。
偉大なる英雄を幻想し、英雄願望（スキル）は魔剣の炎全てを剣身に纏わせ、赤は黒く脈打つ。
ベルは一撃のためだけに名付けられ、友より伝えられた真名を叫ぶ。

「火月ぃいいいいいいいいいいいいい!!」

大鐘楼の音を高らかに響かせながら、ベルは駆ける。進路には誰もいない。魔力暴発により退避した冒険者が固唾を呑んで見守っている。

見える背中は、まさに英雄。

そして――風が吹く

「リル・ラファーガ」

アイズは剣を前に出し、風をベルの元へと届ける。

『――――――――』

ベルの剣が炸裂する。

風は炎と共鳴し、炎を爆発的に燃え上がらせる。

そして炎は静かに【英雄願望(スキル)】により剣へと押し込められる。

外見以上の質量を孕みながら、龍の顎を砕き、腹を裂き、尾を断ち切った。

純白の極光だけが残る一刀。

白煙が晴れ、黒剣を振り抜き固まるベルの姿が顕わになる。

「消し飛びました……」

リリは茫然とこぼした。

水晶龍は幽角と呼ぶにふさわしい、幽かな蒼に染まる角のドロップアイテムを残し、

体を灰へと果てる。
　その意味を、冒険者は理解する。
「――――うおお!!」
　次の瞬間、大歓声が轟き、空間を揺らす。
「あ〜、終わったァ〜〜」
　ラックはその場で地に背を預け伸びをする。
　死者は見える範囲にはいない。
「終わったな」
「お、アルフィアじゃん。神の護衛ご苦労」
「ああ」
　そう呟き、アルフィアは眩しそうにベルを見つめる。
　それは我が子の成長を身にしみて感じるような、親の顔だった。
「なに婆臭い表情してんの?」
「殺すぞ」
　十八階層での激闘は終わった。
　冒険者たちの喜びと、美女の殺気を伴って。